学問とは実学、すなわちサイヤンス

日本体育学会

70

2019
9.10-12
KEIO UNIVERSITY

70年の体育・スポーツ科学の
発展・努力にメダルを。

報告書

一般社団法人
日本体育学会 第70回大会

2019年 9月10日(火) 11日(水) 12日(木)

会場 慶應義塾大学日吉キャンパス

慶應義塾大学

はじめに

この度、日本体育学会第70回大会を2019年（令和元年）9月10日（火）、11日（水）、12日（木）の3日間にわたり、慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催致しました。先ずはここに、日本体育学会第70回大会報告書を発行できましたこと、関係の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

大会は初日から台風一過で厳しい残暑の中の開会となりましたが、2,000名を上回る非常に多くの方々の参加を得て大きなトラブルもなく成功裏に終えることができたと思っております。このことはご後援頂きました数々の組織関係の皆様、また、ご協賛頂きました数多くの企業・大学・団体関係の皆様、そして日本体育学会および東京体育学会関係の皆様、慶應義塾大学関係の皆様、その他大勢の方々のご尽力とご協力の賜物と主催者を代表してこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。

大会はそのテーマを慶應義塾の創始者である福澤諭吉の「学問とは実学、すなわちサイヤンス。これすべて人間交際（じんかんこうさい）のため」という言葉から「学問とは実学、すなわちサイヤンス」と掲げ、研究発表の場、そして人と人とがより深くつながりを持てる交流の場を心掛け運営致しました。

振り返れば、2016年10月に日本体育学会深代千之会長より「3年後の70回大会は是非とも慶應義塾大学で開催して頂きたい」というご意見をお伺いしたのが今回の始まりでした。「大会運営その事自体を好み面白いと思う人々で担い、それにより発生する人と人とのつながりを楽しんで頂きたい」とも伺いました。その後、我々慶應義塾大学体育研究所の全教員の中でお引き受けすることを決めましたが、慶應義塾大学には体育あるいはスポーツ科学、健康科学等を専門とした学部がなく、大会運営については不安材料も多くありました。

しかしながら、前述したように多くの皆様方のご尽力、ご協力を賜ることが叶い、大会を開催できたこと本当に良かったと思っております。そして大会運営を通じ得た多くの皆様方とのつながりは慶應義塾大学にとっての宝物となりました。中でも会場設備、設営等を一手にお引き受け頂いた株式会社セレスポ様、印刷物の作成およびデザインに係わるすべてをご担当頂いた株式会社アド・プリント様には、1年半に渡り定期的なミーティングへのご出席も含め感謝申し上げます。また大会当日の会場において運営スタッフとしてお手伝い頂いた国士館大学、日本女子体育大学、日本体育大学、慶應義塾大学の学生諸君の皆様には大変にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

スポーツによる平和や共生の実現が世界から求められている現状において、70回を重ねた日本体育学会は、築いてきた「科学（サイヤンス）」によって今こそ社会の課題と向き合い、体育・スポーツの社会的役割を明確に示していく必要があると実感いたしました。本大会において、我々が人間交際を担うサイヤンス集団として、これから何を視野に持ち、国民や世界に何を発信すべきなのか今後も共に考えていきたいと存じます。

最後になりましたが、ひとえに皆様の御蔭で大会が成功裏に開催できましたこと、心より厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

2019年10月吉日

日本体育学会第70回大会組織委員会

委員長　石手　靖

日本体育学会第70回大会

期　　間　2019年９月10日（火）、11日（水）、12日（木）

会　　場　慶應義塾大学日吉キャンパス

主　　催　一般社団法人　日本体育学会
日本体育学会第70回大会組織委員会

担　　当　日本体育学会　Bブロック　東京

主　　管　慶應義塾大学

協　　力　東京体育学会
公益財団法人　横浜観光コンベンション・ビューロー

後　　援　神奈川県
神奈川新聞社
川崎市
川崎市教育委員会
公益財団法人　日本オリンピック委員会
公益財団法人　日本障がい者スポーツ協会
公益財団法人　日本スポーツ協会
スポーツ庁
独立行政法人　日本スポーツ振興センター
横浜市
横浜市教育委員会
読売新聞横浜支局　（50音順）

大会本部　〒223－8521　神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1
慶應義塾大学体育研究所内
日本体育学会第70回大会事務局
大会ホームページ　https://ipe.hc.keio.ac.jp/jspe70/

目　次

大会日程 …… 4

大会役員・大会組織委員会 …… 7
大会実行委員会 …… 7

全体概要

1. 大会運営の概要 …… 8
2. 大会の実施について …… 9
3. 大会を通じての対応を振り返って …… 14
4. 大会運営上の反省点など（まとめ）…… 18

学会本部企画

企画シンポジウム１ …… 20
企画シンポジウム２ …… 22
企画シンポジウム３ …… 23

大会組織委員会企画

基調講演 …… 25
特別講演 …… 26
体育史専門領域合同シンポジウム …… 27
企画シンポジウム …… 28
ランチョンセミナー1 …… 30
ランチョンセミナー2 …… 30
ランチョンセミナー3 …… 31
ランチョンセミナー4 …… 31
ランチョンセミナー5 …… 32
ランチョンセミナー6 …… 32
ランチョンセミナー7 …… 33
ランチョンセミナー8 …… 33
ランチョンセミナー9 …… 34
ランチョンセミナー10 …… 34
パネル展 …… 35
日吉台地下壕見学ツアー …… 36

領域横断セッション …… 37

専門領域企画・一般研究発表

00 体育哲学 …… 38
01 体育史 …… 40
02 体育社会学 …… 42
03 体育心理学 …… 44
04 運動生理学 …… 46
05 バイオメカニクス …… 48
06 体育経営管理 …… 50
07 発育発達 …… 52
08 測定評価 …… 53
09 体育方法 …… 54
10 保健 …… 55
11 体育科教育学 …… 56
12 スポーツ人類学 …… 57
13 アダプテッド・スポーツ科学 …… 58
14 介護福祉・健康づくり …… 59

収支決算報告書 …… 61
監査報告書 …… 62

大会プログラム集抜粋 …… 62

大会日程　1日目　9月10日（火）

			9:00–10:00	10:00–11:00	11:00–12:00	12:00–13:00	13:00–14:00	15:00–16:00	16:00–17:00	17:00–18:00
学会本部企画		独立館 DB202						アフタヌーン・ソーシャル		本部企画 シンポジウム1 16:10–18:10
学会本部企画		独立館 DB203	本部総会 9:00–10:20					アフタヌーン・ソーシャル		本部企画 シンポジウム2 16:10–18:10
大会組織委員会企画			日本アクティビティ協会/株式会社プレイケア、KPMGコンサルティング			ランチョンセミナー1 12:30–13:30 【独立館D101】	領域横断セッション: オリンピック・パラリンピック 13:30–14:30 【ポスター会場1:22】	基調講演 15:00–16:00 【独立館DB203】		
大会組織委員会企画				セノー株式会社		ランチョンセミナー2 12:30–13:30 【独立館D307】	領域横断セッション: トレーニング 13:30–14:30 【ポスター会場2:23】			
大会組織委員会企画				日本バスケットボール学会		ランチョンセミナー3 12:30–13:30 【独立館D308】	領域横断セッション: 大学生 13:30–14:30 【ポスター会場3:D201】			
大会組織委員会企画				公益社団法人日本フィットネス協会		ランチョンセミナー4 12:30–13:30 【独立館D412】				
大会組織委員会企画			パネル展 【独立館D204】							
専門領域	00体育哲学	独立館 D410		口頭発表① 10:30–11:30	口頭発表② 11:30–12:30	運営委員会 12:30–13:30				
専門領域	01体育史	独立館 D311		シンポジウム 10:30–13:00						
専門領域	02体育社会学	第4校舎B棟 J24		口頭発表① 10:45–11:40						
専門領域	02体育社会学	第4校舎B棟 J29		口頭発表② 10:45–11:40		評議員会 12:00–13:00 【独立館D408】				
専門領域	03体育心理学	第4校舎B棟 J21		口頭発表① 10:30–11:50		理事会 12:00–13:30 【独立館D405】				
専門領域	04運動生理学									
専門領域	05バイオメカニクス	第4校舎B棟 32		口頭発表① 10:30–11:30	口頭発表③ 11:30–12:30					
専門領域	05バイオメカニクス	第4校舎B棟 33		口頭発表② 10:30–11:30	口頭発表④ 11:30–12:30	理事会 12:30–13:30 【独立館D402】				
専門領域	06体育経営管理	第4校舎B棟 12		口頭発表① 10:30–11:30	口頭発表② 11:30–12:30					
専門領域	07発育発達									
専門領域	08測定評価	第4校舎B棟 13		口頭発表① 10:40–11:20	口頭発表② 11:30–12:00	理事会 12:30–13:30 【独立館D404】				
専門領域	09体育方法	第4校舎B棟 J14		口頭発表① 10:30–11:30	口頭発表③ 11:30–12:15					
専門領域	09体育方法	第4校舎B棟 J19		口頭発表② 10:30–11:30	口頭発表④ 11:30–12:15	理事会 12:30–13:30 【独立館D409】				
専門領域	10保健	独立館 D413			口頭発表① 11:00–12:00	理事会 12:30–13:30				
専門領域	11体育科教育学	独立館 D307		口頭発表① 10:30–11:30						
専門領域	11体育科教育学	独立館 D308		口頭発表② 10:30–11:30						
専門領域	11体育科教育学	独立館 D309		口頭発表③ 10:30–11:30		理事会 12:00–13:00				
専門領域	12スポーツ人類学	独立館 D310			口頭発表① 11:00–11:40	世話人会 12:00–13:00	総会 13:00–13:30			
専門領域	13アダプテッド・スポーツ科学	独立館 D411		口頭発表① 10:30–11:45	口頭発表② 11:45–12:45	評議員会 12:50–13:30				
専門領域	14介護福祉・健康づくり									

大会日程　2日目　9月11日（水）

9:00　10:00　11:00　12:00　13:00　14:00　15:00　16:00　17:00　18:00

学会本部企画			名誉会員懇談会 12:00–13:00 【独立館D303】 本部企画 シンポジウム3 15:00–17:00 【独立館DB203】
大会組織委員会企画		大会組織委員会	ランチョン セミナー5 12:00–13:00 【独立館D101】 大会組織委員会企画 シンポジウム 15:00–17:00 【独立館D101】 特別講演 17:10–18:00 【独立館DB203】
		体育心理学専門領域	ランチョン セミナー6 12:20–13:20 【第4校舎B棟J21】
		特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会	ランチョン セミナー7 12:00–13:00 【第4校舎B棟J19】
		一般社団法人日本フライングディスク協会	ランチョン セミナー8 12:00–13:00 【独立館D307】
		パネル展 【独立館D204】	

専門領域			
00体育哲学	独立館 D410	シンポジウム 9:00–11:00 総会 11:00–12:00 口頭発表③ 13:00–14:30	
01体育史	独立館 D311	口頭発表① 9:00–9:40 口頭発表② 9:40–10:20 口頭発表③ 10:20–11:20 口頭発表④ 11:20–12:00 理事会 12:00–13:00 【独立館D312】 口頭発表⑤ 13:00–13:40 口頭発表⑥ 13:40–14:20	
02体育社会学	第4校舎B棟 J24	シンポジウム 9:00–12:00 総会 12:45–13:45 口頭発表③ 13:50–14:45	
	第4校舎B棟 J29	口頭発表④ 13:50–14:45	
		ポスター発表 13:50–14:50 【ポスター会場4：D202】	
03体育心理学	第4校舎B棟 J21	キーノート レクチャー 9:00–10:00 シンポジウム 10:10–12:10 総会 13:30–14:30	アフタヌーン・ソーシャル
04運動生理学	第4校舎B棟 32	シンポジウム 10:00–12:00 ポスター発表①② 13:00–13:40 【ポスター会場3：D201】 ポスター発表③④ 13:40–14:30 【ポスター会場3：D201】	
05バイオメカニクス	第4校舎B棟 33	ポスター発表ショートプレゼンテーション① 9:15-10:15 シンポジウム 10:30–12:00 総会 12:00–13:00 ポスター発表① 13:00–14:30 【ポスター会場2：23】	
06体育経営管理	第4校舎B棟 12	シンポジウム 9:00–11:00 総会 11:00–11:50 ポスター発表 13:00–14:30 【ポスター会場4：D202】	
07発育発達	第4校舎B棟 J11	シンポジウム 9:00–11:00 口頭発表① 11:00–12:00 口頭発表② 13:00–13:50 口頭発表③ 13:50–14:30	
08測定評価	第4校舎B棟 13	統計・測定評価セミナー 9:00–10:00 統計相談コーナー 10:10–11:10 総会 11:20–12:00 口頭発表③ 13:00–13:40 口頭発表④ 13:45–14:25	
09体育方法	第4校舎B棟 J14	口頭発表⑤ 9:15–10:00 シンポジウム 10:00–12:00 総会 12:00–13:00 ポスター発表①② 13:00–14:30 【ポスター会場1,2：22,23】	
	第4校舎B棟 J19	口頭発表⑥ 9:00–10:00	
10保健	独立館 D413	口頭発表② 9:00–9:45 キーノート レクチャー 10:00–11:00 総会 11:00–12:00 シンポジウム 13:00–14:30	
11体育科教育学	独立館 DB202	シンポジウム 9:00–11:00 総会 12:00–13:00 ポスター発表 13:00–14:30 【ポスター会場3：D201】	
12スポーツ人類学	独立館 D310	口頭発表② 9:00–9:40 口頭発表③ 9:40–10:20 映像上映 10:30–12:00 シンポジウム 13:00–15:00	
13アダプテッド・スポーツ科学	独立館 D411	シンポジウム 9:30–11:30 総会 11:30–12:00 ポスター発表（責任着座制） 13:00–14:30 【ポスター会場4：D202】	
14介護福祉・健康づくり	独立館 D412	ポスター発表 9:30–10:30 【ポスター会場4：D202】 キーノート レクチャー 11:00–12:00 理事会 12:10–13:00 シンポジウム 13:00–14:40	

情報交換会【生協食堂】18：15～19：45

大会日程　3日目　9月12日（木）

9:00　10:00　11:00　12:00　13:00　14:00　15:00

学会本部企画			地域協力学会連絡会議 11:30–12:20【独立館D306】 専門領域連絡会議 12:30–13:20【独立館D306】
大会組織委員会企画			日吉台地下壕見学ツアー 10:00–12:00 集合:【独立館D101】 体育史専門領域合同シンポジウム 13:00–15:00 【独立館DB203】
			体育心理学専門領域 ランチョンセミナー9 12:30–13:30【第4校舎B棟J21】
			公益社団法人日本オリエンテーリング協会 ランチョンセミナー10 12:00–13:00【独立館D412】
			パネル展 【独立館D204】
専門領域	00体育哲学	独立館D410	浅田学術奨励賞受賞記念講演 9:00–10:00 口頭発表④ 10:10–11:10 口頭発表⑤ 11:10–12:10
	01体育史	独立館D311	口頭発表⑦ 9:00–10:00 口頭発表⑧ 10:00–11:00 口頭発表⑨ 11:00–12:00
	02体育社会学	第4校舎B棟J24	口頭発表⑤ 9:00–10:25 口頭発表⑧ 10:30–11:55 口頭発表⑪ 13:00–13:55 口頭発表⑭ 14:00–14:55
		第4校舎B棟J29	口頭発表⑥ 9:00–10:25 口頭発表⑨ 10:30–11:55 口頭発表⑫ 13:00–13:55 口頭発表⑮ 14:00–14:55
		第4校舎B棟39	口頭発表⑦ 9:30–10:25 口頭発表⑩ 10:30–11:55 口頭発表⑬ 13:00–14:25
	03体育心理学	第4校舎B棟J21	ポスター発表①（責任者座制:奇数） 9:00–10:00【ポスター会場1,2:22,23】 ポスター発表②（責任者座制:偶数） 10:00–11:00【ポスター会場1,2:22,23】 特別レクチャー 11:10–12:20 口頭発表② 13:40–15:00
	04運動生理学	第4校舎B棟32	口頭発表① 9:00–10:15 口頭発表③ 10:30–12:00
		第4校舎B棟J11	口頭発表② 9:00–10:15 口頭発表④ 10:30–12:00
	05バイオメカニクス	第4校舎B棟33	口頭発表⑤ 9:00–9:45 ポスター発表ショートプレゼンテーション② 10:00–11:00 キーノートレクチャー 11:00–12:00 ポスター発表② 13:00–14:30【ポスター会場2:23】
	06体育経営管理	第4校舎B棟12	口頭発表③ 9:00–10:00 口頭発表④ 10:00–11:00 口頭発表⑤ 11:00–12:00 口頭発表⑥ 13:00–14:00 口頭発表⑦ 14:00–14:40
	07発育発達	ポスター会場3 独立館D201	ポスター発表① 9:00–10:00【ポスター会場3:D201】 ポスター発表② 10:00–11:00【ポスター会場3:D201】
	08測定評価	第4校舎B棟13	口頭発表⑤ 9:00–9:50 シンポジウム 10:00–12:00 ポスター発表①②（責任者座制） 13:00–13:45【ポスター会場4:D202】 ポスター発表③④（責任者座制） 13:45–14:30【ポスター会場4:D202】
	09体育方法	第4校舎B棟J14	口頭発表⑦ 9:00–10:00 口頭発表⑨ 10:00–11:00 口頭発表⑪ 11:00–12:00
		第4校舎B棟J19	口頭発表⑧ 9:00–10:00 口頭発表⑩ 10:00–11:00 口頭発表⑫ 11:00–12:00
	10保健	独立館D413	口頭発表③ 9:00–10:00 口頭発表④ 10:05–11:05 口頭発表⑤ 11:10–11:55 ポスター発表 13:00–14:00【ポスター会場3:D201】
	11体育科教育学	独立館D307	口頭発表④ 9:00–10:00 口頭発表⑦ 10:00–11:00 口頭発表⑩ 11:00–12:00 口頭発表⑬ 13:00–14:00 口頭発表⑮ 14:00–15:00
		独立館D308	口頭発表⑤ 9:00–10:00 口頭発表⑧ 10:00–11:00 口頭発表⑪ 11:00–12:00 口頭発表⑭ 13:00–14:00 口頭発表⑯ 14:00–15:00
		独立館D309	口頭発表⑥ 9:00–10:00 口頭発表⑨ 10:00–11:00 口頭発表⑫ 11:00–12:00
	12スポーツ人類学	独立館D310	口頭発表④ 9:00–9:40 口頭発表⑤ 9:40–10:20 ポスター発表 10:30–11:30【D310】
	13アダプテッド・スポーツ科学	独立館D411	口頭発表③ 9:00–10:00 口頭発表④ 10:00–10:45 口頭発表⑤ 10:45–11:30
	14介護福祉・健康づくり	独立館D412	口頭発表① 10:00–11:15

大会役員・大会組織委員会

大会名誉会長	慶應義塾　塾長　長谷山　彰
大会会長	一般社団法人　日本体育学会　会長　深代　千之
組織委員長	石手　靖
副委員長	佐々木 玲子　船渡　和男
事務局長	村山　光義
副事務局長	野口　和行　田中　重陽
総　務	加藤　幸司　加藤　大仁　東原　綾子　福士　徳文　山内　賢　柏木　悠
企　画	板垣　悦子　稲見　崇孝　坂井　利彰　鳥海　崇　村松　憲
渉　外	須田　芳正　永田　直也
経　理	奥山　静代　吉田　泰将
監　事	太田あや子　平野　裕一

大会実行委員会

委 員 長	石手　靖
副委員長	佐々木玲子
委　員	板垣　悦子　稲見　崇孝　牛山　潤一　仰木　裕嗣　奥山　静代　柏木　悠
	加藤　幸司　加藤　貴昭　加藤　大仁　木村　真規　坂井　利彰　沢井　史穂
	須田　芳正　田中　重陽　東海林祐子　鳥海　崇　永田　直也　野口　和行
	東原　綾子　樋口　裕輔　福士　徳文　藤本　秀樹　船渡　和男　水鳥　寿思
	村山　光義　村松　憲　森　将輝　山内　賢　吉田　泰将

専門領域担当

体育哲学	加藤　幸司　佐藤　洋
体 育 史	鳥海　崇　神田　俊平
体育社会学	山内　賢　水上　博司　高峰　修　工藤　保子
体育心理学	永田　直也　加藤　貴昭　森　将輝　工藤　和俊
運動生理学	奥山　静代　木村　真規　宮地　元彦　手島　貴範
バイオメカニクス	稲見　崇孝　水鳥　寿思　柏木　悠　吉岡　伸輔
体育経営管理学	吉田　泰将　萩　裕美子　作野　誠一
発育発達	東原　綾子　熊川　大介
測定評価	福士　徳文　田中　重陽
体育方法	村松　憲　野口　智博　東海林祐子
保　健	須田　芳正　須甲　理生
体育科教育法	奥山　静代　東原　綾子　鈴木　理　松田　恵示
スポーツ人類学	加藤　大仁　波照間永子
アダプテッド・スポーツ科学	野口　和行　岩沼聡一朗
介護福祉・健康づくり	板垣　悦子　太田あや子

実行委員会事務局	池田裕紀子　高木　聡子　綿田　恭子
本部事務局	山野　陽子　齋藤　うい　宮川　山水

全体概要

1.大会運営の概要

○大会準備概要

2019年度の日本体育学会は、Bブロック（東京、神奈川、千葉地域）から東京が担当となり、慶應義塾大学日吉キャンパスで開催することとなった。理事会での大会開催決定前の2016年11月よりワーキンググループ（WG）を組織し、開催時期などを検討した。2017年6月の日本体育学会定時社員総会にて、2019年度第70回大会は慶應義塾大学が主管校となることが承認された。9月には静岡大学で開催された第68回大会の視察を行った。開催の決定を受け2017年11月に準備委員会を発足させた。2018年4月より大会組織委員会を構成し、組織委員長および事務局長が理事会に毎回オブザーバーとして出席し、準備状況について報告・審議を重ねた。2018年9月の臨時社員総会（徳島69回大会）においてプロモーションビデオの上映とともに大会テーマを告知した。大会事務局を2018年10月に開設し、2019年4月より実行委員会を組織すると同時に専属の事務局員を雇用し準備を進めた。

○組織委員会としての業務（企画、運営、会場、交通）

組織委員会の業務としては、WGの素案決定に基づいて、大学の会場確保、運営業者の選定と決定を行った。大会プログラムを構成するために、本部企画シンポジウムの調整、組織委員会企画シンポジウムの立案や演者調整、専門領域プログラムにおける領域担当事務局との連絡調整を行った。WGで各種プログラムや運営概要をまとめ、2018年4月の組織委員会の立ち上げ以降、執行部と運営委託業者、印刷業者での会議を月1回のペースで行い内容を共有しながら運営準備を進めた。

大会プログラム集、予稿集、報告書の編集や印刷、各種企業との交渉や調整、講演依頼は大会事務局を中心に情報を集約して行った。また、当日の専門領域会場担当や学生アルバイトの募集にあたっては、慶應義塾大学の他キャンパスや一貫校（付属校）の教員、東京体育学会会員の教員から広く協力を仰いだ。

大会会場は、比較的新しく竣工した校舎・独立館を中心に多くの会場を集約し、一部の大教室もすべて渡り廊下等でつながっているため、コンパクトな形で実施することができた。会場までの交通も最寄りの日吉駅が目の前であり、東海道新幹線の新横浜駅や羽田空港からのアクセスもよく、大きなトラブルはなかったと思われる。

○広報

2018年6月の日本体育学会定時社員総会において第70回大会の概要を報告しチラシを配布した。チラシは8月の第69回大会時の臨時社員総会時にも配布するとともに、大会バッグに同梱し参加会員への周知を促した。その後、大会ウェブサイトを12月に開設し、随時大会に関する情報を公開した。2019年6月の日本体育学会定時社員総会において第70回大会のプログラム内容の詳細を報告した。大会プログラムの内、組織委員会企画の特別講演、組織委員会と体育史専門領域との合同シンポジウム、および学会本部企画シンポジウムは一般公開としたため、日本スポーツ協会記者クラブを通じてこれらの内容のプレスリリースを行い、後援いただいた横浜市および川崎市には関連施設に同内容のチラシを配布した。

表1 ウェブサイトの制作過程

作業月	内容等
2018年7月	サイトメニューの打ち合わせ
10月	体育研究所のウェブサイト内に70回大会のウェブサイトを開設する形で業者と契約
12月	トップページ、大会案内、広告・協賛案等の公開
2019年3月	大会案内、大会参加申込方法、一般研究発表申込、領域横断セッションの募集を公開
4月	大会事前申込の開始
5月	事前参加申込（事前参加費）、一般研究発表申込を〆切 事前参加申込（当日参加費）開始 託児の案内
6月	本部企画、組織委員会企画、専門領域企画の公開
8月	組織委員会企画「地下壕見学特別ツアー」申込の開始 大会プログラム（PDF）、大会予稿集（PDF）の公開
9月	台風に関する情報、大会終了報告の掲載

○大会ウェブサイト

2018年7月に大会ウェブサイト開設に向けた担当及び業者選定を実施した。ウェブサイト開設にあたっては、次の学会大会が2年後に開催されることから、70回大会終了後もウェブサイトが残せるように、慶應義塾大学体育研究所のウェブサイト内に開設することとなった。2019年9月のウェブサイト更新終了までの作業工程（概要）は表1の通り。

2.大会の実施について

○企画概要

大会テーマを慶應義塾の創始者である福澤諭吉の「学問とは実学、すなわちサイヤンス。これすべて人間交際（じんかんこうさい）のため」という言葉から「学問とは実学、すなわちサイヤンス」と掲げた。これを受け、サイヤンスとしての体育・スポーツ科学の「過去・現在・未来」をつなぐという視点で企画案を練った。また学会大会の在り方に関する議論において、各専門領域の研究の深まりに加えて「体育」としての統合的・総合的議論の場が必要であり、領域間の交流が不足しているという課題に鑑み、組織委員会の企画の検討を行った。

統合的・総合的な議論の場を持つ具体案として「領域横断セッション」「アフタヌーン・ソーシャル」を企画した。いずれも、原則的に専門領域の発表と重ならないように時間を配置し、会員同士がより深くつながりを持てる交流の場となることを意図した。領域横断セッションは「オリンピック・パラリンピック」「トレーニング」「大学生」というキーワードでポスター発表とし、専門領域の一般発表に加えて発表可能とした。キーワードの設定には、過去3年間の一般発表演題のタイトルのテキストマイニング分析を行い、専門領域に関わらない話題として選定した。

「過去・現在・未来」をつなぐ視点の「過去」として、福澤の学問と身体観を紐解き、体育の原点を考えるべく、山内慶太氏（慶應義塾大学健康マネジメント研究科・福澤研究センター）に基調講演「福澤諭吉とスポーツ」を依頼し、さらに「福澤諭吉の身体観と体育観と慶應スポーツの展開」のテーマでパネル展を行った。また、こうした歴史に学ぶ重要性を認識し、体育史専門領域との合同企画シンポジウムとして「自立・自律した個人に価値をおく社会における体育・スポーツ－福澤諭吉とその時代に手がかりを求めて－」を企画した。本企画においては來田享子氏（中京大学）にコーディネーターとして多大なる協力をいただき、貴重な議論の場を持つことができた。

現在と未来のテーマにおいては、現在の継続的課題を近未来にどう解決するのかという議論と、新たな課題の登場にどう未来を描くか、という2つの視点があった。前者に関するシンポジウムとして、組織委員会企画「大学体育教員の使命を考える～教養体育の担い手の育成に向けて」を企画した。また、学会本部から企画されたシンポジウム1：「保健体育教師養成カリキュラムの質と制度保証に向けた日本体育学会の役割」、同2：「新しい時代にふさわしいスポーツ指導者の育成と認定：体育学会の果たすべき役割」も同様のものと捉えられると考えられた。後者の未来を志向した企画として組織委員会では、上原明氏（大正製薬ホールディングス株式会社）の特別講演「ソサエティ5.0に対応する教育のあり方」の他、「eSportsは研究対象となりえるか？」「システム×デザイン思考で街や人を元気に～トップアスリートからグラスルーツまで～」のランチョンセミナーを企画した。2つのランチョンセミナーはタイムスケジュールの関係上シンポジウムにはできなかったが、学会本部企画シンポジウム3「テクノロジーの進化と体育・健康・スポーツ科学：eスポーツを題材に」と合わせて、今後のスポーツ科学の課題を議論するものとなったと考える。

また、上記の企画の内、大会2日目の特別講演、学会本部企画シンポジウム3、大会3日目の組織委員会・体育史専門領域合同企画シンポジウムについては、一般公開プログラムとして実施をした。大会ホームページの他、横浜市・川崎市の行政窓口及び図書館にて広報を行った。その結果、数十名ではあったが一般市民の参加があり、学会の社会的な貢献の場とすることができたと考える。

なお、ランチョンセミナーは組織委員会企画として取り纏めたが、体育心理学専門領域から2つのセミナーを提供いただき、組織委員会2、企業・団体6、3日間合計で10の企画を行うことができた。また、大会2日目に情報交換会、大会3日目にキャンパス地下にある史跡「日吉台地下壕」の見学ツアーも同保存会の協力を得て開催した。

（各企画の記録の概要は以下を参照）

表2 学会本部・大会組織委員会企画数

	基調講演	特別講演	シンポジウム	ランチョンセミナー	情報交換会	その他
学会本部企画			3			
大会組織委員会企画	1	1	2	10	1	3
合計	1	1	5	10	1	3

表3 学会本部・大会組織委員会企画テーマ一覧

企画		テーマ
学会本部企画	企画シンポジウム１	保健体育教師養成カリキュラムの質と制度保証に向けた日本体育学会の役割
	企画シンポジウム２	新しい時代にふさわしいスポーツ指導者の育成と認定：体育学会の果たすべき役割
	企画シンポジウム３ （国際交流委員会・若手研究者委員会合同企画）	Technological evolution and physical education, health and sport science テクノロジーの進化と体育・健康・スポーツ科学：eスポーツを題材に
大会組織委員会企画	基調講演	福澤諭吉とスポーツ
	特別講演	ソサエティ5.0に対応する教育のあり方
	シンポジウム１ （大会組織委員会・体育史専門領域合同）	自立・自律した個人に価値をおく社会における体育・スポーツ –福澤諭吉とその時代に手がかりを求めて–
	シンポジウム２	大学体育教員の使命を考える　～教養体育の担い手の育成に向けて
	ランチョンセミナー１ （日本アクティビティ協会/株式会プレイケア、KPMGコンサルティング および大会組織委員会）	eSportsは研究対象となりえるか？
	ランチョンセミナー２ （セノー株式会社）	良姿勢と歩行を教育する体幹訓練機器「トランクソリューション」
	ランチョンセミナー３ （日本バスケットボール学会）	バスケットボールとオリンピックのこれまでとこれから
	ランチョンセミナー４ （公益社団法人日本フィットネス協会）	エアロビックダンスの大学授業への活用 資格認定GFIと一般授業におけるフィットネス
	ランチョンセミナー５ （大会組織委員会）	システム×デザイン思考で街や人を元気に ～トップアスリートからグラスルーツまで～
	ランチョンセミナー６ （体育心理学専門領域）	体育・スポーツ心理学専門領域のこれから
	ランチョンセミナー７ （特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会）	科学的手法に基づいたトレーニング指導
	ランチョンセミナー８ （一般社団法人日本フライングディスク協会）	「フライングディスク」の体育教材としての価値
	ランチョンセミナー９ （体育心理学専門領域）	日独体育心理学交流
	ランチョンセミナー１０ （公益社団法人日本オリエンテーリング協会）	体験できる室内ミニオリエンテーリング
	パネル展	福澤諭吉の身体観と慶應スポーツの展開
	日吉台地下壕見学ツアー	
	アフタヌーン・ソーシャル	

○発表者数と参加者数

第70回大会の事前参加申込者は1、516名、当日参加申込者は851名、計2367名であった（表4）。各専門領域の企画数と一般発表演題数は表5に示すとおりであり、シンポジウム／キーノートレクチャー等は24企画、一般研究発表演題数は領域横断セッションも合わせて最終的に745演題であった（最初の演題申し込みから9演題が発表取り下げとなった）。

表4 70 回大会申込者数（大会参加・予稿集購入・情報交換会参加）

区分	事前申込者	当日申込者		申込者合計	予稿集購入		情報交換会	
	5/17迄	6/30迄	大会期間		事前申込	大会期間	事前申込	当日
会員	1057	178	340	1575	354	104	172	35
非会員	20	5	84	109	11		7	
学生会員	349	-	40	389	105		82	
非会員学生	68	32	144	244				
特別共同研究者	9	-	-	9	-		2	
名誉会員	13	-	28	41	(6)	-	6	
	1516	215	636	2367	470	104	269	35

表5 横断領域・専門領域別研究発表演題数および専門領域企画数

横断領域セッション テーマ	ポスター	口頭発表	総　計	企画数
オリンピック・パラリンピック	18	-	18	
トレーニング	15	-	15	
大学生	20	-	20	
小　　計	53	-	53	
専門領域名	ポスター	口頭発表	総　計	シンポ/キーノート等
体育哲学	-	11	11	2
体育史	-	22	22	1
体育社会学	5	35	40	1
体育心理学	74	8	82	3
運動生理学	21	22	43	1
バイオメカニクス	41	19	60	2
体育経営管理	5	20	25	1
発育発達	41	13	54	1
測定評価	45	20	65	3
体育方法	76	43	119	1
保健	5	18	23	2
体育科教育学	26	64	90	1
スポーツ人類学	1	10	11	2
アダプテッド・スポーツ科学	19	19	38	1
介護福祉・健康づくり	4	5	9	2
小　　計	363	329	692	24
総　　計	416	330	745	24

下記の9題が申し込み後に発表取り消しとなった。

体育史　榊原　浩晃（福岡教育大学）
横-トレーニング-03　栗原　俊（東海大学大学院体育学研究科）
発11-口-09　服部　百合子（お茶の水女子大学）
方10-口-12　高橋　裕勝（帝京短期大学
方10-口-12　篠原　哲也（天理大学大学院）
体育社会学　上野　浩暉（立教大学大学院）
教11-ポ-10　梅谷千代子（東京家政大学）
社12-口-29　赤岩　亮輔（東京学芸大学）
発-11-口-02　廣田　修平（北翔大学）

○協賛について

協賛に関しては、「プログラム広告」「展示：企業、大学団体、図書展示」「試供品」「ランチョンセミナー」に分類し、2018年12月より募集を行った。また、3団体より「寄付」もいただいた。以下、種別ごとに報告する。

(1) プログラム広告

下表の通り65団体（49企業・団体、16学校関係）から協賛をいただいた。

表6 プログラム広告への協賛団体一覧

企業・団体	
アプラン株式会社	銀座deフットサル株式会社
阿波製紙株式会社	慶應義塾大学出版会株式会社
インデックス有限会社	公益財団法人　笹川スポーツ財団
株式会社　アド・プリント	晃洋書房
株式会社　エイム	コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社ベンディング鶴見支店
株式会社　太田胃散	セイコーホールディングス株式会社
株式会社　大武・ルート工業	セノー株式会社
株式会社　ギムニク	SOMANIKS
株式会社　崎陽軒	大修館書店
株式会社　杏林書院	大正製薬株式会社
株式会社　構造計画研究所	長永スポーツ工業株式会社
株式会社　講談社	東亜道路工業株式会社
株式会社　セレスポ	東郷町施設サービス株式会社
株式会社　テキスト	特定非営利活動法人　日本トレーニング指導者協会
株式会社　テック技販	富士医科産業株式会社
株式会社　東洋館出版社	マツマル株式会社
株式会社　道和書院	マリックスオフィスシステム株式会社
株式会社　トーヨーフィジカル	ミズノ株式会社
株式会社　特殊計測	有限会社　市村出版
株式会社　永谷園ホールディングス	有限会社　エスアンドエムイー
株式会社　ヒューネット・ジャパン	有限会社　バースト
株式会社　フォーアシスト	有限会社　ラウンドフラット
株式会社　ベリタス	有限会社　トライオール
株式会社　毎日コムネット	リードエグジビションジャパン株式会社
株式会社　ミネルヴァ書房	スポーツビジネス産業展事務局
大学	
大阪体育大学大学院	新潟医療福祉大学大学院
鹿屋体育大学	日本女子体育大学
国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科	日本体育大学
順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科	日本大学三軒茶屋キャンパス（危機管理学部,スポーツ科学部）
中京大学大学院体育学研究科	びわこ成蹊スポーツ大学
筑波大学・鹿屋体育大学体育スポーツ高度化共同専攻	福岡大学スポーツ科学部
東海大学	武蔵丘短期大学
東京女子体育大学・東京女子体育短期大学	山梨学院大学

(2) 展示

表7・8の通り30団体（企業25、大学・団体25）および図書展示21社から展示協賛をいただいた。
委託業者（セレスポ）に企業および大学・団体の展示会場のレイアウト及び展示ブースの作成を依頼した。展示会場は学会大会参加者が展示会場を巡回・滞留しやすいように会場中心部分で、アフタヌーン・ソーシャルや書籍展示を行う2階の2教室を使用した。1月より募集を開始し、〆切の4月末までに19団体・21ブースの申し込みがあった。その後〆切を延長し、5月下旬に30団体・33ブースが決定した。

図書展示については、取りまとめの杏林書院および販売の紀伊国屋書店の担当者と5月下旬に予定場所を実際に視察・検討し、組織委員会で提案していた独立館2階のアトリウム廊下に決定した。

表7 展示への協賛団体一覧

企業	
アーカイブティップス株式会社	セノー株式会社
アークレイマーケティング株式会社	SOMANIKS
インターリハ株式会社	東京医研株式会社
インデックス有限会社	凸版印刷株式会社
株式会社大橋知創研究所	トビー・テクノロジー株式会社
株式会社ダートフィッシュ・ジャパン	日本キスラー株式会社
株式会社DKH	バイオリサーチセンター株式会社
株式会社テック技販	有限会社エスアンドエムイー
株式会社ナックイメージテクノロジー	富士医科産業株式会社
株式会社ノビテック	大学・団体
株式会社フォーアシスト	公益財団法人健康・体力づくり事業財団
株式会社ユニタック	公益財団法人ワールドマスターズゲームズ2021関西組織委員会
旭光物産株式会社	順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
合同会社ワイワイファクトリー	筑波大学・鹿屋体育大学体育スポーツ高度化共同専攻
酒井医療株式会社	特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会
新光電子株式会社	

表8 図書展示 出展社一覧

アイオーエム	講談社	ナップ
アイ・ケイコーポレーション	晃洋書房	西村書店
朝倉書店	真興交易医書出版部	不昧堂出版
市村出版	大修館書店	文光堂
化学同人	鉄筆	ベースボール・マガジン社
杏林書院	東京教学社	ミネルヴァ書房
慶應義塾大学出版会	道和書院	ラウンドフラット

(4) 物品提供

下表の通り5社から物品提供をいただいた。

表9 物品提供 協賛社一覧

大正製薬株式会社	中北薬品株式会社
株式会社榮太樓本舗	有限会社トライオール
コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社ベンディング鶴見	

(5) ランチョンセミナー

表3に示したように、2つの組織委員会企画（ランチョンセミナー1は関係企業に協力を依頼）、体育心理学専門領域が2セミナー、その他の企業・団体から7セミナーで合計10のセミナーを実施した。申請後、セミナー定員規模と会場の調整を行い、弁当は組織委員会事務局より株式会社崎陽軒（横浜市）を斡旋し、取りまとめて注文を代行した。それぞれのセミナーは適正規模で盛況であったと思われる。

(6) 寄付

下表の通り3企業・団体から寄付をいただいた。

表10 寄付団体一覧

久保田潤一郎クリニック	特定非営利活動法人日本アンチエイジング医療協会	光中央診療所

3.大会を通じての対応をふりかえって

○大会案内

大会案内は、平成31年（2019年）1月の学会報に同封するため、その時期に合わせて準備した。前年度の内容を参考に作成し、大会要項、作成要項、コード表、よくある質問、宿泊・交通案内で構成し、原稿を作成した。同様の内容は、大会ウェブサイトでも閲覧でき、参加申込等も前回大会同様にウェブサイトから行うようにした。なお、印刷・送付は有限会社創文企画に学会本部事務局を通じ依頼した。

○大会ポスター・チラシおよびロゴマークの作成

大会の告知のため、2018年度の総会・徳島69回大会までにチラシ・ポスターおよびこれに使用するロゴデザインの作成を行った。この作成を含めプログラム・予稿集・報告書、封筒等の作成・印刷作業は株式会社アド・プリント(東京都)に依頼をし、連携する作業を統一的に行った。

○プログラムについて

大会プログラムの構成については、1)専門領域の企画・一般発表、2)領域横断セッション・アフタヌーンソーシャル、3)本部及び組織委員会のシンポジウムの3構成が基本的に重ならないように配慮した。2)3)については2019年3月の理事会において概要と配置が決定された。各専門領域の企画についても2019年3月末までに内容と開催希望日時を調査し、ここに例年の一般発表演題数を勘案し、会場の数と大きさを考慮した上でスケジュール案を作成した。その後、2019年6月に学会本部から送付された演題リストを基に、各専門領域担当者・責任者に発表時間・発表順リストの作成を依頼し、大会事務局での最終調整後、決定した。

プログラムの作成過程は、組織委員会による原稿作成、各企画担当者への原稿依頼、申込演題データの原稿への流し込み、広告データの取得などの作業から印刷会社との校正作業を含み、2019年5月中旬から7月末までであった。組織委員会内で構成などの作業を分担し、各企画・専門領域担当者とも校正作業を行ったが、最終的に記載上の間違いがあり、参加者に多大な迷惑をかけてしまった。スタッフ数や時間の不足によって異なる者による校正の繰り返しが不十分であったことは大きな反省点である。

なお、予稿集の作成においてもプログラムと連動する部分が多く、同様に記載の間違いが生じたが、8月中旬にウェブサイトに暫定版をアップし、記載ミスの確認後、PDF版のデータ確定・冊子体の印刷を大会直前としてミスが最小限となるようにした。

○プログラム発送

プログラム及び参加証の発送は、学会本部から受け取った学会会員名簿及び事前参加申込者名簿を基に、組織委員会及び関係者で封入、郵送作業を行った。当初は封入・郵送作業として3日間を予定していたが、多くの関係者に協力を

いただき、1日ですべての封入作業を終えることができた。封入作業にあたってはかなりのスペース（150㎡）が必要であった。郵送にあたっては民間の宅配業者に依頼したが、業者との綿密な連絡が必要であった。

また、参加証には当日の受付において、予稿集の購入・情報交換参加申し込みの有無をチェック可能なように個別データをQRコードにして印刷した。QRコード作成は事務局で行い、氏名・所属のデータとともに印刷会社に預けて個別印刷を依頼した。さらに、参加証とともにネームカードフォルダも同封したが、参加証の破棄・紛失等の連絡を後日受けた。これに関しては、封筒表書きとして「参加証同封」などの注意喚起がさらに必要であったと反省した。

○受付

受付システムは前年と同様に、事前申込と当日受付に分けて対応した。事前申込者にはQRコードを印字した参加証を送付したが、約100名が紛失もしくは当日持参を忘れ、再発行窓口を設け対応した。また、リーダーの記録から約250名が受付手続きをしていないことが判明した。その内シンポジストや一般研究発表者として学会に参加している者が100名程度いることは追跡できたが、正確な学会参加者を把握することは困難であった。

また、事前・当日参加以外のイレギュラーな対応、抄録集の購入、非学会員のシンポジスト等受付、名誉会員受付等は一括して総合受付で行い、不明な点は受付担当の教員や大会事務局職員が対応することで大きなトラブルは発生しなかった。

○PCセンター（会場：D301）

本会では、口頭発表として334の演題が発表された。うちPCセンターでは189演題（57%）を受けつけた。受付には本学が契約するGoogle社の提供するオンラインストレージgoogle driveを活用した。具体的には、

1：容量制限のない教職員アカウントからgoogle drive内に会場名ならびにセッション名の入ったフォルダを事前に作成する
2：googleの組織委員会専用gmailアカウントを作成し、1で作成したファイルへのアクセス権限を付与する
3：PCセンターでは、大会期間中に受け取ったスライドデータを1で示したフォルダに一時的に格納（アップロード）する
4：各会場では、常設PCにて2で作成したアカウントからログインし、1で示したフォルダにアクセス後、スライドデータをダウンロードする

という手順にてPCセンターと会場間をオンラインにて接続した。

PCセンターには、教員2名と学生スタッフ5名が常駐し、5台のPCを設置した。これまでの大会において、A)パワーポイントのver.違いに起因した文字化け・文字ズレ、B)Apple社のMacを使用した持込PCの利用、に関するトラブルが度々報告されている。A)への対処として、PCセンターに設置した5台のPCを各発表会場の常設PCと同機種とした。サブモニターについても、会場スクリーンと同比率のものを準備したため、最終的な確認が入念に行われた。 B)への対処として、持込PCにて発表予定の参加者にもPCセンターで動作確認する旨をプログラムならびに会場受付にて周知した。そのため、Apple社のMac利用者はもちろん、WindowsOSの薄型／ワイドPC利用者らが互換性を確認する様子が数多くみられた。

課題も残った。一つ目に、オンラインストレージサービスを用いた際のシステム利用に関するファイル容量である。ネットワーク接続の速度がボトルネックとなるが、発表時間10分に対して2GB近い容量のファイルにて発表を計画する参加者もいた。各会場の常設PCは発表用とダウンロードPCを兼ねていたことから、ファイルサイズの圧縮等をPCセンターで試みた事例もあった。長いダウンロード時間が予想された場合には、容量の大きい動画ファイルを取り除いたライト版スライドデータでの発表を依頼した事例もあった。今後、同様のサービスにてシステム構築する際には容量制限を設けることも必要である。しかしながら、同システムの運用次第では学会期間前にスライドデータをuploadすることが将来的に可能になることを示唆した。

二つ目に、PCセンターではなく、会場でスライドデータを受付しようとする参加者への対応である。大会プログラムを遵守していただければ防止できる事例であるが、PCセンターと各会場間の受付完了の有無に関する情報共有のためにも必ずPCセンターを経由してほしいものである。領域ごとのPCセンターへの受付数を計算する

と、当該日時に発表される演題数の50%を下回った領域もあり、領域からの周知徹底も必要と考える。

最後に、常設PCと持込PCの接続切替えに要する時間である。本会に限ったことではないが、VGAなどのケーブルを外し差替える作業には少なくとも30秒から1分程度の時間を要する。セッション時間の延長に一役買っているのは間違いない。上述のような学会期間前におけるスライドデータの事前uploadで解決できる可能性はあるが、コネクターの持参忘れをはじめ根本的な対策も必要であった。（文責：稲見崇孝　慶應義塾大学）

○口頭発表会場（会場：第4校舎B棟・独立館）

9月10日～12日の3日間、慶應義塾大学日吉キャンパスに口頭発表会場を設定した。移動の労を減らすために第4校舎独立館を中心に一部第4校舎B棟の大教室を使用した。すべての会場が渡り廊下でつながっており、委託業者に依頼して配置図や掲示等も充分に準備したため、比較的移動はスムーズであったように思われる。

その一方、前日の台風の影響で予定していた教室の一つが使用できず、バイオメカニクス分科会の方々には希望の大きさを大幅に超える教室を使用していただくことになり、大変ご迷惑をおかけした。また、学会期間中は校舎の改修工事を中断するように打ち合わせしていたにも関わらず、連絡の不徹底で一部教室でランチョンセミナーの最中に工事の騒音があり、こちらも大変ご迷惑をおかけした。

また、台風による交通機関の運休により、予定していたプログラム時間で発表できない演題があった場合には、理事会での方針にしたがい「発表取り下げ」として対処した。

各会場では実行委員の人数が足りず、専門領域の事務局の方々を始め座長の方々の多大なご協力をいただき、プログラム通りに進行できた。

○サテライト会場

総会、本部企画シンポジウム、組織委員会企画基調講演・特別講演及び企画シンポジウムについて、キャンパスのシステムを使用した2会場のサテライト中継を行った。キャンパスのシステムでは、2回線のうちの1回線が会場のカメラで固定されてしまうため、後述する即時字幕システムについては業者に依頼して映像中継機器を配置し、2教室で信号線を敷設して中継を行った。中継については既存のシステムを利用したこと、不足分については有線で中継したことからサテライト中継に関するトラブルはなかった。

○即時字幕システム

総会、本部企画シンポジウム、組織委員会企画基調講演・特別講演及びアダプテッド・スポーツ専門領域の発表で即時字幕が表示できるサービスを利用した。委託業者を経由してコミュニケーションアプリUDトークを使用した。これは、音声認識や多言語翻訳及び音声合成を実装することで、聴覚障害者対応のみならず外国人対応や議事録の作成、文字起こしなど、幅広くその機能が活用されているものである。運用にあたっては、日本語表示の場合、音声認識による文字入力と、認識間違いを業者及び実行委員会スタッフで手動による修正を行い、英語を日本語に翻訳して表示する場合には翻訳機能で出力されたものをそのまま使用した。また、アダプテッド・スポーツ専門領域の会場では、専門領域に依頼して手直しの学生を3名手配していただき、運用した字幕表示に関するトラブルはなかった。字幕内容の保存については契約していなかったが、後日、本部の記録用として保存内容のテキストファイルを入手することができた。

○ポスター発表、企業展示、図書展示

ポスター発表は、4教室を使用して行われた。初日に行われた領域横断セッションは、キーワード別に3会場に分かれ、モデレーターの進行のもと、発表者のプロフィールを1枚のスライドにまとめ、1人1分で自己紹介を行ってからセッションに入った。どのキーワードの大変多くの聴衆を得て大盛況であった。専門領域別のポスター発表も大きな問題もなく実施されたが、多くの参加者があったことから、少々手狭に感じられた場面もあった。

企業および大学・団体の展示は、2教室を使用して行われた。展示会場は、スペースに余裕のある教室を使用して休憩用のテーブルと椅子を設置したことから、参加者が立ち寄って展示を見るだけでなく、休憩しながら参加者同士で議論を行う場となった。展示教室付近では大会1日目と2日目にアフタヌーン・ソーシャルを実施したこともあり、多くの参加者に足を運んでもらうことができた。

また、図書展示販売は、各専門領域の発表会場へ向かう経路に展示場所を設置していたことから、各会場へ向かう途中で足を止めて展示をみる参加者が多かった。展示場所は、西側の大きな窓に面していたため午後から気温が上昇し、暑さを感じることとなった。大型扇風機で空気を循環させること、飲料の提供で暑さを和らぐことができたが、天気予報を把握して事前に準備をしておく必要がある。

○補助学生

主管校の慶應義塾大学が専門学部を持たないため、東京体育学会に依頼し、日本女子体育大学、国士舘大学、日本体育大学から70名の学生、慶應義塾大学から55名の学生のサポートを得て運営にあたった。大会期間中の主な業務は、受付、クローク、会場案内、各領域の発表進行補助などであった。他大学の専門学部の学生には各領域の発表進行補助を、慶應義塾大学の学生には、受付、クローク、会場案内等の役割を担ってもらった。台風15号の影響で大会前日の打ち合わせに当初参加予定だった学生が来られず不安な面もあったが、当日は大きなトラブルもなくスムーズに進行できたように思われる。また、各領域の進行をお願いした実行委員、専門領域や東京体育学会の先生方と進行補助の学生との顔合わせの時間を当日しっかり取ることができず、先生方にご迷惑をおかけした。

○交通関係

慶應義塾大学日吉キャンパスは、最寄りの日吉駅の目の前に立地し、東海道新幹線の新横浜駅や羽田空港からのアクセスも恵まれている。ただ、前日の台風の影響による交通機関の乱れが心配されたが、学会初日にはほぼ解消され、大きな問題とはならなかった。

○業務委託業者

学会大会運営にあたって、慶應義塾大学関連の大きなイベントを数多く企画運営している株式会社セレスポに業務委託を依頼した。主な委託内容として、看板や掲示物の作成、企業展示、会場設営、サテライト配信システム、即時字幕システム等が挙げられる。また、チラシ・プログラム・予稿集などの印刷・デザイン業者として株式会社アド・プリントにも業務委託を行った。この2社と事務局で2018年5月から月1回ペースでミーティングを開催し、業務の進行状況の確認を行った。プログラム集の作成から大会直前の準備、大会実施当日まで多くの業務を引き受けていただき、この業者の方々無しでは大会のスムーズな運営は困難であった。また、今大会会場は東京、横浜など首都圏の主要ターミナル駅からのアクセスがよく、宿泊施設も近辺広範にわたって多数あるため、旅行代理店による案内は行わなかった。地方からの参加者についても個人での宿泊予約に問題はなかったようであった。

○大学事務との連携

会場の確保については、早々から大学事務局（運営サービス）に相談し、ほぼこちらの希望通りに教室を借用し使用することができた。機器展示会場の設置にあたっても、設備、電気関係、搬入出時の車両乗り入れの対応など協力いただいた。2018年10月から翌年9月まで、体育研究所内への実行委員会事務局の設置に際しては、電話回線設備などの対応をしていただいた。また、日吉ITC（インフォメーション・テクノロジー・センター）を通して、会場内においては大会期間中専用のFree WiFiを利用できるように手配した。また、期間中に熱中症など体調不良者が発生した場合に備えて、保健管理センターでの対応を準備した。

○託児所

学会期間中に託児所を慶應義塾大学日吉キャンパス内に設けた。託児業務は昨年に引き続き「株式会社クラッシー」に依頼した。5月下旬に大会ホームページに利用案内、利用規約を明示し、事前申し込みを8月下旬まで受け付けた。申込児童数は1日目0名、2日目3名、3日目2名ののべ5名であったが、1名キャンセルがあり最終4名であった。託児所の場所については学内案内図等には掲載せず、受付確認メールにて保護者に伝えることで安全面を配慮した。なお、期間中、委託業務は事故等もなく、円滑に行われた。

（文責：奥山静代　慶應義塾大学）

◯マスコミ対応

本大会では大会2日目の特別講演、学会本部企画シンポジウム３、3日目の組織委員会と体育専門領域合同シンポジウムを一般公開とするため、日本スポーツ協会の記者クラブにプレスリリースとして配信した。また、同様の内容を横浜市と川崎市にも配布した。結果として、新聞・テレビなどの報道取材の申込はなかったが、学会本部企画シンポジウム２において、取り纏めの土屋裕睦先生（大阪体育大学）を通じてベースボール・マガジン社（コーチングクリニック）から取材申し込みがあり、当日対応を行った。

◯情報交換会について（会場：生協食堂）

はじめに石手靖大会組織委員長（慶應義塾大学）の挨拶、次いで日本体育学会長である深代千之先生（東京大学）に乾杯のご挨拶をいただいた。歓談の後、日本体育学会副会長である菊幸一先生に海外ゲストの皆さまのご紹介をいただきながら、深代会長とともに記念品の贈呈が行われた。その後、慶應義塾大学に所属する5名の学生によって編成されたミニ・ミニオーケストラによって演奏が行われ、会はより一層の盛り上がりとなり、歓談となった。その後、第71回大会の主管である筑波大学の木塚朝博先生、2020横浜スポーツ学術会議組織委員長である來田享子先生（中京大学）にそれぞれの進捗状況や説明も含めご挨拶いただいた。会員同士の交流がさらに促進されてきていたが、中締めとして日本体育学会理事でもある佐々木玲子大会組織副委員長（慶應義塾大学）の挨拶があった。参加者は約200名であった。

運営は、教員1名が司会、教員2名とスタッフ2名で受付など会場内の運営を行った。（文責：福士徳文 慶應義塾大学）

4.大会運営上の反省点など（まとめ）

学会運営上は多くの業務があり、その概要は先にまとめた通りであるが、細部において配慮が足りなかった点が多く、また過去の報告書においてすでに指摘されていたことなどを見落としていたケースも多かった。そこで、今後の学会運営の一助となるよう、以下に反省点や参考となる事柄を再度まとめることとする。

☆前年12月の体育学研究発送に合わせて大会案内を作成するにあたり、日程・会場使用の見通しに加え、大会テーマや企画をまず固めるために準備を早くする必要がある。今回は領域横断セッションを加えることを前年10月の理事会で報告・承認いただき大会案内に反映した。こうした作業は6月の総会付近には確定し、告知すべきであった。

☆申込締切などの期限について、例年のスケジュールに沿って大会日から逆算して5月中旬を設定したが、演題の取り纏めからプログラム構成・作成・発送の作業過程は予想以上に忙しく、少しでも締め切りを早めた方がよいと考える。

☆後援の依頼について、これまで各担当校が依頼先を自由に選定してきたが、学会として継続的依頼する先や後援の意図を考え、一定のコンセンサスを持った方がよいと思われる。今回、過去に依頼をして継続していなかった団体（JOC・JPSAなど）より、なぜ継続しなかったか、また再び依頼したか、などの理由を問われ回答に窮したケースがあった。そして、今後は是非継続してほしいとされている。また、行政や教育委員会では、学会の方向性などが合致しないと受けにくいといった意見もあり、学会のスタンスを問われる事柄もあった（例えばe-Sportsに対する方向性や障碍者支援の事柄など）。

☆プログラムについて本部・専門領域・企画団体との連携が重要であるが、個別対応の数が多くなるため、対応の体制をよく整えた方がよい。今回、本部企画3、専門領域14、ランチョン6が外部、組織委員会内も6の窓口とスケジュール・

会場・原稿などの調整を行う必要があったが、分担せず一元管理した。統一的な対応は取れたが、校正作業などの徹底が甘くなってしまった。

☆プログラム・予稿集の原稿校正においては、必ずミスが残ると考え何度も行う必要があるが、その時間と人員、その過程での印刷業者との連携などについて、スケジュールをよく計画する必要があった。今回、事務局アルバイトと教員の約10名程度で校正作業を分担したが、日常の授業・その他の業務と並行することは容易でなく、十分な繰り返しチェックができず、結果的に誤植などの間違いが残ってしまった。校正作業については多くの人員と時間を当てられるよう計画する必要があった。

☆ネームカードについて、申込者のデータを本部事務局から受け取り、氏名・所属・会員種別・予稿集購入の有無・情報交換会参加有無について情報をQRコード化し、印刷した。受付での読み取りにエラーはなく機能的に運用できた。しかし、QRコードを1731名分個別に作成し印刷データをする作業、そのエラーチェックには手間と時間が必要であった。データの受け取りが7月10日頃になるため、そこからプログラム発送までにネームカードも個別作成するスケジュールを予め考慮した方がよい。

☆大会期間中、ネームカード着用のチェックはほとんど行わなかった。したがって、受付を通っていない参加者がいることが推測された。（したがって実際の参加者の正確な人数はとらえきれない。）

☆当日の運営にあたっては、スタッフの事前打ち合わせは決して十分とはいえなかったが、今回のような運営形態では限界だったと思われる。
学生アルバイトは、ほとんどが学会などの経験がない学部生であった。理由は以下の通り。①慶應には体育関係の学部がないため研究室に所属する学部生、大学院生がいないこと、②体育系の他大学に所属する学生については、体育学会の会員である大学院生を運営スタッフとして拘束するのは、大会参加の機会を妨げ、好ましくないと考えたため学部生のみを依頼したこと。100名以上の学生スタッフを事前に集めることに苦労したこともあり、全員に対しての事前の説明会は大会前日のみであった。構内をわかっている慶應の学生を、受付周辺やPCセンターおよび会場内各所の補助要員として配置し、他大学の学生を専門領域の各発表会場に固定で配置した。ポスター会場への担当体制に不十分な面があった。
専門領域をご担当いただいた東京体育学会理事・会員の先生方には、大会初日の開始前に説明をするだけとなってしまい、領域（教室）によっては機材等の面でご苦労をおかけすることになってしまった。

☆開催期日については、大学の事務局（施設関係、保健管理センターなど）が稼働している時期を選んで平日開催とした。9月上旬の平日は、すでに本務校での業務の関係から出席できない会員がいる時期ではあったが、開催校の事情を優先した。

☆本部企画プログラムの実施については、運営側との打ち合わせが不十分な点があったように思われる。

☆プログラムに記載されている参加者への注意事項はなかなか十分には行き届かないのが現状。
＊PCセンターでの手続きをしない、PCの持込申告など発表に関連する事項。対策としては、当日のPCセンターではなく、大会前に事前のファイル登録をする方法（Webでupload）をとるなどの案がある（しない場合は発表取り消し）。（※シンポジウム等については、担当毎の責任で。）また、データを登録・回収する上でも、データ容量の制限なども検討する必要もある。
＊ネームカードの紛失、忘れ。

☆大会参加申込（HP上での登録）に関して、「事前受付」、「当日受付」の語が不明瞭。
現状の「事前受付」（今回は5月17日）期間で一旦区切った後、6月末日まで当日参加費金額でWeb上での登録ができるのはよいと思うがその名称が「当日受付」となっているのが紛らわしく文言の整理が必要と思われる。6月末までWeb登録可能ということが理解されなかったのか、「当日受付はどうしたらよいのか」「申し込みをさせてほしい」、また7月以降にも「もう当日参加はできないのか」などの問い合わせが一定数寄せられた。

学会本部企画

企画シンポジウム1

日　時：9月10日（火）　16：10～18：10
会　場：独立館 DB202
テーマ：保健体育教師養成カリキュラムの質と制度保証に向けた日本体育学会の役割
司　会：細越　淳二（国士舘大学）、荻原　朋子（順天堂大学）
演　者：松田　恵示（東京学芸大学）、野坂　俊弥（東海大学）、中野　貴博（名古屋学院大学）

◯シンポジウムについて

本シンポジウムは、2019年9月10日、16:10-18:10に実施された。参加者は、当日の会場となったDB202の半数程度であった。その趣旨は、次の通りであった。

2016年11月の教育職員免許法の改訂並びに2017年11月に示された教職課程コアカリキュラムに対応した再課程認定を踏まえた教職課程カリキュラムが2019年度より実施に移された。そのため再課程認定を受けた大学での教員養成制度がスタートする時点で、保健体育教師の養成をめぐる現状を、授業担当者や指導内容から確認することとした。それは、教科に関する科目と教科の指導法に関する科目の担当者が互いに保健体育教師の養成にどのように責任をもつのかを、人材育成や制度的条件の整備という観点から検討する機会になると考えられるためである。また、体育学会の内外の動向を踏まえつつ、知的生産や人材育成という観点からみて体育学会が抱える課題を日本体育学会に所属しない会員や専門領域に所属しない学会員と共有することが学会の将来像を検討していく上で意味があると考えられるためでもある。そのため、保健体育教師養成カリキュラムの質保証に対して日本体育学会の担う役割について広く論議することを意図した。司会は、細越氏（国士舘大学）並びに荻原氏（順天堂大学）であった。

開始に際して司会の細越氏より、本シンポジウムが政策諮問委員会の中の学校体育問題特別検討委員会での論議を踏まえたものであることが紹介され、次の論点が示された。

①現状の保健体育科教育法関連の科目の実施状況の実態を共有すること
②現状の課題を解決するための方向性や解決策の提案
③現状の枠組みにとらわれず、これからの保健体育教師養成の在り方や制度等についてのアイディアの共有。今後の教員養成に対して私たちが考えて行かなくてはいけないことの提案など

この趣旨説明の後に、中野氏（名古屋学院大学）、野坂氏（東海大学）、松田氏（東京学芸大学）の順で話題提供がなされた。

中野氏からは、東海大学の森氏より紹介いただいた養成校のデータのうち、web上でデータが確認できた186校、725科目を対象にした分析結果が紹介された。その結果、のべ845名、実数406人が担当していた。また、担当者の26.8%は、体育学会の非会員であった。学会員では体育科教育学の専門領域所属者は57.6%、保健の専門領域所属者は13.5%であった。また、体育科教育学専門領域所属者のうち、体育科教育学専門領域のみの所属者は50.3%であるのに対し、体育科教育学と保健双方の所属者は4.7%に過ぎないこと、その他のみ+分科会所属無しが33%を占めていることが紹介された。保健科教育という科目が設定されていないケースもみられた。科目を複数人数で担当しているケースと学科レベルでみた場合、一人担当よりも複数担当の方が体育科教育学専門領域の所属者は増えること、しかし、その場合であっても3割は体育学会に所属していない実態が確認された。大学によっては教員数に起因し、互いに補完し得ない状況がみられることも示唆されることも指摘された。内容面をコアカリキュラムの項目別にみれば、発展的な内容、学問領域との関係、発展的な学習内容が指導されている率が低くなることや実務型教員担当の場合、背景となる学問等の扱いが低くなる可能性が示唆されたことも報告された。

野坂氏からは、体育学会に所属することの意味について検討する資料を提供していただいた。中野氏の発表を引き継ぐ形で、担当非会員の内訳が紹介された。その結果、体育学会未加入者の51.4%が他学会に所属していること並びに体育学会未加入者は平均3.6学会に加入していること、その中でも最多は日本学校保健学会（26人）に加入していること、さらに、未加入者は保健に関連した学会を中心に、計103学会に所属していることが紹介された。このような現象を生み

出している原因は、専門領域の所属者数並びに専門領域の下位領域からも検討された。その結果、体育科教育学と保健の専門領域では所属者の母数が違うことや専門領域の研究コードの違いがあることが紹介された。ここでは、保健科教育学の専門家はどこで育てることができるのかという問題が浮上することとなった。以上を踏まえ、1)保健科教育学の専門家が不足、2)教科の指導法の実施実態について検証する必要、並びに3)保健科教育学と体育科教育学の連携に関する論議の必要性が指摘された。

松田氏は、教員養成の課題とそれらを政策ベースの論議から検討したいとし、行政レベルで用いられてきた資料を用い、教員養成にかかわる過去20年程度の政策提案を分かり易く紹介された。例えば、令和元年6月中央教育審議会6月資料では養成に関して基礎的・基盤的な学修、教職に関する実際を体験させる機会の充実、そこにつながる教職課程の質の保証、高校、教科、教職に関する分断と関連が指摘されるともに1)新たな教育課題への対応が遅れること、2)学校現場の変化に対応できていないこと、3)大学教員の研究的関心に偏っていることが問題視されていることが紹介された。加えて、中野氏が紹介されたシラバスへのコアカリキュラムの項目の記載率が10%や50%に留まっていることを踏まえ、質の高い教職課程の提供という観点からみた場合、1)実践的課題と大学での教育内容の乖離と2)新しい教育課題への対応が問題になることが指摘された。

以上の発表の後の論議では、保健科教育学の専門家養成を意図して保健科教育学会が設立されていることや新学習指導要領において保健体育の見方・考え方が示せなかったことの問題点も指摘された。加えて、具体的な改善策提言の必要性が指摘された。さらにこれらの指摘を踏まえつつ、教員養成という観点から見た場合、教科に関する科目の内容と教科の指導法に関する内容の関連づけの必要性や質の高い教員養成の実現に向けた個々の大学での取り組みの必要性、さらには、研究と実践の乖離現象への対応の必要性がシンポジストからは指摘された。

最後に、本シンポジウムに参加した個人的な感想を記してみたい。本シンポジウムで紹介されたデータから浮かび上がるのは、体育学会会員でなくても保健体育の教科の指導法の授業を担当できるという認識である。それは、社会から期待されている教員養成に関する要請に応えていくための知見が体育学会からは生み出されていないという認識の裏返しとも考えられる。確かに、学会は行政からの要請のみに対応して研究課題を設定するわけではない。しかし、社会的な要請に応えるために必要な知見を産出できない、あるいはそれを先導する知見を生み出し得ない学会から次代を担う人材を輩出できるのであろうか。

確かにかつては体育、スポーツ、健康関連の大学等にする研究者は、その多くが体育学会の会員として活動していた。しかし、今日では、体育、スポーツ、健康関連の大学等に勤務しながら体育学会に所属せず研究活動を継続している研究者も増加している。加えて、体育学会の主要な関心事は教員養成のみではなく、体育、スポーツ、健康に関連した研究テーマは多様化している。また、体育学会の専門領域の大部分が、独立学会を設置している。このことは、体育学会に加盟しなくても、独立学会での活動を通して知的生産物をあげればそれでいいのではないかという認識を生み出していくことになる。さらに、この間、独立学会と連動して運営されている専門領域が数多く存在していることや地域協力学会に所属しなくても体育学会の会員として登録できる等、体育学会の運営形式も変化してきた。この傾向を顕著に示したのが、今回の調査結果であったといえる。確かに野坂氏からは保健科教育学と体育科教育学の専門家がともに論議する場が提供される唯一の場が体育学会であるとの指摘があった。また、中野氏の指摘したように、複数の教員の連携がなければ、コアカリキュラムの内容をカバーしきれなくなっていることも無視できない。それは、このような状況改善に向けて学会をどのように組織し、研究成果を社会に還元できる人材育成を図るのかを問い直す時期にきていることを示唆している。

体育学会は、この間、このような問題意識の元で学会大会の開催方法や学会としての社会的プレゼンス向上に向けた試行錯誤を進めてきた。本シンポジウムも、その試行錯誤の中に位置付いている。その意味では本シンポジウムが、各会員が体育学会に所属している意味を問い直す機会として機能したのであったらと願っている。

最後にタイトな日程の中、本シンポジウムの時間枠を確保いただき、スムーズな運営に尽力いただいた第70回大会組織委員会の皆様に感謝申し上げ、稿を閉じたい。

文責：岡出 美則（日本体育大学）

企画シンポジウム2

日　時：9月10日（火）　16：10～18：10
会　場：独立館 DB203
テーマ：新しい時代にふさわしいスポーツ指導者の育成と認定：体育学会の果たすべき役割
司　会：土屋　裕睦（大阪体育大学）、本間　三和子（筑波大学）
演　者：友添　秀則（早稲田大学）　部活動指導員の職務ならびに認定の課題：その質的保証をめぐって
伊藤　雅充（日本体育大学）　日本スポーツ協会公認スポーツ指導者制度の改定について
ジョン・ベールズ（国際コーチングエクセレンス評議会会長）　コーチ教育の国際的潮流と将来展望

○企画シンポジウム２

「新しい時代にふさわしいスポーツ指導者の育成と認定：体育学会の果たすべき役割」と題して、友添秀則（早稲田大学教授）、伊藤雅充（日本体育大学教授）、ジョン・ベールズ（国際コーチングエクセレンス評議会会長）をシンポジストにお招きし、土屋裕睦（大阪体育大学教授）、本間三和子（筑波大学教授）の2名の司会により実施した。シンポジウムでは「改革期にあるスポーツ指導者育成・認定の課題を探り、日本体育学会の果たすべき役割を明確にすること」を目的に、新しい時代にふさわしいスポーツ指導者の育成・認定制度の理解を深め、日本のスポーツ指導者育成の現状について、国際的視点から点検・評価を行いつつ、日本体育学会が学術団体としてどのように貢献できるかを検討した。会場にはおよそ350名の会員が集まり、会場に設置された同時通訳機能のあるモニターも活用しながら、質疑応答も含め活発な議論が行なわれ、部活動指導員の資質向上への協力やコーチデベロッパーとしての貢献等、学会として取り組む課題が明確になった。なお、ベースボールマガジン社の取材があり、このシンポジウムの様子はコーチングクリニック2019年10月号に紹介される予定である。

文責：土屋 裕睦（大阪体育大学）

企画シンポジウム3 【一般公開】（国際交流委員会・若手研究者委員会合同企画）

日　時：9月11日（水）　15：00～17：00
会　場：独立館 DB203
キーノートレクチャー テーマ：Technological evolution and physical education, health and sport sciences
演　者：Darlene A. Kluka, (D Phil, PhD, Vice President, International Council of Sport Science and Physical Education (ICSSPE))
シンポジウム テーマ：テクノロジーの進化と体育・健康・スポーツ科学：eスポーツを題材に
司　会：田原　淳子（国士舘大学：国際交流委員会）、國部　雅大（筑波大学：若手研究者委員会）
演　者：佐藤　晋太郎（早稲田大学）　eスポーツに関する研究動向と教育機関におけるプログラム化の現状
田中　彰吾（東海大学）　身体性哲学からみるeスポーツ
秋吉　遼子（東海大学：若手研究者委員会）　eスポーツと体育・健康・スポーツ科学の接点とは

○概要

本シンポジウムの目的は、近年目覚ましい進化を遂げている新たなテクノロジーが、体育・健康・スポーツ科学に与える影響を多様な視点から議論することであった。とりわけ新たなテクノロジーが集約されたeスポーツを中心に、その発展と拡大に内包されている可能性と危険性について議論を深めることを目指した。本企画は、国際交流委員会と若手研究者委員会の共催および一般公開で行われ、キーノートレクチャーとシンポジウムで構成された。キーノートレクチャーには、ICSSPE副会長でeスポーツに関する検討プロジェクトを率いるDarlence A. Kluka氏を招き、グローバルな視点から、テクノロジーの進化と体育・健康・スポーツ科学について解説していただいた。続くシンポジウムではeスポーツに焦点を絞って、3名の登壇者による話題提供とディスカッションが行われ、Kluka氏ならびにフロアとの活発なディスカッションが行われた。当日は、400名を超える参加者があり、テーマに対する関心の高さがうかがえた。

○キーノートレクチャーについて

Kluka氏によるキーノートレクチャーでは、デジタルネットワーキング、ロボット技術、発展を続ける消費者向け電子機器（ウェアラブルコンピュータなど）といった、我々に身近なテクノロジーのみならず、より先進的でグローバルなテクノロジーの進化と社会・経済的ファクターとの関わりについて、ユーモアを交えた解説をしていただいた。特に、スポーツと結び付いた最新の科学知識の力と技術イノベーションを意味する「スポーツ・テクノサイエンス」をキーワードとして、我々の生活の中に存在していたスポーツのあり方が大きく変化していく、あるいは既に変化していることを多様な学術的エビデンスをもとに提示していただいた。講演の最後には、eスポーツに関する若手研究者への問いを提示していただき、コンテンツとしてのeスポーツの流通やeスポーツに係る選手契約をはじめとした「人材エコシステム」を例として、若い研究者が展望するeスポーツの将来について質問が投げかけられた。

○シンポジウムについて

シンポジウムでは、田原淳子氏（国士舘大学）と國部雅大氏（筑波大学）によるコーディネートのもと、佐藤晋太郎氏（早稲田大学）、田中彰吾氏（東海大学）、秋吉遼子氏（東海大学）からの話題提供から議論を深めた。まず、國部氏による本シンポジウムの趣旨説明をもとに論点を絞った後、佐藤氏からeスポーツとこれまでのスポーツの違いについて「エコシステム」（アクター間の関連図式）の視点から解説され、これまでの研究と大学におけるプログラム化の現状が紹介された。宮崎氏からは、eスポーツの特徴が「道具使用」と「仮想現実」によって説明され、目と手の協調が限定的かつ極端に推進されることや「離人症」を引き起こす可能性について問題が提起された。若手研究者委員会を代表して登壇された秋吉氏からは、事前に実施した若手会員へのアンケートや議論をもとに、若手研究者からみたeスポーツの可能性と課題が報告され、スポーツをユニバーサルなものにしていく半面、暴力や依存症を助長するなどの具体的な問題が提

起された。いずれも功罪・正負の側面について論点が提示されたが、その後、キーノートスピーカーのKluka氏からのコメント、そしてフロアからの質問によりスポーツの近未来像について意見が交わされた。現在進行中のテーマを扱ったため、今後の議論の広がりを期待できる内容となった。

○運営について

Kluka氏のキーノートレクチャーの内容については、事前にフルペーパーを送っていただき、専門業者に翻訳を依頼して印刷した資料を参加者に配布した（500部）。当日のKulka氏のコメントは、専門業者に逐次通訳を依頼すると共に、字幕による同時通訳が行われた。本企画は、国際交流委員会と若手研究者委員会の共同企画であったため、国際交流委員会がキーノートレクチャー、若手研究者委員会がシンポジウムの企画を立てた後、事前に国際交流委員会担当理事と若手研究者委員会委員長およびシンポジウム登壇者を中心に、テーマや内容、キーノートレクチャーとシンポジウムの関連について、すり合わせを行った。海外ゲストによるキーノートレクチャー、３名の登壇者によるシンポジウムに加え、キーノートスピーカーからのコメントおよびフロアとのディスカッションを２時間で行ったため、非常にタイトなスケジュールになってしまったことは否めない。なお同日・同時刻には別会場で組織委員会企画シンポジウム「大学体育教員の使命を考える～教養体育の担い手の育成に向けて～」があり、こちらも若手研究者の課題を扱うものであったため、参加者が分散してしまう懸念が指摘された。なお、本部企画シンポジウムについては、報告書を作成し、J-Stageで公開することになっている。

○その他

2018年度に常設委員会として設置された若手研究者委員会が、国際交流委員会と共同で企画運営を進め、一般公開シンポジウムを行ったことの意義は大きく、これまで進めてきた若手会員間の交流のみならず、国際的かつ世代を超えた交流機会となった。また本企画は、次年度開催予定のThe 2020 Yokohama Sport Conferenceへの参加を促すことも意図して企画された。

文責：朝倉 雅史（早稲田大学）

大会組織委員会企画

基調講演

日　時：9月10日（火）15：00～16：00
会　場：独立館 DB203
テーマ：福澤諭吉とスポーツ
司　会：石手　靖（慶應義塾大学体育研究所）
演　者：山内　慶太（慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科・福澤研究センター）
参加者数：約400名

◯概要

この度の基調講演では、慶應義塾大学において慶應義塾史や小泉信三先生の研究をされている山内慶太氏にご講演頂いた。その内容としては、慶應義塾大学の応援指導部の部長という立場で学生スポーツに密接に関わり、学校作りや教育委員の立場で初等教育や地域スポーツを考え、常にスポーツの在り方を模索しておられる山内氏の歴史観、歴史感覚をお聞きすることができた。

福澤諭吉に始まる慶應義塾における教育の実践において運動を重視していた背景としては、①福澤は健康の為の身体活動の重要性を良く認識しており、自らも日常の生活で身体活動を実践する人であったこと、②福澤は個人の独立を重視していたが、その独立を支える要素として、身体の健康を重視し、活溌な精神、活溌な智力を支えるためにも身体を積極的に鍛える必要を強調していたこと、しかも、乳幼児期からの発達段階に応じた教育の中での運動の在り方を考え、まずは「身体の発育」から、そして「精神の教育」、次いで「読書推理」と徐々に比重が移っていくように考えていたこと、③健康な身体は独立の人を支える一要素であって、これが全てではないと説いたこと、である。

このような福澤の教育観の影響を強く受けて、盛んに行われてきた慶應義塾のスポーツを通じた「実学」の精神と、立場や年齢を超えて、独立した個人として尊重しあう関係づくり等に触れることができた。福澤の体育観・スポーツ観、そして超高齢社会における健康の維持増進、スポーツ界におけるハラスメント等の不祥事の予防など60分という短い時間の中で教育の本質論をご提言頂いた。

文責：石手 靖（慶應義塾大学）

特別講演 【一般公開】

日　時：9月11日（水）17：10～18：00
会　場：独立館 DB203
テーマ：ソサエティ5.0に対する教育のあり方
司　会：石手　靖（慶應義塾大学体育研究所）
演　者：上原　明（大正製薬ホールディングス株式会社）
参加者数：約300名

◯概要

この度の特別講演では、大正製薬ホールディングス株式会社代表取締役社長の上原明氏をお招きしご講演頂いた。上原氏は、慶應義塾大学理事・評議員でおられるとともに上原記念生命科学財団や複数大学の理事もお務めでおられる。

ご講演の内容は、上原氏ご本人の企業人としての体験から得た物事の考え方、捉え方を中心として、これからの社会を支える現在の大学生への期待、そしてその教育に携わる大学と大学教員のあり方など時間内では収まり切れない内容であった。

現在の時代は、新技術開発による新市場の創造が期待されており、既存産業及び教育等のあり方が問われ、従来のモデルからの転進・進化が求められている。日本経団連等が唱えている「ソサエティ5.0」とは「デジタル技術と現実」を高度に融合させ、多様な想像力や創造力を融合させて、「社会問題の解決と新たな価値を創造」する未来社会の実現を目指すものである。

このような時代の流れに対応した大学教育のあり方は如何なるものか。その基本は学問、スポーツ、芸術等のあらゆる機会をとらえて、学生に「学びの基本」を身に付けさせることである。現在の世の中は、政治、ビジネス、教育等全ての組織において、ガバナンス、コンプライアンス、マネジメント等の透明性が求められている。これは如何なる組織を創ろうとも、要は運営の責に着くトップの「品性」によるところが大きい。上原氏の真摯かつ的確なお考えをお聞きすることができた。

文責：石手 靖（慶應義塾大学）

組織委員会・体育史専門領域合同シンポジウム 【一般公開】

日　時：9月12日（木）　13：00～15：00
会　場：独立館 DB203
テーマ：自立・自律した個人に価値をおく社会における体育・スポーツ　－福澤諭吉とその時代に手がかりを求めて－
司　会：來田　享子（中京大学）、鳥海　崇（慶應義塾大学体育研究所）
演　者：中澤　篤史（早稲田大学）　福澤諭吉の時代における学生スポーツ　－明治期から昭和戦前期まで－
山内　慶太（慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科・福澤研究センター）
慶應義塾における体育観・スポーツ観の展開　－福澤諭吉から小泉信三へ－
大久保　英哲（金沢星稜大学）　福澤諭吉の思想の地方体育への波及
－「鳳至・珠洲二郡教育協議会日誌」（1880年）から－
都倉　武之（慶應義塾福澤研究センター）
戦時下における慶應義塾の学生スポーツの実態とスポーツ観
－「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト収集資料を例に－

◯シンポジウムについて

一般参加も含めた参加者は100人程度とやや寂しかったが、來田氏の全体趣旨説明、鳥海による発表者の紹介および注意事項の伝達によりシンポジウムは始まった。

早稲田大学の中澤氏には「福澤諭吉の時代における学生スポーツ―明治期から昭和戦前期まで―」というテーマで発表いただいた。当時の五輪出場者における大学生の割合などから、いかに大学生が日本のスポーツを支えていたかを知ることができた。

続いて慶應義塾大学の山内氏には「慶應義塾における体育観・スポーツ観の展開―福澤諭吉から小泉信三へ―」というテーマで発表いただいた。基調講演の内容も含めて彼らの著書などを紹介いただき、福澤から小泉に至る連続性についてうかがい知ることができた。

さらに金沢星稜大学の大久保氏には「福澤諭吉の思想の地方体育への波及「鳳至・珠洲二郡教育協議会日誌」（1880年）から」というテーマで発表いただいた。一見関係のなさそうな福澤と地方体育であったが、大久保氏の丁寧な資料の解説から、当時の福澤の思想がいかに広がっていたかを感じ取ることができた。

最後に慶應義塾大学の都倉氏には「戦時下における慶應義塾の学生スポーツの実態とスポーツ観―「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト収集資料を例に―」というテーマで発表いただいた。戦時下の学生の手記から、その筆跡を見るだけでも当時の様子をうかがい知ることができ、このことから小さな物でも資料を保管することの重要性を痛感させられた。

來田氏による全体統括をして締めくくった。事前の打ち合わせの段階から、発表者の扱うテーマが広範であり、統一的な結論は見出せないだろう、と司会者および発表者の間で共通認識は取れていた。実際にそれぞれの発表者の内容は多岐に渡り、かつ時間的な余裕もなかったため、参加者との質疑および結論の表出は見送られた。しかしながら、その後の自由時間では参加者と発表者との間で長時間の議論が発生しており、参加者にとっては興味深い内容であったと推察された。

◯運営について

事前打ち合わせの教室と食事を手配していただき、開催1時間前に集合、食事をしながら打ち合わせを実施し、シンポジウム会場への移動という段取りであった。食事の終盤にシンポジウム会場から事前準備のために集合するよう依頼があり、打ち合わせもそこそこに会場への移動となった。打ち合わせの開始時間を早めにするか、教室の場所をシンポジウム会場に近い場所にする調整が必要かもしれない。

大教室を２つ用意していただいたが、結果的に教室内は閑散としていた。学会最終日の最終プログラムである一方、他の会場でも同時に発表が組まれていたこともあり、残念ながら多くの聴衆を集めるに至らなかった。例年最終日は人が集まらない、という話もあるため、開催日時の設定もしくは教室の手配に関しては調整が必要かもしれない。

事前の想定では、参加者との議論の時間はそれほど取れないだろうと考えられており、実際にその通りになった。ただし、もし参加者との議論をする場合、教室が広すぎて聴衆が散在しているので、円滑な質疑ができたか心配であった。

他の講演などでも利用していた同時文字起こしに関しては発表者からも好評であった。また、手配された弁当に関しても発表者から好評であった。

例年、参加者から発表スライドが欲しい、という要望があるということで、発表者に確認を取ったが、半数以上の方が画像などのプライバシーや著作権の関係で難しいとの回答を受けた。そのため急遽、発表スライドを希望する参加者はシンポジウム終了後に各発表者に直接依頼するよう伝えた。この点に関して当日は大きな混乱もなく終えることができた。

◯その他

今後の体育・スポーツのあり方を知る上で示唆に富む内容であったが、来場者の年齢層が高く、今後の体育・スポーツを支えていく若い方々への訴求を工夫していく必要があると感じられた。

司会の來田氏には当シンポジウムの企画段階から発表者の選定、サポートのみならず当日の多岐にわたる話題に対していかに収めるかという難しい舵取りに至るまで、献身的にご尽力いただいた。ここに深く感謝申し上げる次第である。

文責：鳥海 崇（慶應義塾大学）

大会組織委員会企画シンポジウム

日　時：9月11日（水）15：00～17：00
会　場：独立館 D101
テーマ：「大学体育教員の使命を考える　～教養体育の担い手の育成に向けて～」
コーディネーター：村山　光義（慶應義塾大学体育研究所）
演　者：羽田　貴史（広島大学・東北大学名誉教授，広島大学高等教育研究開発センター客員教授）
　　教養教育としての体育の再構築－教養体育の専門性開発の拠点形成を－
　　高木　英樹（筑波大学大学院　大学体育スポーツ高度化共同専攻）
　　大学体育教員の使命と資質～大学体育教員養成の視点から～
　　鈴木　宏哉（順天堂大学　スポーツ健康科学部）
　　若手会員が考える大学教養体育と大学教員養成

◯シンポジウムの内容について

本シンポジウムは、大学における「体育教員」の育成について考えるものであった。冒頭の趣旨説明では、体育学会の今後において、「スポーツ」「健康」に関わる専門研究の深化とともに「体育」のあり方が議論されるべきであり、大学教育の未来を支える体育教員の育成を考える必要性が投げかけられた。引き続き３名のシンポジストから報告がなされた。

羽田貴史氏（東北大学名誉教授）からは大学教員の教育能力開発の取り組みについて、新任教員開発プログラムや英国のPostgraduate Certificate in Higher Education等、国内外の事例を紹介いただいた。体育に限らず大学教員のFDはステージによって異なり、また教育の変化に応じて思考停止せず継続的に取り組む必要があることが述べられた。

高木英樹氏（筑波大学）からは、大学体育教員育成の博士課程として筑波大学と鹿屋体育大学が共同する「大学体育スポーツ高度化共同専攻」の専攻長として、専攻の具体的内容を解説いただいた。専攻のコンセプトは教育と研究の循環を先導する高度な学術的職業人としての体育教員の育成であり、コースワークを通じて実践的な研究・教育能力の獲得が目指されている。そのため「高い倫理観と多様な国際感覚に裏付けされた教養を持つこと」が最も重要であることが述べられた。

鈴木宏哉氏（順天堂大学）からは学会の若手研究者委員会委員長として、若手研究者の教養体育に関する意識についてアンケート結果の報告がなされた。84名の回答結果から、大学体育の重要性やその実践に肯定的な意見が多数を占め、運動・健康増進の機会、初年次教育や人間作りに有効、スポーツを学ぶ場などの意義を感じていることが示された。また、7割ほどが教育能力を高める必要性を感じており、その場を大学院カリキュラムやTAの実践などから得るべきといった意見が紹介された。総じて、若手研究者も大学体育に取り組む意義や重要性を感じており、研究ばかりを追求するものでもないことがうかがえる報告であった。

その後フロアと意見交換が行なわれ、質問や意見が活発に出された。その主なものとして、「大学体育においては採用する側の責任が大きい。研究重視に偏って教育能力への注視が弱いことが問題」「大学体育スポーツ高度化共同専攻においては、学位に付与される名称からその意味が浸透していくかを考えるべき」「体育のことばかりでなく、小中高との連携などを視野に教育カリキュラムを考えるべき」「教養体育のインターン的な研修の場が必要」「健康教育に偏ると外注（フィットネス産業）でよくなってしまうので、体育の意義を主張すべき」などであった。また、そうした課題解決に資格や研修について検討するべき課題が多いことも示されたが、その解決への道として多様な事例から「グットプラクティス」を集め、情報を共有してくことが重要という方向性が見えたと感じられた。

○運営・その他について

会場にはおよそ200名が参加していた。会場内のマイクが中央スタンドにあったため、質疑のために席を立つことがしにくい状況ではあった。しかし、聴衆として参加していた実行委員がマイクを運ぶ役を担ってくれたり、直接マイクに並んで質疑をしてくれる参加者によって議論を進めることができた。

文責：村山 光義（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー1

協　力：日本アクティビティ協会/株式会社プレイケア、KPMGコンサルティング
日　時：9月10日（火）　12：30〜13：30
会　場：独立館 D101
テーマ：eSportsは研究対象となりえるか？
司　会：加藤　貴昭（慶應義塾大学環境情報学部）
演　者：永野　智久（横浜商科大学）
　　川﨑　陽一（日本アクティビティ協会/株式会社プレイケア）
　　Hyun, Baro（KPMGコンサルティング）

今回のランチョンセミナーでは、実際にeSportsを体験してもらうコーナーを設けたり、サッカーFIFAのプロ選手1名、野球パワプロのプロ選手2名にも参加してもらい、セッション内で対談時間を設ける等の工夫を行った。結果的に、演者4名（司会1名を含む）の発表時間が10分程度となってしまったことから、全体60分では伝えきれなかった部分も多く、さらにはフロアとの質疑時間も取れなかった。お弁当配布の先着100名は早々に埋まったと聞いていたが、実際には200名弱の参加者であったようである。参加者の積極的な行動（ゲームの体験や質問など）を促すことができなかったことも反省すべき点ではあるが、体育学会という場で初めてeSportsに触れる機会を作れたことは意義があったと自負している。

文責：加藤 貴昭（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー2

協　力：セノー株式会社
日　時：9月10日（火）　12：30〜13：30
会　場：独立館 D307
テーマ：良姿勢と歩行を教育する体幹訓練機器「トランクソリューション」
司　会：瀬戸口　祐剛（セノー株式会社）
演　者：勝平　純司（新潟医療福祉大学・東京大学医学部附属病院22世紀医療センター）

◯セミナーについて

9月10日（火）12時30分〜13時30分まで独立館D307の教室にてランチョンセミナー2として、『良姿勢と歩行を教育する体幹訓練器「トランクソリューション」』を瀬戸口祐剛さん（セノー株式会社）の司会により開催された。演者は勝平純司先生（新潟医療福祉大学・東京大学医学部附属病院22世紀医療センター）であった。約50名の参加者が集まった。チケットを確保できなかった方も約１０名が聴講した。

腰の痛みの原因を研究した結果、腹筋の力を発揮させながら姿勢を整えると腰部負担を軽減でき、歩行に関する問題も解決できるという研究結果に基づき開発された機器「トランクソリューション」の説明が行われた。トランクソリューションを勝平先生が実際に着用をしながら、体幹を伸展、骨盤を前傾させ、かつインナーマッスルの活動を促し、身体能力及び運動能力を向上させる機器であるとの講演であった。また、今後の社会現場での活用事例を紹介しながら発表は進んだ。講演終了後は、３名程が演者に質問するなど、活発な意見交換が行われた。

◯運営について

本ランチョンセミナーでは，教員1名、学生スタッフ1名によって運営が行われた。全体を通して大きなトラブルもなく予定通りに進行することができた。企画者であるセノーの方が資料の配布を行ってくれた。チケット回収およびお弁当配布については学生スタッフが行い、教員が補助をした。準備されたお弁当は５個程残った。お弁当のゴミの片付けは学生スタッフと教員が行った。

文責：樋口 裕輔（慶應義塾志木高等学校）

ランチョンセミナー3

協　力：日本バスケットボール学会
日　時：9月10日（火）　12：30〜13：30
会　場：独立館 D308
テーマ：バスケットボールとオリンピックのこれまでとこれから
司　会：中瀬　雄三（アルバルク東京）
演　者：谷釜　尋徳（東洋大学）　　バスケットボールとオリンピックの歴史
　　冨田　幸祐（日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所）　　オリンピックにおける競技種目の意味

谷釜先生からは「バスケットボールとオリンピックの歴史」と題して、男子日本代表チームがこれまで出場してきたオリンピックでの成績や当時の記録を基にしたチームの方針、他の国々との違いなどに関する解説が行わるとともに、未来への展望などが語られた。また、冨田先生からは、「オリンピックにおける競技種目の意義」と題して、オリンピック種目の変遷や各競技種目におけるオリンピックの位置づけなどが報告された。

因みに、当セミナーへの参加者は70名超。2020年東京オリンピックへの出場が危ぶまれた男子日本代表チームも、現在中国で行われているワールドカップへの出場権を得たことで、開催国枠でのオリンピック出場も認められたこと、東京オリンピックの開幕まで既に1年を切ったことなどを考えると、極めてタイムリーな内容のセミナーだったといえるだろう。

文責：加藤 大仁（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー4

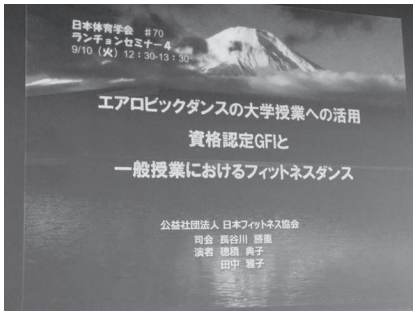
協　力：公益社団法人　日本フィットネス協会（JAFA）
日　時：9月10日（火）　12：30〜13：30
会　場：独立館 D412
テーマ：エアロビックダンスの大学授業への活用 資格認定ＧＦＩと一般授業におけるフィットネスダンス
司　会：長谷川　勝重（公益社団法人日本フィットネス協会　事務局長）
演　者：穂積　典子（JAFA/GFIエグザミナー）　田中　雅子（慶應義塾大学）

◯セミナーについて

初日の9月10日（火）12時30分〜13時30分まで独立館D412の教室にてランチョンセミナー4として，「エアロビックダンスの大学授業への活用　資格認定GFIと一般授業におけるフィットネスダンス」を長谷川勝重先生（公益社団法人日本フィットネス協会　事務局長）の司会により開催された．演者は穂積典子先生（JAFA/GFIエグザミナー），田中雅子先生（慶應義塾大学非常勤講師）であった．約40名の参加者が集まった．（公社）日本フィットネス協会が認定する指導者資格「GFI」が，体育系大学・短大に導入されており，一般授業においてフィットネスダンスが採用されていることを背景に，実際に学生自身がダンスを作成して，学生のみで運動を行っている事例等を紹介しながら発表は進んだ．発表終了後は活発な質疑応答および意見交換が行われた．

◯運営について

本ランチョンセミナーでは，教員1名，学生スタッフ2名によって運営が行われた．全体を通して大きなトラブルもなく予定通りに進行することができた．企画者であるフィットネスダンス協会の方が，受付をしながら参加者の名前・所属等を把握したいとのことで，急遽教室内に受付ブースを作り，チケット回収およびお弁当配布についてはフィットネス協会関係者の方が行った．



文責：奥山 静代（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー5

日　時：9月11日（水）　12：00〜13：00
会　場：独立館 D101
テーマ：システム×デザイン思考で街や人を元気に 〜トップアスリートからグラスルーツまで〜
司　会：村松　憲（慶應義塾大学体育研究所）
演　者：神武　直彦（慶應義塾大学システムデザインマネジメント研究科）

○ランチョンセミナー

9月11日（水）の12時から13時まで、独立館のD101教室において、慶應義塾大学大学院システムデザインマネジメント研究科教授の神武直彦氏が「システム×デザイン思考で街や人を元気に 〜トップアスリートからグラスルーツまで〜」と題して講演を行った。神武氏は宇宙航空研究開発機構で勤務した経験を持ち、本セミナーでは高精度測位GNSS (Global Navigation Satellite System)受信機を様々な種目のスポーツ中に選手の背中に装着することで、選手の位置情報を高い水準で検知し、またそれをビデオカメラの映像と同期することにより、戦術面や体力面の強化に役立てる事例などを紹介した。

講演終了後に数多くの参加者が神武氏に質問するなど、関心の強さがうかがえた。

○運営について

教室においてあらかじめ配られたチケットとお弁当・お茶を交換する作業はアルバイト大学生が1名で行ったが、特に滞りもなく円滑に進んだ。

○その他

教室に設置してある映像・音響機器のHDMI端子と持ち込みPCを接続する際にエラーが発生したが、VGA端子からの接続に変更することによって問題なく接続することができた。

文責：村松 憲（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー6

協　力：体育心理学専門領域
日　時：9月11日（水）　12：20〜13：20
会　場：第4校舎B棟 J21
テーマ：体育・スポーツ心理学研究領域のこれから
司　会：山本　裕二（名古屋大学、体育心理学専門領域会長、スポーツ心理学会理事長）
報　告：工藤　和俊（東京大学、体育心理学専門領域理事長）
　　木島　章文（山梨大学、日本体育学会組織・事業改革特別委員会委員）
指定討論者：荒木　雅信（日本福祉大学、スポーツ心理学会会長）
　　阿江　美恵子（東京女子体育大学、体育心理学専門領域前会長）
　　土屋　裕睦（大阪体育大学、日本体育学会前理事）

ランチョンセミナー6は、9月11日12時20分から13時20分まで行われた。参加者は約120名であった。名古屋大学教授の山本裕二先生の司会によりランチョンセミナーが進行し、報告者2名（東京大学准教授／体育心理学専門領域理事長の工藤和俊先生、山梨大学教授／日本体育学会組織・事業改革特別委員会委員の木島章文先生）と指定討論者3名（日本福祉大学教授／日本スポーツ心理学会会長の荒木雅信先生、東京女子体育大学教授／体育心理学専門領域前会長の阿江美恵子先生、大阪体育大学教授／日本体育学会前理事の土屋裕睦先生）を中心に、日本体育学会体育心理学専門領域と日本スポーツ心理学会の運営・統合・役割などについて活発な議論が交わされた。

文責：森 将輝（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー7

協　力：特定非営利活動法人　日本トレーニング指導者協会（JATI）
日　時：9月11日（水）　12：00〜13：00
会　場：第4校舎B棟 J19
テーマ：科学的手法に基づいたトレーニング指導
司　会：菅野　昌明（愛知学院大学ラグビー部コンディショニング・ディレクター、JATI理事、JATI-SATI）
演　者：油谷　浩之（関西学院大学アメリカンフットボール部ストレングスコーチ、JATI理事、JATI-SATI）
　　科学的手法を使ったトレーニング指導から見えてきた新たな傾向
　　菅野　昌明（愛知学院大学ラグビー部コンディショニング・ディレクター、JATI理事、JATI-SATI）
　　レジスタンストレーニングの最新情報を活用したトレーニング指導

〇ランチョンセミナー

2部構成にて行われた。前半は、愛知学院大学ラグビー部コンディショニング・ディレクターの菅野昌明氏から『科学的手法に基づいたトレーニング指導』について講演があった。後半は、関西学院大学アメリカンフットボール部ストレングスコーチ、JATI理事、JATI-SATIの油谷浩之氏から『科学的手法を使ったトレーニング指導から見えてきた新たな傾向』についての講演があった。両者ともに、“科学的手法”というキーワードが入っていたこともあり、現場と研究の紐付けを意識された講演内容であった。講演終了後は、来場者の何名かが演者に質問するなど、会全体を通して盛況であった。

〇運営について

特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会の担当者と事前に打ち合わせをし、PC操作を協会側が担当することになった。したがって、ランチョンセミナーお弁当チケットの回収・配布と特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会パンフレットの配布については会場担当教員および会場担当学生が担当した。会場後方入口1箇所から入場を誘導し、分担しながら作業を行なった。準備されたお弁当も残ることなく全て受け取られた。配布物残部は、ランチョンセミナーお弁当チケットを確保できなかった方々向けに会場後方に設置した。　文責：稲見 崇孝（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー8

協　力：一般社団法人　日本フライングディスク協会
日　時：9月11日（水）　12：00〜13：00
会　場：独立館 D307
テーマ：「フライングディスク」の体育教材としての価値
演　者：師岡　文男（日本フライングディスク協会会長、上智大学名誉教授）
　　本田　雅一（日本フライングディスク協会副会長、国際基督教大学・武蔵野美術大学講師）

フライングディスクを体育授業に活用する有効性について、日本フライングディスク協会会長の師岡文男氏および同副会長の本田雅一氏から講演がなされた。フライングディスクの歴史、その優れた飛行特性などの基礎的解説（飛距離世界記録338m・滞空時間世界記録16秒・スピード世界記録時速152km、ボールには出せない大きなカーブ等）や、これを用いた様々な競技種目の「アルティメット」「ディスクゴルフ」「ガッツ」「ダブルディスクコート」「フリースタイル」またその他の個人種目について紹介がなされた。また、アルティメットは国際総合競技大会ワールドゲームズの正式競技種目に採用されており、2015年にはIOC承認団体となり国際的普及に力がそそがれている点や、国内でも日本フライングディスク協会はJOC・日本スポーツ協会の加盟団体として幅広くディスクスポーツの普及を行っていることも説明がなされた。さらに、体育授業として取り上げられている実例を、映像を交えて紹介し、フライングディスクの体育教材としての価値が認識できるセミナーであった。参加者は定員70名でほぼ満席の盛況ぶりで、高い関心が示された。

文責：村山 光義（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー9

協　力：体育心理学専門領域
日　時：9月12日（木）　12：30〜13：30
会　場：第4校舎B棟 J21
テーマ：日独体育心理学交流
司　会：國部　雅大（筑波大学）
発　表：田中　美吏（武庫川女子大学）
　　樋口　貴広（首都大学東京）
指定討論者：Markus Raab（ケルン体育大学）

ランチョンセミナー9は、9月12日12時30分から13時30分まで行われた。参加者は約120名であった。筑波大学助教の國部雅大先生の司会によりランチョンセミナーが進行し、2名の演者（武庫川女子大学准教授の田中美吏先生、首都大学東京教授の樋口貴広先生）により話題提供がなされた。テーマは、「日独体育心理学交流」であり、指定討論者がドイツからいらっしゃったMarkus Raab先生（Professor of Psychology, German Sport University Cologne）であった。田中先生より、緊張がパフォーマンスに及ぼす影響についてパイオニア的研究から最新の研究までお話いただいた。樋口先生より、歩行動作中に存在する障害物の回避行動の知覚認知機能についてお話いただいた。日本とドイツの体育心理学の研究に通じて議論を深めるなどして、活発な交流が行われた。

文責：森 将輝（慶應義塾大学）

ランチョンセミナー10

協　力：公益社団法人 日本オリエンテーリング協会
日　時：9月12日（木）　12：00〜13：00
会　場：独立館 D412
テーマ：体験できる屋内ミニオリエンテーリング
座　長：山西　哲郎（群馬大学名誉教授）
演　者：松澤　俊行（浜松学院大学短期大学部准教授）

オリエンテーリングに関するランチョンセミナーは今回で3回目となるが、今年は「体験できる屋内ミニオリエンテーリング」と題して、大学生を対象に屋内でオリエンテーリングの授業を展開する際のポイントや注意点などが発表された。

はじめに山西先生よりオリエンテーリングに関する基本的な説明や現状報告が行われた後、松澤先生より配布資料を基にした説明が行われた。次いで、実際にマーカーを置いて室内オリエンテーリングを体験することになったのだが、多くの来場者が積極的に参加していた。その後、確実にマーカーを辿るためのコツや、応用編として壁に見立てたマーカーを避けてルートを検索するといったやり方なども紹介された。参加者は60名以上。非常に有意義なセミナーとなった。

文責：加藤 大仁（慶應義塾大学）

パネル展

日　時：9月10日（火）・11日（水）9：00～17：00、12日（木）9:00～15：00
会　場：独立館 D204
テーマ：福澤諭吉の身体観と体育観と慶應スポーツの展開

◯パネル展について

「福澤諭吉の身体観と体育観と慶應スポーツの展開」のテーマのもと、慶應義塾の創立者である福澤の身体観と体育観とそれを源流とする慶應義塾のスポーツ活動の展開の歩みの一端をパネル展示にて紹介した。全11章に章立てをし、各章毎に章の解説と数枚のパネル、キャプションが展示された。大会期間中、常に開放していたため多くの方に足を運んでいただけた。

◯運営について

前日までに、教員3名でパネルの選定や掲示のレイアウトを行った。パネルのみの展示であったため、期間中のスタッフの配置はなかったが、パネルが落ちてしまっているときがあった。その際には、気づいたスタッフが画鋲を足して補強するなどの対応をした。

文責：福士 徳文（慶應義塾大学）

日吉台地下壕見学ツアー

日　時：9月12日（木）　10:00～12：00
集合場所：独立館 D101
見学場所：日吉台地下壕

慶應義塾の敷地内地下壕に太平洋戦争時の連合艦隊司令部跡があり保存されていることは大変珍しいことから学会オプショナルツアーとして「地下壕見学ツアー」を企画した。

◯ガイダンス

午前中に集合、受付を行った後、地下壕保存の会ボランティアメンバーによる見学の際のガイダンスが行われた。保存の会によるご配慮からコンパクトツアー1時間半、レギュラーツアー2時間（連合艦隊司令部が入った寄宿舎の見学も含む）が組まれたが、ほとんどの見学者がレギュラーツアーで見学を終えた。

事前登録者のキャンセルが若干名あったものの、学会メンバー25名、保存の会メンバー8名、学会スタッフ3名の総勢36名による見学であった。

ガイダンスの様子

◯見学ツアー

保存の会による丁寧な説明とともに臨場感あふれる語りが見学者の心をつかみ、ツアー後に会場に戻られた方々からは「大変感動した」「涙があふれた」などの感想が寄せられ成功裏に終了した。

見学の様子

保存会HPより

文責：板垣 悦子（慶應義塾大学）

大会組織委員会企画
領域横断セッション（オリンピック・パラリンピック／トレーニング／大学生）

会　場：22番教室 / 23番教室 / D201

◯発表について（①紹介時間 ＋ ②ポスター討議）

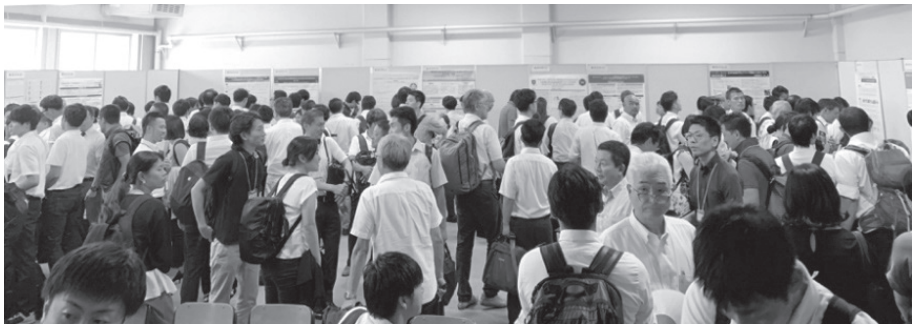
学会事務局にて過去数年間に発表された演題タイトルをテキストマイニング法にて探り、【オリンピック・パラリンピック】【トレーニング】【大学生】の3用語が抽出され、テーマ設定の根拠とした。最終的に、オリンピック・パラリンピックのセッションでは18演題、トレーニングでは15演題、大学生では20演題が発表された。セッションは、①紹介時間（全体で約20分程度）と、②ポスター討議（全体で40分程度）の2部構成とした。①では、発表者一人に1分の時間（パワーポイントスライド1枚）が割り当てられた。これは、研究内容の発表を意味するものではなく、領域を横断し交流が促進されることを意図して“発表者が普段発表する領域”や“スポーツ歴”などを紹介する時間に設定した。“普段発表する領域”の回答から、オリンピック・パラリンピックでは10領域、トレーニングでは9領域、大学生では11領域から応募があったことがわかった。①・②ともに多くの来場者が会場を訪れ、活発な討議がなされた。

①紹介時間での発表の様子

②ポスター討議の様子

◯運営について

①の紹介用スライドは事前受付とし、提出されたスライドを各セッションでまとめプロジェクターからスクリーンに投影した。1分ごとにスライドが切り替わるようアニメーションを設定し、発表時間をコントロールしたこともあり、モデレータとそのサポート役の2名で運営できた。紹介時間での発表中は、会場前方にのみ椅子を配置した。②のポスター討議は、各領域のポスター発表と同様の形式とした。



②ポスター討議中の会場全体の様子

文責：稲見 崇孝（慶應義塾大学）

00 体育哲学

会　場：独立館 D410

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

口頭発表総数は11題を予定し、全日を通してキャンセルはなく、予定された行程は滞りなく遂行された。口頭発表は5つのセッションに分けられ、大会初日（9月10日）にセッション1（10時30分～11時30分）、セッション2（11時30分～12時30分）が、大会2日目（9月11日）にセッション3（13時～14時30分）、そして大会3日目（9月12日）にセッション4（10時10分～11時10分）、セッション5（11時10分～12時10分）がそれぞれ行われた。

内容は次の通りである。「スポーツ世界における道徳法則の検討：カント哲学を中心として」、「バスケットボールの指導において暴力行為を容認させる権力関係に関する研究：ミシェル・フーコーの権力論によるバスケットボールチーム内の規律の受容に関する解釈」、「体育学における人文主義的方向とその教育学的基底：ディースターヴェーク教育学における自己運動概念に基づいて」、「『オデュッセイア』の運動競技に関する研究：運動競技と忍耐力の関係性を中心として」、「体育本来の目的と方法：現象学の誕生以前以後を辿り直して考える」、「体育学における時間論の展望」、「『クラブ活動』についての概念的検討」、「アスリートの社会的価値に関する一考察：トップアスリートの語りから」、「スポーツにおける身体的卓越性について：人間の『機能・働き』を果たすことに着目して」、「体育における新領域への導入的授業に関する原理的考察：身体の習慣的運動の再適応化」、「市民性教育としての体育に関する研究」。

質疑応答については、研究対象に対する着眼点やその研究方法の考え方が異なる研究者から多くの質問、指摘、意見が出された。発表者は、新たな着想や視点を得ることができたように思われる。全体を通して、約30名以上の聴講者が常時フロアにおり、活発で多角的な議論がなされたということは、今大会の口頭発表が、フロアを大いに刺激したことを意味する有意義な時間であった。

○シンポジウムについて

シンポジウムは大会2日目（9月11日）の9時～11時、独立館D410で開催された。「『多様な身体』からスポーツを展望する」というテーマで、荒牧亜衣先生（仙台大学）と松宮智生先生（清和大学）が司会・進行を務められた。シンポジストとそれぞれの題目は、田中愛先生（明星大学）が「多様な身体と『らしさ』について」、司会でもある松宮智生先生（清和大学）が「多様な身体とスポーツ参加をめぐるルールについて」、そして最後に、竹村瑞穂先生（日本福祉大学）が「スポーツ・ジェンダー問題からスポーツを哲学する」と題して発表された。会場は前列数列を除き約50名が入り、ほぼ満席となった。

発表後の質疑応答では、他領域の研究者も含めた活発な意見交換がなされた。議論が深まり、非常に意義深い時間が続いた。開始と終了時間についても、ほぼ時間通りの進行であった。

◯浅田学術奨励賞受賞記念講演について

浅田学術奨励賞受賞記念講演は、大会3日目（9月12日）の9時～10時に開催された。受賞者の松田太希先生（中国地域）による講演テーマは、「『快としての体罰』にどう向き合うか」と題され、関根正美先生（日本体育大学）の司会で約40分の発表後、残り時間を使った質疑応答がなされた。

記念講演はパワーポイントと資料が準備され、発表者はスライドを適宜使用しながら説明をした。会場はシンポジウムと同様に約50名が入り、ほぼ満席となった。発表後の質疑応答では活発な意見交換がなされた。開始と終了時間についても、ほぼ時間通りの進行であった。

◯総会について

総会は大会2日目（9月11日）の11時～12時に、独立館D410で開催された。また、運営委員会は大会初日（9月10日）の12時30分～13時30分まで、独立館D410で開催された。

◯運営について

体育哲学領域の運営は、教員が1名、補助学生が3名、担当した。なお、補助学生は大会3日目より2名体制となったが、最終日には運営に慣れたこともあり、大きい問題はなかった。とりわけ、大会を通した運営上の問題点としては、以下の2点に改善の余地があるように思われる。大会本部はPCセンターでの受付を済ませ、各発表会場のPCへデータをアップロードする作業を受付時に喚起していたが、直前になって自前PCを使用して発表しようとする発表者がおり、会場機器の接続に詳しくない学生が困惑した場面が見られた。また、会場の設備については、設置されているマイクが有線タイプの2本であったため、司会者と発表者のマイクしか準備ができなかった。特にシンポジウムの際は、発表者ごとに有線マイクの移動が必要になった。無線タイプのマイクもあったが、有線マイク使用時には使用（起動）できなかった。全日程を通して、フロアはマイク無しで質疑応答をした。意見交換が滞らない円滑な進行を考えれば、マイクは無線タイプが3本以上あることが望ましいと感じた。

文責：佐藤 洋（明星大学）

01 体育史

会　場：D311

○一般研究発表について（口頭発表）

体育史の一般発表の特徴として、発表者のほとんどが発表スライドの印刷を持参していることであった。持参する枚数が発表者によってまちまちなので、中には発表前に印刷が全てなくなってしまうこともあった。発表者本人が詫びると共に、隣の人と分けて見るように伝えていたので問題はなかったが、参加者が多いということの嬉しい悲鳴ということであろう。ただし、領域として印刷する際の基準となる枚数を指定した方が発表者、聴講者へのお互いに負担なく運営できたのではないかと考える。

また、同様の問題として、発表者の印刷物の持ち込みタイミングがあった。発表の直前に受付に持ち込む者が多かったので、発表者が変わる度に聴講者は印刷物を入手するために部屋の外に出ていた。さらに印刷物を用意していなかったり、全てなくなってしまったりすると無駄足になってしまっていたので、この点に関して領域としてのルールがあると円滑な学会運営ができるのではないかと考えられる。

○シンポジウムについて

初日はシンポジウムだけということもあり、参加者がどれほど集まるか不安であったが、結果的には教室が満席になるほどの大盛況であった。シンポジウムの中盤からは立ち見も出たため、急遽席の増加や座席の融通に協力いただくほどであった。領域担当者によるとこれほど集まるシンポジウムは初めてとのことである。

発表者である関西大学のアレキサンダー・ベネット氏は台風の影響で当日の朝に成田空港に到着したため、大幅な遅参となったが、司会の小田氏はじめシンポジストらの柔軟な対応により、シンポジウムの内容に大きな影響はなかった。

学生スタッフはそれほど多くの作業がなかったため、翌日からの一般研究発表に向けてよい事前準備となったようである。学生たち自らで役割分担し、円滑な運営を心がけていたので、大会運営側スタッフとしても心強かった。初日のシンポジウム前は時間があったので、互いに自己紹介をさせたり世間話をさせたりすることでその後の運営が円滑になった印象がある。

○運営について

大会運営側、領域担当側、学生スタッフとそれぞれの役割分担が明確となり、トラブルなく運営することができた。発表会場外に関しては大会運営側スタッフが、発表会場内に関しては領域担当側スタッフがそれぞれ担当することで、それぞれ関係者との面識があるため意思伝達が非常に早かったのが印象的である。また、学生スタッフもPCの扱いに習熟しており、事前にトラブルが予想されていた発表者の交代の際や事前の発表資料の準備などでの問題がほとんど発生しなかった。

唯一予想外に発生した問題として、発表者が発表スライドを事前に印刷して配布する形式の場合、印刷物の枚数が少なく、聴講者全てに配布することができないことや、印刷を学生スタッフらに依頼され、その対応に手間取ったことである。結果的に本部待機の学生スタッフに対応を依頼したが、例えばPCセンターに印刷機を設置するなどの対応が必要であったかもしれない。ただし、この点はそもそも発表者の責任に関わる問題なので、学会側がどの程度関わるかの問題でもあるだろう。

また、気になった点としては、質問者へのマイク対応である。部屋の中央にマイクを設置していたが、ほとんど利用されることはなかった。これは大教室の場合は通路が確保されている一方、通常形式の教室では通路が確保されておらず、中央のマイクへの動線が狭いだけでなく、聴講者の荷物が床に置かれている場合はさらに遠回りしなければならないた

め、マイクを利用して質問するということがなかったのだと考えられる。部屋の規模からしても必ずしもマイクの利用は必要がなかったので大きな問題にはならなかったし、慣れてくると司会者と学生スタッフの意思疎通がうまくいき質問者を事前に指定することができたので、現場対応という意味でうまく収まった。

最後になるが、対応のほとんどが配布されたマニュアルで対応できた。マニュアル作成に対して感謝申し上げる次第である。

○その他

部屋が3階にあり、階段のすぐそばであるため多くの人が行き交った。その一方で部屋が隅にあるため、廊下の先は行き止まりであったが、部屋の配置が不案内なために行き止まりに向かってしまい、引き返すという人が非常に多かった。最終日は案内図の設置位置を変えることで対応した。

同様に「○○に行きたいのだけれど、どうしたらいいか」という質問も非常に多かった。受付の学生も質問内容に慣れてきて回答もスムーズに行くようになったので問題なかったが、最も多い質問としてはPCセンターの場所を聞くものが多かった。PCセンターを階段のすぐそばに配置するなどすればこのような質問は少なくなったのではないかと考えられる。ただし、受付の学生1人で対応できた問題なので、それほど大きな問題でもなかった。

本領域は無線が配置され、他の領域にも伝える役割であった。初日は受付の学生スタッフに無線も担当してもらっていたが、なかなか要領を得ないので2日目からは大会運営側のスタッフが終始持つこととした。無線に関しては学生ではなく大人のスタッフが持っていた方が意思疎通が円滑に行くようであった。

文責：鳥海 崇（慶應義塾大学）

02 体育社会学

会　場：口頭発表　　第４校舎B棟　J24 / J29 / 39（9月12日のみ）
　　ポスター発表　D202（9月11日）
　　シンポジウム　第４校舎B棟　J24（9月11日）
入場者数（発表日・発表者における延べ総数）
口頭発表　　9月10日　110名　9月11日　100名　9月12日　590名
ポスター発表　60名
シンポジウム　90名

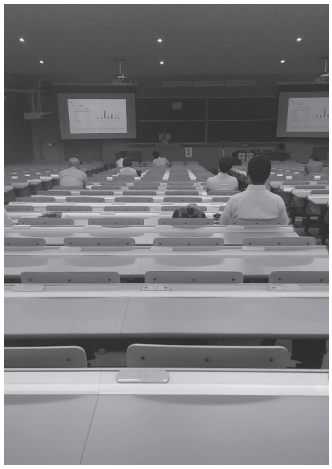
○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

演題は、口頭発表36題、ポスター発表5題であった。発表の内容は、スポーツにおける「金、暇、場所」の必要性や「人権、情報倫理（SNSの善と悪）」の保護や啓発、「スポーツ政策」のありかた、「体力格差、コーチング、体罰、部活動のありかた」における問題点、「ICT、VR」等のスポーツ活用事例と有効性、「武道」をテーマにした日本人気質、その他「オリ・パラスポーツの原点、遊び、ボランティア、UNIVAS」の社会学的トピックス等、多岐にわたり、それぞれの領域の活発な討論が行われた。時代の流れともいえる「体罰」「オリパラ」「UNIVAS」「ラグビー」話題は特に参加者が多い傾向が見受けられた。ポスター発表では演者と参加者がフレンドリーなムードで演題内容に合わせて、今後のスポーツ指導・学習環境、指導者像、武道のスプリチュアルな議論、スポーツの社会学的効果等の啓発と質疑応答のやり取りがあった。なおポスター会場が狭く感じるとともに、室温湿度が高く感じたことを付け加える。

○シンポジウムについて

9月11日の9：00から12：00に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに合わせた「学校教育におけるオリンピック・パラリンピックレガシーを問う」のテーマで、吉田 毅（桐蔭横浜大学）、工藤 保子（大東文化大学）先生のリードにより実施された。演題（演者）は「オリンピズムを教育に　2020以降に何を残すか（中塚　義実，筑波大学付属高等学校）」「公益財団法人日本財団 パラリンピックサポートセンター（パラサポ）の取り組み（小澤 直，公益財団法人日本財団 パラリンピックサポートセンター」「オリンピック・パラリンピック教育の充実に向けて（佐藤 豊，桐蔭横浜大学）」「パラリンピック教育の課題と可能性（渡 正，順天堂大学）」「オリンピック教育は社会に何をもたらすのか（石坂 友司，奈良女子大学）」の中、オリンピック・パラリンピック教育の現状についての実践例の開示とその社会的意義・方向性について議論がなされた。2020年の東京大会をスポーツの祭典的な結果や教育の単なるイベントにしてしまってはならない。この大会で得られると思われる「何が変わるか、あるいは変わってほしい」社会現象や価値を予見して、また未来むけて忘れてほしくない「潜在する喜び、リスペクト、協力、努力、身体知」等の啓発と準備の必要性や教育教材開発の実例が語られた。このシンポジュウムで語られた「リバースエデュケーション（経験した若者が知を伝える）」という叫びが印象的であった。

◯運営について



台風直後の開催であった。気温・湿度が高かったこともあり、会場は空調により快適であったが、廊下や入り口の環境は良いとは言えなくて、発表受付のスタッフの体調が心配された。これに関しては、人員の交代をこまめにして、スタッフ同士が協力して難に至らなかった。ハード的には、体感温度や湿度が和らぐので、風通しを目的とした扇風機があればよかったと思う。初日と中日は会場が対面していたので、参加者の会場移動はスムーズであったが、最終日は会場がひと部屋増えて、しかも階が異なったため、移動に難（聞きたい演題によっては階段を上り下りする苦労）があったと思われる。また、会場が増えた最終日は、スタッフの配備や人数が足らなくて、急遽増員してもらうこととなった。会場が離れている時の当日における参加者の動線／導線やスタッフ数（最終日に会場が増えることへの配慮）等の予見不足も見受けられた。。

加えて、参加の延べ人数ではない、会場をタイムリーに流動する参加者を観察していて、設定された部屋が広すぎた印象が残った。

文責：山内 賢（慶應義塾大学）

03 体育心理学

会　場：慶應義塾大学日吉キャンパス第4校舎B棟J21（ポスター発表以外）、22、23（ポスター発表）

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

口頭発表1は9月10日10時30分から11時50分まで、口頭発表2は9月12日13時40分から15時00分まで行われた。ポスター発表は9月12日9時00分から11時00分まで行われた。参加者数は、口頭発表1では約80名，口頭発表2では約90名であった。大会プログラムに登録された口頭発表8件（2セッション）、ポスター発表74件（2セッション）の全てが発表された。口頭発表1では、座長の三村覚先生（大阪産業大学准教授）により司会進行がなされ、メンタルトレーニング・サポートに関する研究が発表された。口頭発表2では、座長の村山孝之先生（金沢大学准教授）により司会進行がなされ、アスリートの知覚認知機能に関する研究が発表された。口頭発表・ポスター発表共に、演者と聴衆者との間で活発な議論が交わされた。

○シンポジウムについて

シンポジウムは9月11日10時10分から12時00分まで行われた。参加者数は約130名程度であった。日本体育大学准教授の高井秀明先生の司会によりシンポジウムが進行し、3名の演者（園田学園女子大学教授の荒木香織先生、日本大学准教授の橋口泰一先生、日本体育大学教授の西山哲成先生）により話題提供いただいた。荒木先生より、組織文化モデルに基づきラグビー日本代表のチームを鍛えることを事例として、スポーツメンタルトレーニング指導士の多面的な役割についてお話いただいた。橋口先生より、パラアスリートを取り巻く環境を踏まえた、日本パラリンピック委員会における心理サポートの取り組みについてお話いただいた。西山先生より、バイオメカニクスの研究者に加えて自電車競技部監督という指導者の立場として期待する心理サポートについてお話いただいた。質疑応答の時間は十分に設けられ、演者の間および聴衆者と演者の間で活発な議論が交わされた。

◯キーノートレクチャーについて

9月11日9時00分から10時00分まで、広島大学大学院教授の関矢寛史先生の司会によりキーノートレクチャーが進行し、九州大学講師の内田若希先生にご講演いただいた。参加者数は、約80名程度であった。本キーノートレクチャーでは、内田先生より2017年に上梓された著書「自己の可能性を拓く心理学：パラアスリートのライフストーリー」に関する内容のエッセンスについて、先生ご自身のバックグラウンドと絡めてご講演いただいた。

◯運営について

参加者の皆様のご配慮および組織委員会の先生方の迅速な対応により、大きな問題や混乱なく会場運営できました。参加者および委員の皆様に深く感謝申し上げます。

気になった点を挙げるとすれば、以下の2点である。

1点目は、発表者・司会の受付やPCセンターの存在と役割が先生方にあまりなじみがなく、周知されていなかった点である。据え置きのPCにダウンロードされたファイルを用いた場合にも、持ち込みのPCを利用した場合にも、時間通りに発表が行われていたが、若干の混乱があったように窺える。このシステムあるいは周知の仕方について検討する必要性があるかもしれない。

2点目は、会場の壁面工事や消防器具の点検で生じる音が騒音となり、発表が妨げられたこと、参加者が発表内容に集中しづらかったことが挙げられる。今後、学会期間の前にこれらの状況を確認した上で、事前に工事担当者や大学事務室と連携しておく必要性が窺える。

◯その他

特別レクチャーは、9月12日11時10分から12時20分まで行われた。参加者は約100名であった。東京大学准教授の工藤和俊先生の司会により特別レクチャーが進行し、Professor of Psychology, German Sport University CologneのMarkus Raab先生による講演が行われた。本特別レクチャーでは、身体化された意思決定とヒューリスティクスに関する最近の知見について共有された。

総会は、9月11日13時30分から14時30分まで行われた。参加者は約30名であった。開会の辞（東京大学准教授の工藤和俊先生）、会長挨拶（名古屋大学教授の山本裕二先生）、議長選出（慶應義塾大学講師の永野智久先生）が行われた後、2019年度事業など10の事項について報告された。その後、審議事項7つが審議され承認された。

文責：森 将輝（慶應義塾大学）

04 運動生理学

会　場：第4校舎B棟 32教室（シンポジウム・一般口頭発表）、独立館D201（一般ポスター発表）

○シンポジウムについて

専門領域企画として開催された運動生理学分野のシンポジウムは、大会2日目の9月11日（水）に開催された。開催場所は第4校舎B棟32教室、時間は10:00から12:00の2時間で行われた。本シンポジウムのテーマは「エクササイズと脳」であり、サブタイトルとして「至適運動から高強度トレーニングまで」が添えられていた。演者は4名であり、開始にあたり壇上の指定座席に着席された。

まず初めに座長の八田有洋先生（東海大学）から本シンポジウムの概要と演者の先生方について簡単な紹介が有り、続いて八田先生による講演が行われた。司会は2番目の演者である麓　正樹先生（東京国際大学）が代役として務められた。八田先生の講演タイトルは「ライフステージに応じた運動プログラム」であり、約30分間の発表が行われた。発表後、残りの3演題の司会は八田先生が務められた。続いて2人目の演者として麓先生よる講演が「一過性高強度トレーニング前後の脳活動の変化」というタイトルで行われた。発表時間は約30分間であった。次に3番目の演者として中田大貴先生（奈良女子大学）の講演「アスリートの脳」が発表時間約30分間で行われた。最後に4番目の演者として木田哲夫先生（愛知県医療療育総合センター発達障害研究所）から演題タイトル「エクササイズと脳：体育・スポーツ科学における展望」の講演が約30分間で行われた。4名の先生方の講演後、残りの約5分間で座長の八田先生が会場の参加者からの質問を受け付けたところ、2名の先生方から複数の演者に対しての質問が有った。

尚、本シンポジウムの参加者は最大で約140名（11:30頃）であった。

写真1　シンポジウムの様子①

写真2　シンポジウムの様子②

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

運動生理学分野のポスター発表は、大会2日目の9月11日（水）にポスター発表1と2（13:00から13:40まで）およびポスター発表3と4（13:40から14:30まで）として行われた。場所はポスター会場3（独立館D201、体育科教育学と同時同室開催）であった。また演題数は21演題（ポスター発表1が5演題、ポスター発表2が5演題、ポスター発表3が5演題、ポスター発表4が6演題）であった。

まず13:00から13:40までポスター発表1と2の発表と質疑応答が行われた。ポスター発表1の座長は須田和裕先生（東京工業大学），ポスター発表2の座長は萩田太先生（鹿屋体育大学）であった。続いて13:40から14:30までポスター発表3と4の発表と質疑応答が行われた。ポスター発表3の座長は岡本孝信先生（日本体育大学），ポスター発表4の座長は小野誠司先生（筑波大学）であった。

尚、ポスター会場3の参加者は最大で約160名（13:30頃）であった。

運動生理学分野の口頭発表は、大会3日目の9月12日（木）の9:00から10:15まで（口頭発表1と2）および10:30から12:00まで（口頭発表3と4）、場所は第4校舎B棟32教室（口頭発表1と3）およびJ11教室（口頭発表2と4）で行われた。演題数は22演題（口頭発表1が5演題、口頭発表2が5演題、口頭発表3が6演題、口頭発表4が6演題）であった。

口頭発表1の座長は渡邊航平先生（中京大学）で、5名の演者に対してご自身も含めて13名からの質問を受け付けた。口頭発表2の座長は木塚朝博先生（筑波大学）であった。また口頭発表3の座長は武政　徹先生（筑波大学）で、6名の演者に対してご自身も含めて11名からの質問を受け付けた。口頭発表4の座長は前田清司先生（筑波大学）だった。

尚、口頭発表1と3の会場の参加者は最大で約50名（10:00頃）であった。

写真3　ポスター発表の様子

写真4　口頭発表の様子

○運営について

大会2日目の10:00から12:00に開催されたシンポジウム（第4校舎B棟32教室）は、教員スタッフ3名と学生アルバイト2名で運営された。学生アルバイト1人が急遽欠勤だったが、業務は教員スタッフによってカバーすることができた。気付いた点としては、設置されていたポインター（赤）の出力が弱く見え難かった点と会場用（参加者質問用）のワイヤレスマイクが1本のみで少なかった点が挙げられるが、特に問題無く無事に運営することができた。

大会2日目の13:00から14:30に開催されたポスター発表（ポスター会場3：独立館D201）は、教員スタッフ4名と学生アルバイト4名で運営された。運動生理学の演題数は21演題であったが、体育科教育学の27演題と同時同室開催であった為、会場の参加者は約160名に達することも有り少し窮屈に感じる時間帯も有った。また13:00から13:40までポスター発表1と2の発表と質疑応答が同時に行われ、続いて13:40から14:30までポスター発表3と4の発表と質疑応答が同時に行われたが、ポスター発表1と2、ポスター発表3と4はそれぞれ近い位置であった為、同一の発表時間の組合せは少し離れたポスター発表1と3、ポスター発表2と4の組合せの方が良かったように思われた。

大会3日目の9:00から12:00に開催された口頭発表（第4校舎B棟2教室）は、教員スタッフ1名と学生アルバイト4名で運営された。上記のシンポジウムと同様の問題以外、特に問題は見当たらなかった。

○その他

その他に特筆すべき報告事項は見当らなかった。

文責：木村 真規（慶應義塾大学）

05 バイオメカニクス

会　場：32教室　DB203教室

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

バイオメカニクスの口頭発表は初日に開催された．台風の影響により急遽２つの会場が離れてしまい，初日ということもあり会員が会場を把握していないため，集客が欠けてしまったように思われた．初日の32教室には，50名程度が入り,進行はスムーズに行われた．一方DB203教室に関しては，会場が変更されたために運営が困難であった．特に会場が一般口頭発表用にセッテイングされていなかったり，発表PCがネットに繋がっていなかったり様々な問題が生じてしまった．2日目と３日目の口頭発表、ポスター口頭説明とポスター発表については，初日の問題点を全て改善することができ，スムーズな進行で口頭発表を実施することができた．演題の内容に関しては，同じ競技種目で統一されていたため，セッションとしてまとまっていた．

1日目 32教室：口頭50名，DB203教室：口頭50名
2日目 DB203教室：ショートプレゼン90名，ポスター会場100名
3日目 DB203教室：口頭70名，ショートプレゼン80名，ポスター会場100名

○シンポジウムについて

2日目のシンポジウムに関しては，『The rise of next generation』というタイトルのもと，ヒップホップダンス，器械体操そして柔道などこれまであまりバイオメカニクス研究の対象になり得なかった分野の発表が行われた．会場は120名以上の会員が入り，発表者の研究アイディアも興味深い内容であり，参加者も満足な内容であったと思われる．また，発表に対する質問も多く，活発な議論が交わされたシンポジウムであった．

◯キーノートレクチャーについて

ミシシッピ大学のJeremy, P.L氏を招待し,「筋の肥大は筋力増加メカニズムなのか?」というタイトルのもとキーノートレクチャーが行われた. 特に, Ikai and Fukunaga (1968) の筋サイズと筋力の関係性がこれまで定説として考えられてきたが, 現在では, 神経機構が最初に役割を果たし, その後, 筋肥大が大きな役割を果たしていると考えられている. このような新たな知見に対してフロアからも多くの質問が上がり, 活発な深い議論が繰り広げられたたキーノートレクチャーであった. 会場には, 100名の参加者が入り, 賑わっていた.

◯運営について

台風の15号の影響もあり, 当初予定されていた, 33教室の使用ができなくなり, 初日から対応に追われた. 変更後のDB203会場は, 初日に総会が開催されていたために, 朝の段階で担当スタッフが施設機能を十分に把握する時間がなく, 総会終了後のセッション開始10分前では対応が不可能であった.

具体的に問題点を挙げると, PCとネットワークが繋がらなかったり, 演者の発表用PCに常設タイプのPCを用いるとプロジェクター接続ケーブルやランケーブルの長さが発表する位置まで足りなかった. 2日目以降は, 延長ケーブルによって対応できたが, 大会プログラムには, 持ち込みPCの場合VGAと記載されていたため, 発表者がVGAのケーブルを要求し, その対応にも追われた.

また, 会員の多くが発表データに関する注意事項を確認していないため, PCセンターに行かずに会場に直接データを持ってくることが多かった. データの移行について本大会は, 慶應義塾大学のGoogleのシステムを用いたが, 発表者が, 決められた日時までにデータをアップロードしないと, セッションとセッションの空き時間がない場合は, ダウンロードの時間が間に合わなかった. このシステムを用いた運営には, 発表者が期日までにデータをアップロードしていることが重要となる. その他, 一度アップロードしたデータの差し替えなどを希望する場合は, セッション開始20分前などの制限も必要であると思われる. ポスター発表口頭説明のセッションにおいて, 2件ほど開始直前に発表者から発表データの差し替え連絡があった. これは, 全体の進行を妨げる可能性もある. 今後, 特にポスター発表口頭説明のデータは, 会期前に提出期限を設けて提出させ, データの差し替えは一切認めない方が運営上スムーズかと思われる.

学生バイトスタッフについては, 台風の影響によって事前打ち合わせが少なかったせいか, 残念ながらDB203会場ではあまり機能していなかった. 受付や会場案内, クロークなどは、学部生のバイトでもよいが, 口頭発表会場のスタッフは, 学会参加経験者や大学院生の配置が望まれる.

◯その他

特になし。

文責：柏木 悠 (専修大学)

06 体育経営管理

会　場：口頭発表…第4校舎B棟12,　　ポスター発表…独立館D202

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

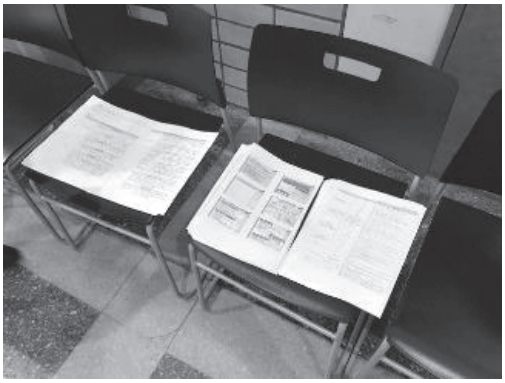
口頭発表は、大会初日（9/10）に6題、3日目（9/12）に14題、あわせて20題の発表があった。すべて予定どおりに進められ、発表中止や演者の変更はなかった。各演題の発表にあたっては50～80名程度の会員が在室し、発表後には活発な討議がなされた。

ポスター発表は、大会2日目（9/11）の午後に行われ、体育経営管理領域では5題の報告があった。いずれも時間前にポスターが準備されており、90分という設定時間の間に、発表者と多くの会員が意見交換・情報交換を活発に行っていた。アダプテッド・スポーツ科学、スポーツ社会学専門領域のポスター発表と同会場であったが、特に混乱はみられなかった。

○シンポジウムについて

シンポジウムは大会2日目（9/11）の午前（9:00-11:00）に口頭発表と同じ第4校舎B棟12において開催された。テーマは、「変化する青少年のスポーツ環境と経営課題：部活動改革を契機とした変革のスキームと方法を探る」、司会は本専門領域会長の木村和彦氏（早稲田大学）と同運営委員長の嶋崎雅規氏（国際武道大学）が務めた。演者は、山本信之氏（静岡市教育委員会）、佐藤充宏氏（徳島大学）、そして作野誠一（早稲田大学）の3名であった。運動部活動をめぐる問題は各所で取り上げられているが、本シンポジウムでは、特に変革･改革に向けた方法論に焦点を合わせ、議論が行われた。80名を超える会員が来場し、各演者の報告ののちにフロアも交えて活発な討議が行われた。

◯運営について



特に大きな問題もなく専門領域としてのプログラムを運営することができた。PC・音響あるいは教室の規模も適正であり、発表者にとっても、また発表を聞く会員にとってもストレスなく過ごすことができたと思われる。資料の配付についても、会場入口で各自取ることができるようにしたり（写真）、提出が遅かったものについては、会場内で配布するなどした。

以下、気がついた点を列挙する。

・口頭発表等の討議におけるフロアのマイク利用については、当初発言者に固定マイクまで移動してもらうことになっていたが、結局これまでの慣行通り、スタッフがマイクを運ぶ形となった。むしろその方が時間的ロスもなく、またスムーズであるように思われる。
・当初は教室がそれほど広くはないので、マイクなしでも質疑応答ができるかとも思われたが、やはり聞きづらいので、教室全体に確実に声が伝わるようマイクは必要である。
・発表者がPCセンターへ行く時間的余裕がなく、直接会場にUSBなどを持参し発表直前にPCにアップするようなケースがみられた。発表データの取り扱いについては、遅滞のない進行を確保するためにも、これまで以上に早めのアップを促す必要がある。
・教員スタッフ、学生スタッフとの連携は良好であり、繰り返しになるが特に大きな問題もなく、きわめてスムーズに会場運営ならびにプログラムのオペレーションを遂行することができた。

◯その他

・演者によって持参する資料数がまちまちで、発表によっては不足することもあった。
・会場後方に座る人が多く、前方に人がいないことから、セッションの最初にスタッフが誘導してもよいかもしれない。

文責：作野 誠一（早稲田大学）

07 発育発達

会　場：J11, D201

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

発育発達領域では口頭発表とポスター発表が行われた。大会2日目に行われた口頭発表では約100名の聴衆のもと、活発なディスカッションが行われた。会場の右前方にスクリーンがあり発表者は会場中央でプレゼンテーションを行ったため、少々発表者がスクリーンを見づらい状況であった。大きなトラブルとなることもなく全体的に盛況であったように感じる。

大会3日目に行われたポスター発表は、60分間の責任着座制によるポスター発表が2セッションに分けられて行われた。ポスター会場は平均的に約80名程度の聴衆があったが狭さを感じることもなく、ディスカッションを行ううえでは十分な環境だった。しかし、当分野におけるポスター発表はプレゼンテーションの時間を設けていなかったため、ディスカッションが開始されるまでに少し時間を要する場面が見受けられた。ポスター発表の醍醐味であるディスカッションを充実させるためにも、短時間であれプレゼンテーションの時間を行うことの必要性を感じた。

○シンポジウムについて

「子どもの“元気”を育む身体活動の可能性」というテーマで野井真吾先生（日本体育大学）が座長を務め、近藤智靖先生（日本体育大学）、石井香織先生（早稲田大学）、城所哲宏先生（国際基督教大学）によるシンポジウムが行われた。今回は、子どものアクティブライフを充実させるための最新の取り組みやその効果に関する話題が提供された。そのため、会場には150名程度の聴衆が集まり講演後にもフロアで活発な意見交換がなされていた。シンポジウムの会場となったJ11教室は、教卓やOA機材の移動が不可能だったため、発表時と総合討論の際のレイアウトは当日座長と決めることになった。臨機応変に対応していただいたスタッフのおかげで、スムーズに会を進行することができた。

○運営について

今回は、事前に発表スライドをPCセンターにてサーバーにアップロードしてネットワーク経由で発表会場のPCで操作する方法がとられた。このため、発表者は30分前に事前登録することが義務付けられていたが、直前まで登録されないケースや自身のPCの使用を希望するケースがいくつかあった。しかしこれらの対応は専門の業者が行ってくれたため、大きなトラブルは起きなかった。

大会組織委員会により詳細な運営マニュアルが作成されたことや、トラブル対応時の連絡系統が明確に取り決められていたことなど、綿密な事前準備によって大変スムーズに運営を行うことができた。

○その他

なし

文責：熊川 大介（国士舘大学）

08 測定評価

会　場：第4校舎B棟13、独立館D202

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

一般研究発表は65演題（口頭発表20演題、ポスター発表45演題）あった。口頭発表は第4校舎B棟13会場で行われ、いずれの研究発表も会場には多くの参加者がみられた。質疑応答では活発な意見交換がなされ、発表時間を越えるほど盛況であったが、座長によるスムーズな進行によって時間内に終了することができた。ポスター発表は9月12日（木）の最終日に独立館D202会場で行われ、13:00～のセッションと13:45～の2つのセッションで行われた。いずれのセッションも会場には多くの参加者があり、発表者との活発な議論がなされていた。口頭発表およびポスター発表共に会場の設備、備品やPC環境は十分整っていたため、トラブル等無く無事に終了することができた。

○シンポジウムについて

シンポジウムは大会最終日（9月12日）の午前に、日本運動疫学会との合同企画として開催された。テーマは“お悩み解決！その研究、どうデザインし、何を測る？”であり、3人のシンポジストがそれぞれ40分程度の発表を行った後、最後には全体討論の時間が設けられた。会場は満席であり、立ち見する参加者が多く見られた。シンポジウム終了後も、参加者とシンポジストとの意見交換が行われるなど、盛況であった。

シンポジウム会場の様子

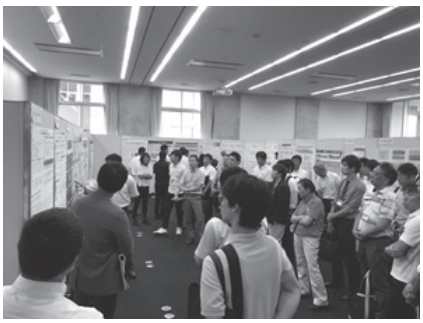
○統計相談コーナーについて

統計相談コーナーは9月11日（水）の午前に開催された。測定評価の専門領域の担当者が複数のブースにて対応していた。参加者の中には、自身の研究データを持ち込み、適切な処理方法やその分析結果の解釈について相談している様子が伺えた。

統計相談コーナーの様子

○運営について

一般研究発表の口頭発表はそれぞれ7分の発表と3分の質疑応答時間が設けられていた。演者の交代時は、スタッフが発表スライドを迅速に切り替える作業を行っていたことから、スムーズな進行がなされた。また、発表者自身が持ち込んだPCの接続についても、セッション開始前に確認作業を行ったため、トラブルは発生しなかった。クラウドを使用した発表データの取得もスムーズに行うことができた。



ポスター会場の様子

ポスター会場は若干の狭さを感じたが、同一時間において2つのセッションが行われたため、参加者が分散された。ポスター発表には2分間の口頭説明が有り、座長の中にはストップウォッチの使用を求める方や計時係をつけてほしいと要望される方がおられた。また、1名の座長がセッション開始の予告なくセッションを開始したため、参加者がいない状況で始まってしまった。座長には、セッション開始前の予告をするよう事前に依頼することが望ましいと感じた。シンポジウムでは、会場の収容人数を越える参加者があり、会場の後方や入口付近に立ち見する人がみられた。このような状況時は、会場の大きさにもよるが、パイプ椅子を追加するなどの対応も必要であると感じた。

文責：田中 重陽（国士舘大学）、福士 徳文（慶應義塾大学）

09 体育方法

会　場：J14・J19（口頭発表）、22・23（ポスター発表）

○一般研究発表について（口頭発表）

1）口頭発表は特に初日の個人発表はPCセンターへのデータの登録が教室PCにうまく届いていないことがあった。教室受付では「PCセンターには行った」が、「PCセンターが混んでいたため登録せず」に教室に来たものの、そのやりとりが発表者から伝えられておらず、データがないということが直前でしかわからない状況となることがあった。3日目にはデータが揃う状態も早くスムーズであった。

2）PCセンターでデータの起動動作を確認してうまくいったのに、ダウンロード先の教室のデータではそれがうまく起動せず、動画が見れないという状況（2名）があった。おそらくデータ自体が重く起動に影響を与えていたのではないかと思われる（PCセンターの仰木先生とその後やり取りして）。

3）発表者は自分のPC持ち込みで発表したいという希望が多かった。その場合は、正規の演者発表位置より大きく離れてしまっていた。

4）レーザーポインターはPCとの位置によってはうまく起動しないので、発表者の近くにPCがあったほうがよい。

5）いくつか口頭発表の場を見たが30人から50人くらいの人の集まりであった。方法に関しては、特に活発な議論が実施された印象はあまりない。もう少し小さい教室でもいいかと思った。

○一般研究発表について（ポスター発表）

一方、ポスター発表では活発な意見交換が行われていた。ただ、ポスターの会場が非常に狭く一人のポスター発表者のところに来場者がくると、隣の発表者はいる場所がないという状況であった。議論も時間いっぱいに実施されていた。研究交流の貴重な場になっていると思った。

口頭発表の教室を小さめにポスター発表会場を大きめに設定するとよい。

○運営について

1）学生アルバイトが責任をもって適切に動いてくれて頼りになった。

2）トラブルが生じたときに、体育研究所の担当の先生（方法だと村松先生）がすぐに本部に連絡を取ってくださるという連携がうまくできており安心して進行ができた。

○その他

特になし

文責：東海林 祐子（慶應義塾大学）

10 保健

会　場：独立館D413、独立館D201

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

保健専門領域における3日間の口頭発表総数は18演題およびポスター発表は5演題であった。

口頭発表は10分の発表時間と5分の質疑応答で行われ、入場者数は、9月10日（火）約50名、9月11日（水）約30名、9月12日（木）約25名であった。

ポスター発表は5分の発表時間後、フリーディスカッションで行われ、入場者数は、9月12日（木）約30名であった。

各発表後に多くの質疑応答があり非常に活気あるものとなった。全体の進行は座長のご協力によりほぼ時間通りであった。

○シンポジウムについて

シンポジウムは9月11日（水）13時より14時半まで、「すぐれた保健授業の実践を目指して（3）」というテーマで行われた。司会は物部博文先生（横浜国立大学）が務められた。シンポジストは、永井真樹先生（横浜市立瀬谷中学校）、山合洋人先生（筑波大学附属駒場中・高等学校）、森良一先生（東海大学）の3名であった。入場者数は約70名と教室全体がほぼ埋まるほどの大人数となった。各先生方からの発表後、活発な議論が交わされたため、定刻より数分超過して終了となった。

○キーノートレクチャーについて

キーノートレクチャーは9月11日（水）10時から11時まで、儀賀理暁先生（埼玉医科大学）による「子供たちががん教育で学ぶものは何か」のテーマで行われ、司会は野津有司先生（筑波大学）が務められた。入場者数は約40名であった。先生の発表後、活発な意見交換が行われた。

○運営について

保健専門領域の運営は、大会運営委員2名および大学生3名で担当した。機器の不具合等が生じることもなく、円滑に運営することができた。

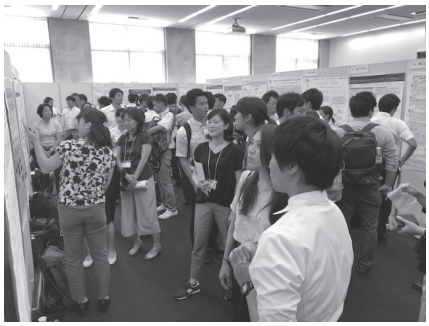
文責：須田 芳正（慶應義塾大学）

11 体育科教育学

会　場：D307, D308, D309

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

体育科教育学の口頭発表は9月10日（火）10時30分～11時30分，12日（木）9時～12時および13時から15時まで慶應義塾大学日吉キャンパス独立館D307，D308，D309の各会場にて行われた．両日合わせて64演題の発表があり，いずれの教室も8割程度席が埋まっていた．各教室ともに参加者から活発な意見交換がなされていた．各発表セクションを担当いただいた座長のご協力により，ほぼスケジュール通りの進行が行われた．ポスター発表は9月11日（水）にD201の教室で行われ，26演題の発表があった．発表・質疑応答は時間内フリーディスカッションであり，大勢の参加者から活発な意見交換がなされて大盛況だった．



○シンポジウムについて

大会2日目の9月11日（水）9時から11時まで独立館DB202にて「『共生』の視点を踏まえたこれからの体育の授業づくり」をテーマとして，吉永武史先生（早稲田大学），三田部勇先生（筑波大学）の司会・進行によりシンポジウムが行われた．萩原朋子先生（順天堂大学）が「『技能差』問題を解決する仲間学習モデルの可能性」，宮本乙女先生は「体育の男女教習・別習を考える」，澤江幸則先生（筑波大学）「インクルーシブ体育の可能性と限界」の演題のもと発表を行った．3名のシンポジストの先生による発表の後，参加者との質疑応答および意見交換が行われた．会場には約200名の参加者が集まり，シンポジウムは大盛況であった．

○運営について

台風15号通過による交通機関の乱れもあったが，体育科教育学の口頭発表およびシンポジウムのプログラムに変更はなく予定通りに進行した．

口頭発表会場はPC，タイムキーパー，ベル，電気OnOff，発表者受付を補助学生3名という少人数体制で運営をしたが，座長の先生方の協力もあり，大幅な遅れもなくスケジュール通りに行われた．口頭発表者はあらかじめPCセンターで発表用のデータを提出して動作確認を行っているため，会場内での作業はなくスムーズに演者の交代を行っていたが，数名に関しては到着の時間が遅れてPCセンターで受付をせずに，直接発表会場へ来たためPCへ接続するのに補助が必要となった．また，発表資料を用意している発表者が多くみられ，受付のテーブルは発表資料でいっぱいとなり，テーブルがもう一台必要だったと感じた．一方，ポスター発表では他の専門領域と会場を共有したが，いずれの領域も参加者が多く，声が聞こえづらいようであり，若干部屋の狭さを感じた．専門領域の関係者の方にはその都度協力をいただき，無事に日程を全うできたことについて感謝したい．

文責：奥山 静代（慶應義塾大学）

12 スポーツ人類学

会　場：独立館 D301
入場者数：9月10日（火）　口頭発表：35名
　　9月11日（水）　口頭発表：37名、映像上映：45名、シンポジウム：42名
　　9月11日（水）　口頭発表：31名、ポスター発表：21名

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

口頭発表は、学会初日の9月10日(火)から3日間にわたり、独立館D310教室で行われた。演題数は、初日が2題、2日目が4題、3日目が4題であった。また、ポスター発表も3日目に1題行われた。

発表内容は、地域におけるスポーツ大会の意義や課題を論じたものから、マンガが高校球児の投球観にどのような影響を与えているかについて考察したもの、カンボジア王国における教科体育の文化史を扱ったものなど、テーマ、対象地域、対象時期の何れをとっても非常にバラエティーに富んだものであった。各発表後の質問や発表者への意見も非常に鋭くかつ示唆に富んだものが多く、質疑応答の時間が不足しているように感じられた。

ポスター発表は、3日目の口頭発表が終了した後、10:30から1時間掛けて行われた。発表は1題のみだったものの、次々に質問が投げかけられ、終了時刻後も議論が交わされていた。

○映像上映について

本イベントは、「民族誌映画『PASAJUEGO』の上映：スポーツ人類学と映像について考える」というテーマの下、2日目の10:30より、およそ1時間半にわたって行われた。

はじめに司会兼コメンテーターの小木曽航平先生(広島大学)より、スポーツ人類学では一般に馴染みのないスポーツを扱うことも多々あるので、いかに情報を共有するかがカギになるのではないかとの指摘がなされ、今回映像上映を企画した意図が語られた。

続いて、ペロタ・ミシュテカというメキシコ発祥の球技を扱った民族誌映画『PASAJUEGO』が上映され、最後に民族誌映画という手法の可能性に関する議論が交わされた。

因みに、会場前にはペロタ・ミシュテカで用いるボールやグローブ、映画に関するポスターなども掲示され、参加者が上映される映画に関する理解が深められるような工夫もなされていた。

○シンポジウムについて

シンポジウムは大会2日目の午後、13:00から15:00までの2時間に亘って開催された。シンポジウムのテーマは「スポーツ人類学と映像」。はじめに司会の中嶋哲也先生(茨城大学)から本企画についての説明が行われた後、松浪稔先生(東海大学)から「資料・教材としてのスポーツ映像」、李承洙先生(韓国中央大学校)より「スポーツ人類学の共有方法を問う」と題した発表が行われた。

松浪先生からは、映像、動画、画像といった言葉の定義とともに、これらの素材を利用する際の注意点などが著作権法に沿って概説された。一方、李先生からは、予め先生自身が編集してYouTubeにアップした映像を授業前に見てくるよう指示したことで、授業での議論がより活発になったことなどが紹介された。

午前中に映像の上映が企画されたこともあり、映像の訴求力ひいてはスポーツ人類学の教育・研究に従事する際に映像を用いることの意義を改めて確認する機会にもなった。

文責：加藤 大仁（慶應義塾大学）

13 アダプテッド・スポーツ科学

会　場：D411、D202

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

口頭発表では、5セッション計19演題が発表された。口頭発表は概ね順調に終えることができた。口頭発表では、秋本成晴氏（筑波大学大学院体育科学専攻）「障害者のエンパワメントとしてのパラリンピックの在り方について：障害種という視点から」が専門領域研究奨励賞を受賞した。ポスター発表では、2セッション計19演題が発表され、順調に終えることができた。ポスター発表における専門領域奨励賞については、該当者なしとなった。

○シンポジウムについて

2日目（9:30-11:30）に、「大学におけるアダプテッド・スポーツ教育その3　学校現場における課題と展望」をテーマに、3名からの発表および会場全体での討議が行われた。活発な討議が展開され、最後に今後に向けた提案がなされた。「アダプテッド・スポーツの必修化」に向けた6年がかりのシンポジウムの集大成としてふさわしいシンポジウムとなった。

○キーノートレクチャーについて

実施されなかった。

口頭発表会場

○運営について

口頭発表では、聴覚障害のある参加者のために、専門アプリケーション「UDトーク」を用いた情報保障を行った。2つのスクリーンを用い、1つは発表スライド（PowerPoint）を表示し、もう1つはUDトークを介した字幕を表示した。UDトークの運用は次のとおりであった。

①会場備え付けのマイクを使用した。

②会場AV機器から音声出力（アナログ出力）し、iPad用マイク入力インタフェースを介して、音声をiPadに入力し、UDトークにてリアルタイムに文字起こしをした。

③誤変換が現れた場合、ただちに３名の入力補助者がそれぞれのパソコンにて、手入力による一部修正を行った。入力補助者のPCは、メイン機器（iPad）と学内無線LANを通じて接続した。

UDトーク入力補助者

PCセンターに登録されたデータに関して、2点のトラブルがあった。

①埋め込み動画に関して、発表会場のPCではコーデック非対応のために表示されなかった。発表者によると、PCセンターでは動作確認できたとのことだった。他の発表では問題なく動画が表示された。

②Keynoteを用いた発表者が１名いた。発表会場のPCではKeynote非対応のため、発表者が持参したPCを会場AV機器に接続し、表示した。発表中に関しては特に問題は見受けられなかった。

ポスター発表ではUDトークによる情報保障を用いなかった。ポスター発表では、学生による補助は不要だったため、補助は受けなかった。

シンポジウムでは、口頭発表と同様に、UDトークによる情報保障を行った。

○その他

特になし。

文責：岩沼 聡一朗（帝京科学大学）

14 介護福祉・健康づくり

会　場：D412

○一般研究発表について（口頭・ポスター発表）

口頭発表：

9月11日水曜日に開催された。小林寛道氏の座長で5人の演者が登壇した会場内での質疑応答もすべての発表で盛んに行われた。全体的にスムーズで活発な発表が行われた。

○シンポジウムについて

9月11日水曜日13:00から14:40に開催された。聴衆は78名であった。坂本静男氏と田辺　解氏の両座長のもと、3人の演者がそれぞれの立場から「健康づくりの最前線」に関する発表を行った。

1人目の柴田　愛氏は『地域在住高齢者における座りすぎの実態と健康影響』の題で、世界的に注目される「座りすぎ」に関する日本の実態と健康に関する指標との関連について報告した。2人目の桜井祐子氏は『足の健康づくり科学の最前線　足部以上に対するトータルフットケアの効果』の題で、足の爪の問題や外反母趾、胼胝（たこ）やうおのめ等の側部異常の改善の重要性と拇趾圧を意識した歩行改善について報告した。3人目の田村好史氏は『骨格筋の量と質と健康寿命』と題して、日本人に多い太っていいなくても2型糖尿病やメタボリックシンドロームとなる人に着目して、「脂肪筋」という事象やメタボリックシンドロームがロコモティブシンドロームにつながることを報告した。演者3名がそれぞれの立場で最近の研究成果を披露し、会場で活発な質疑応答や意見交換が行われ、シンポジウム終了後も会場のあちらこちらで演者を囲んで話す様子が見られた。

最新の健康づくりの情報を共有するとともに、演者と聴衆のコミュニケーションが取れるサイズのシンポジウムであった。

○キーノートレクチャーについて

9月11日水曜日午前11:00から12:00に開催された。聴衆は50名であった。小林寛道氏の座長で塚尾晶子（つくばウェルネスリサーチ）氏による『健康づくり無関心層を減じるプロジェクト　アクションリサーチの重要性』の演題で発表した。健康情報を得ようとしない無関心層への対策として「口コミ」の重要性に着目し、情報を拡散するインフルエンサー（健幸アンバサダー）養成システムとプログラムを紹介し、課題解決に至ったプロセスをアクションリサーチ法で分析した結果を報告した。企業や自治体を巻き込むための関わり方や効果的なインフルエンサーの5つの特徴など、今後の地域の健康づくりに欠かせない知見が紹介され、国民皆保険制度の大切さと現在置かれている危機的な状況を認識することの大切さが伝わるシンポジウムであった。

○運営について

・口頭発表：

演者全員が受付を経て会場入りした。演者発表パワーポイントはPCセンター経由で全て入手できたため、発表がスムーズに行われた。学生のタイムキーパーと座長の先生とのコミュニケーションもよく取れ、時間管理も支障なく行えた。空調や放送、照明など教室の機器はすべて支障なく使用できた。

会場のスクリーンが左右にあるため、レーザーポインターが1面にしか使えず、もう1面ではさしているところが見えなかった。また、「演者」など位置を示す掲示物を黒板に見えやすく貼るためのスペースをさがすのに苦慮した。

・ポスター発表：

ポスター発表の先生が口頭発表会場へお越しになってしまうことがあった。

午前中のポスター貼り付けの時間に会場担当の学生が一人もいない時間帯があった。担当時間は発表が行われる午後からと考えた学生の解釈違いが原因と思われる。幸い、他のスタッフで対応ができ、支障はなかった。

ポスターを貼るための画鋲の位置や向きにこつがあり、板の厚い部分が硬くて画鋲が貼りにくそうな発表者がみられた。

2領域の発表が1会場で行われていたため、発表番号が同じ先生が違う領域のボードにポスターを貼っていた例が1件あったため、担当者で貼り替えた。

・シンポジウム

3名の演者のうち2名の先生がUSBで、1名が持ち込みパソコン（マック）での発表だった。座長、演者共に会場に30分前には集合され、打ち合わせ後にシンポジウムを開催した。

聴衆の数に対して、使用した教室の広さは適切で、こじんまりした中でアットホームな雰囲気で質疑応答も活発であった。

・キーノートレクチャー

座長、演者共に30分前に会場入りし、両者のならびに学生スタッフとの事前打ち合わせもスムーズに行えた。聴衆の数に対して、使用した教室の広さは適切であった。

○その他

演者、座長、会場担当者、会場担当学生ともに連携して大きなトラブルもなく、学会の運営が行えた。

学生スタッフの発表内容対する関心が高く、仕事をしながら熱心に話を聞いていた姿が印象的であった。

同じ大学の学生スタッフ同士の助け合いもあり、他会場の学生スタッフにパソコンの事前総操作や運営などに力を貸してもらう場面があり大変助かった。

会場は空調も使用機器も万全で、心配していたPCセンターからのパワーポイントの取り込みも問題なく進み、スムーズな運営で専門領域の発表を手助けできたと思われる。

文責：太田あや子（武蔵丘短期大学）

キーノートレクチャーの様子

シンポジウムの様子

収支決算報告

第 70 回大会 収支計算書

大会開催日　令和 元年 9月 10日―12日　　当番校　慶　應　義　塾　大　学

（収入の部）

（単位：円）

大科目	中科目	小科目	予算額	決算額	差額	備考
Ⅰ事業収入	1大会収入	(1)大会参加費収入(会員)	12,000,000	14,883,000	2,883,000	
		(2)大会参加費収入(会員以外)	2,900,000	2,333,000	△ 567,000	
		(3)大会号売上収入	0	1,150,000	1,150,000	
		(4)広告・機器展示収入	8,000,000	8,106,276	106,276	
		(5)大会本部交付金	5,000,000	5,000,000	0	
		(6)その他収入				
		・図書展示協賛	50,000	88,000	38,000	
		・情報交換会(1,000円/人)	100,000	298,000	198,000	
		・会場賃貸料		31,752	31,752	
		・お弁当代金		1,057,720	1,057,720	諸会議・ランチョンセミナー分
		・託児所		7,000	7,000	
		・保険料戻り		9,960	9,960	
		・予稿集送料収入		1,600	1,600	
		大会収入計	28,050,000	32,966,308	4,916,308	
	事業収入計		28,050,000	32,966,308	4,916,308	
Ⅱ補助金等収入	1国庫補助金収入	文部科学省補助金	0	0	0	
	2地方自治体補助金収入	(1)　県補助金	0	0	0	
		(2)　市補助金	0	0	0	
		地方自治体補助金収入計	0	0	0	
	補助金収入計		0	0	0	
Ⅲ寄付金収入	寄付金収入	（注2）	0	250,000	250,000	光中央診療所、その他
Ⅳ雑収入	受取利息	受取利息	0	80	80	
収入合計			28,050,000	33,216,388	5,166,388	

（支出の部）

大科目	中科目	小科目	予算額	決算額	差額	備考
Ⅰ事業費支出	1学会大会費支出	(1)給料手当支出	0	0	0	
		(2)臨時雇賃金支出	5,700,000	2,525,000	△ 3,175,000	
		(3)会議費支出	1,000,000	897,028	△ 102,972	
		(4)旅費交通費支出	700,000	595,660	△ 104,340	
		(5)通信運搬費支出	500,000	1,850,035	1,350,035	
		(6)消耗品費支出	800,000	3,705,953	2,905,953	
		(7)印刷製本費支出	6,050,000	7,235,136	1,185,136	
		(8)賃借料支出	3,300,000	3,436,827	136,827	
		(9)諸謝金支出	500,000	139,214	△ 360,786	
		(10)委託費支出	9,400,000	10,575,130	1,175,130	
		(11)雑支出				
		・振込手数料	50,000	85,174	35,174	
		・諸雑費	50,000	23,000	△ 27,000	
		学会大会費支出計	28,050,000	31,068,157	3,018,157	
	事業費支出計		28,050,000	31,068,157	3,018,157	
Ⅱ固定資産取得支出		什器備品購入支出	0	0	0	
支出合計			28,050,000	31,068,157	3,018,157	
収支差額			0	2,148,231	2,148,231	

会計監査

監 査 報 告 書

一般社団法人　日本体育学会
会長　深代　千之　殿

2019 年 11 月 29 日
日本体育学会　第 70 回大会組織委員会

監事　太田 あや子
監事　平野 裕一

2019 年 9 月 10 日から 12 日まで開催された「日本体育学会第 70 回大会（主管：慶應義塾大学）」における会計および業務の監査を行い，以下の通り報告いたします．

1．監査方法の概要

（1）　会計検査について，帳簿，銀行口座通帳，関係書類の閲覧など，必要と思われる監査手続きを実施し，会計書類の正確性を検討した．

（2）　業務監査について，大会組織委員会・大会実行委員会等の会議に出席し，大会組織委員長および事務局長からの業務報告を聴取し，関係書類の閲覧など，必要と思われる監査手続きを実施し，業務執行の妥当性を検討した．

2．監査意見

（1）　収支計算書は，大会の収支状況及びその使途を正しく表示していることを認める．
（2）　大会報告書の内容は事実であると認める．
（3）　大会実行委員長，事務局長および大会実行委員の業務執行に関する不正行為又は法令もしくは定款に違反する事実はないと認める．

以上

諸会議のご案内

理事会

日　時：9月9日（月）　17：45～18：45
会　場：スポーツ棟会議室（2F）

総　会

日　時：9月10日（火）　9：00～10：20
会　場：独立館DB203（BF2）

名誉会員懇談会

日　時：9月11日（水）　12：00～13：00
会　場：独立館D303（3F）

地域協力学会連絡会議

日　時：9月12日（木）　11：30～12：20
会　場：独立館D306（3F）

専門領域連絡会議

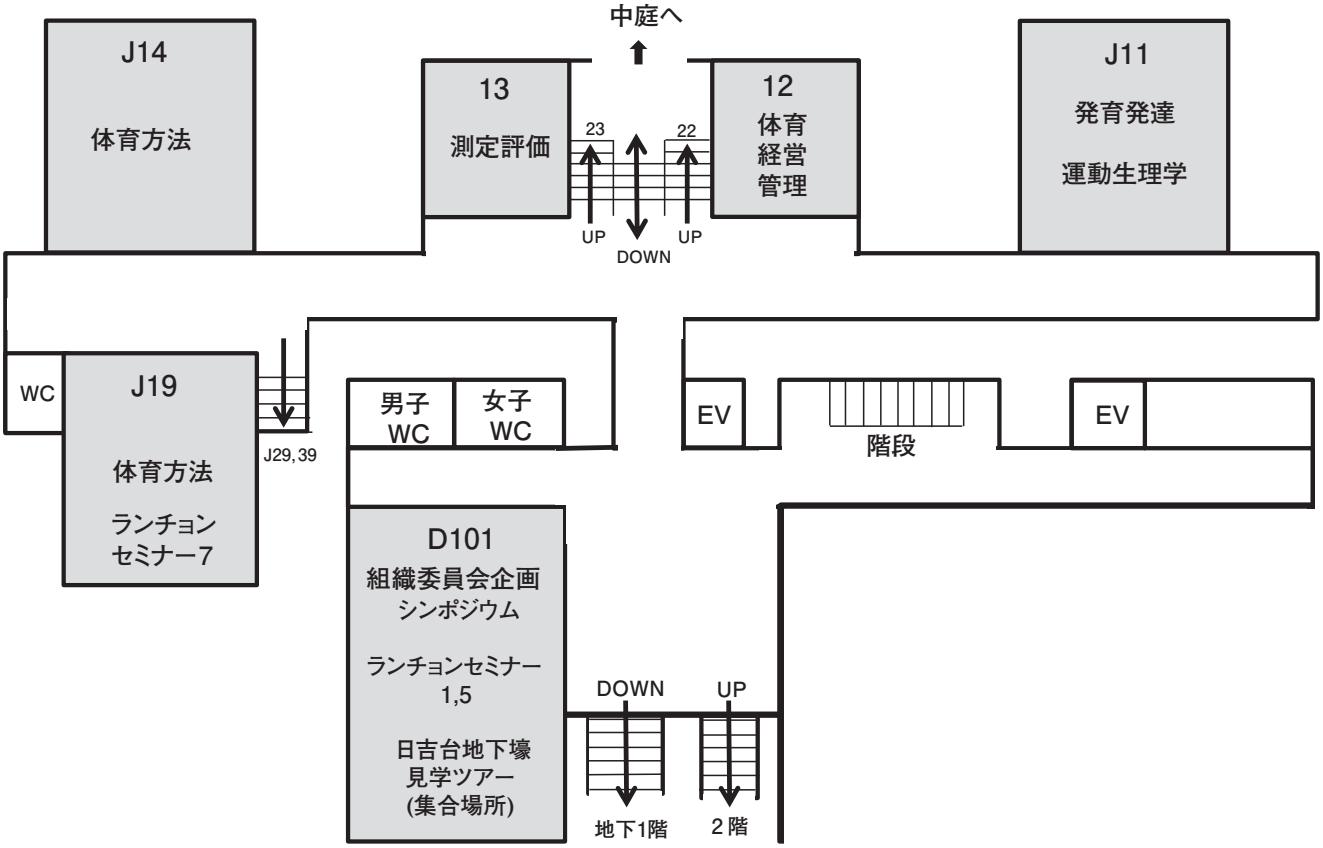
日　時：9月12日（木）　12：30～13：20
会　場：独立館D306（3F）

情報交換会のご案内

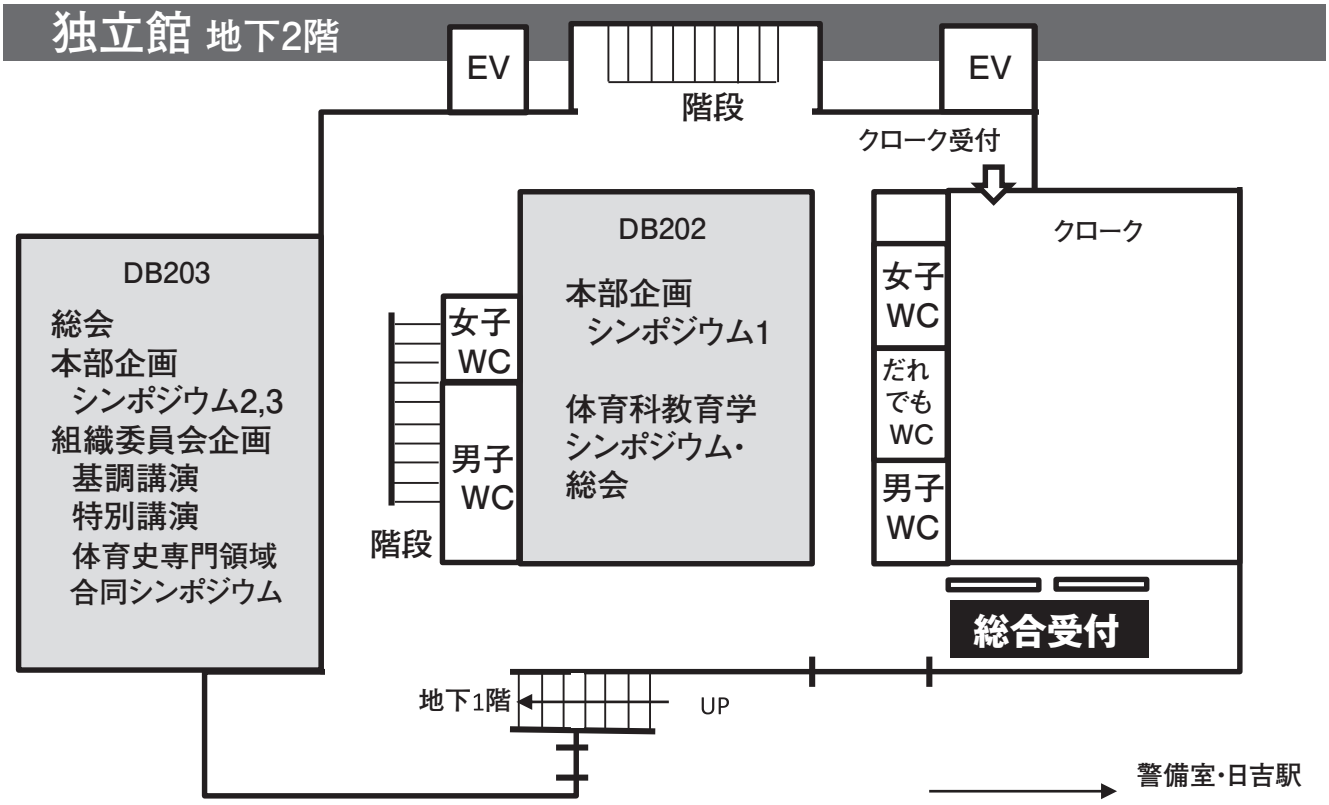
日　時：9月11日（水）　18：15～19：45
会　場：生協食堂
会　費：1,000円（事前申込）
※当日参加されない場合、徴収した参加費の返却はいたしません

会場案内（フロアマップ）

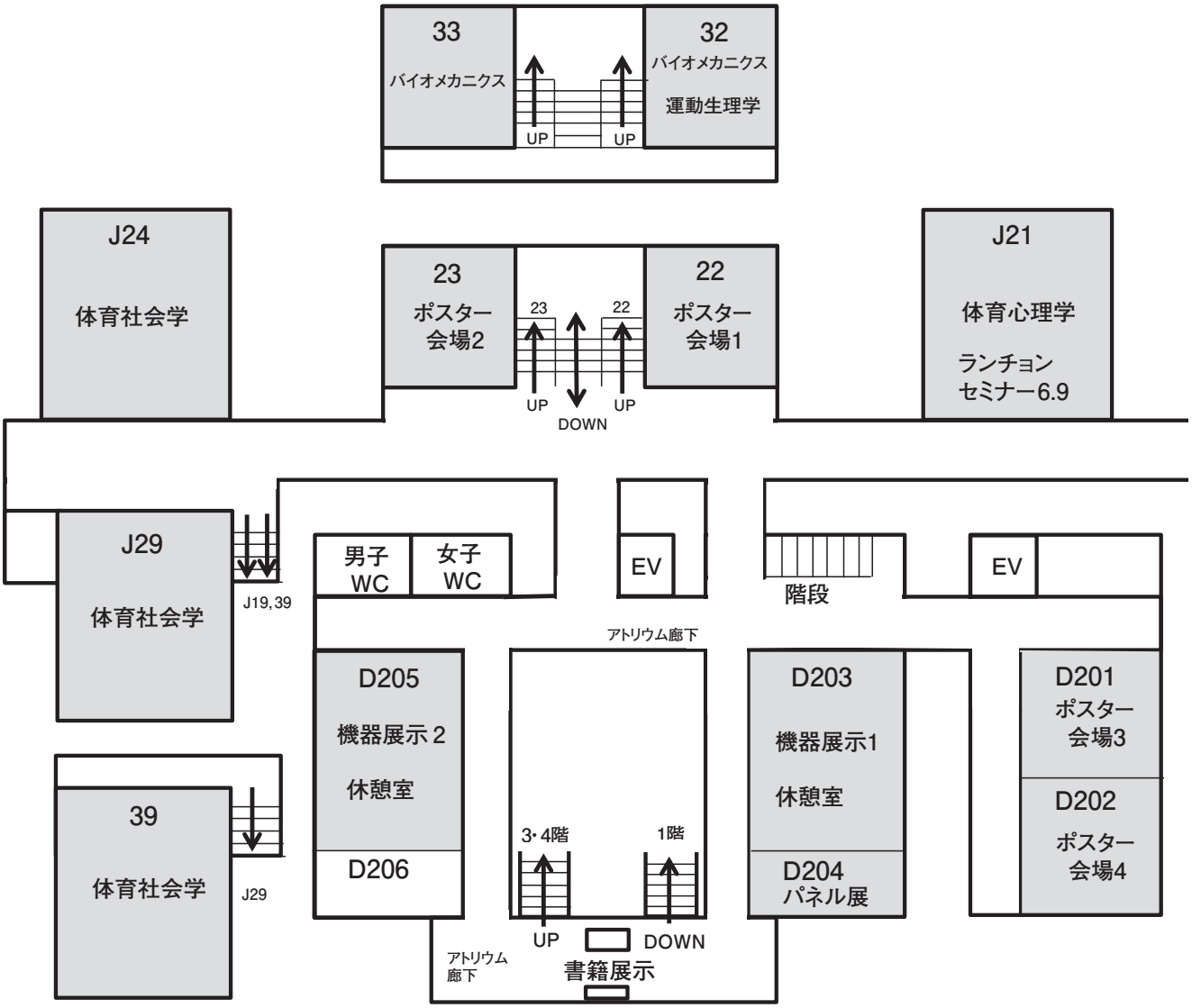
独立館 1階 ／ 第4校舎B棟 1階



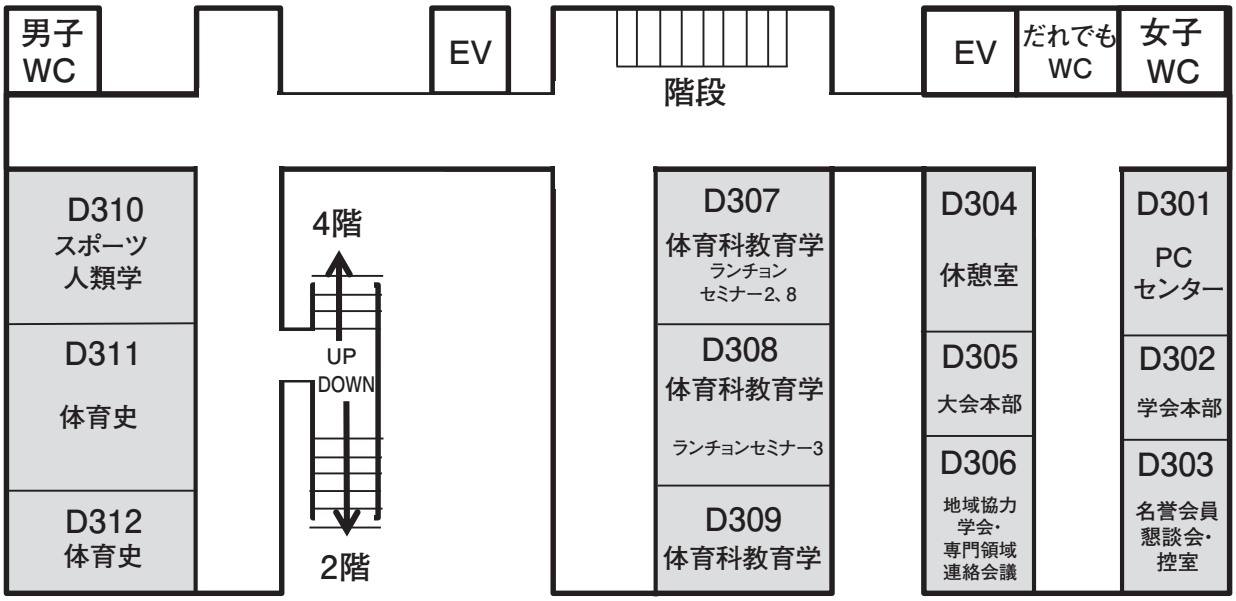
独立館 地下2階



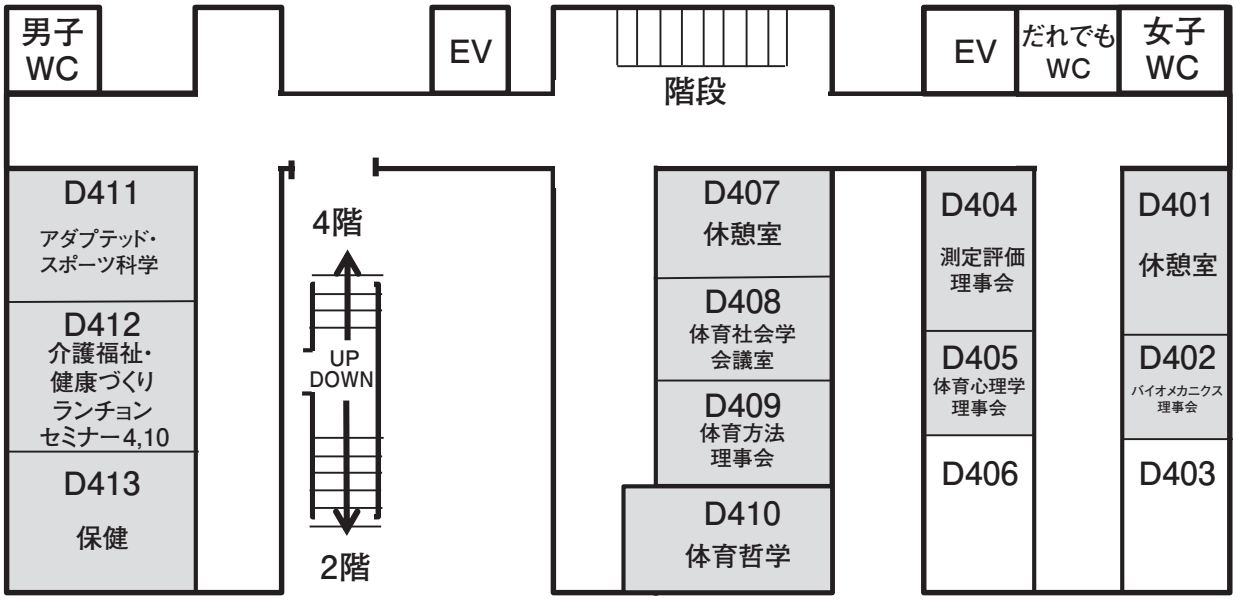
独立館 2階 ／ 第4校舎B棟 2階・3階



独立館 3階


男子
WC
EV
階段
EV
だれでも
WC
女子
WC
D310
スポーツ
人類学
D311
体育史
D312
体育史
4階
UP
DOWN
2階
D307
体育科教育学
ランチョン
セミナー2、8
D308
体育科教育学
ランチョンセミナー3
D309
体育科教育学
D304
休憩室
D305
大会本部
D306
地域協力
学会・
専門領域
連絡会議
D301
PC
センター
D302
学会本部
D303
名誉会員
懇談会・
控室

独立館 4階


男子
WC
EV
階段
EV
だれでも
WC
女子
WC
D411
アダプテッド・
スポーツ科学
D412
介護福祉・
健康づくり
ランチョン
セミナー4,10
D413
保健
4階
UP
DOWN
2階
D407
休憩室
D408
体育社会学
会議室
D409
体育方法
理事会
D410
体育哲学
D404
測定評価
理事会
D405
体育心理学
理事会
D406
D401
休憩室
D402
バイオメカニクス
理事会
D403

参加者へのお知らせ

1. 演題番号

1）一般発表の演題番号の表示は、先頭から専門領域記号 － 発表日 － 発表方法 － 順番を示しています。

専門領域記号

00 哲：体育哲学　01 史：体育史　02 社：体育社会学　03 心：体育心理学
04 生：運動生理学　05 バ：バイオメカニクス　06 経：体育経営管理　07 発：発育発達
08 測：測定評価　09 方：体育方法　10 保：保健　11 教：体育科教育学
12 人：スポーツ人類学　13 ア：アダプテッド・スポーツ科学　14 介：介護福祉・健康づくり

発表日　9月10日（大会1日目）：−10−　9月11日（大会2日目）：−11−　9月12日（大会3日目）：−12−
発表方法および順番　口頭発表：口−01 ～　ポスター発表：ポ−01 ～

例）05 バ−10 −ポ−02 → バイオメカニクス専門領域−9月10日−ポスター発表−2番目
　　11 教−12 −口−16 → 体育科教育学専門領域−9月12日−口頭発表−16番目

2）域横断セッションの演題番号の表示は、先頭からテーマ － 順番を示しています。

領域横断セッションテーマ記号

オリパラ：オリンピック・パラリンピック　トレーニング：トレーニング　大学生：大学生
例）オリパラ−02 → オリンピック・パラリンピック−2 番目
※領域横断セッションはすべて9月10日(火)、ポスター発表です。

2. 総合受付

開始時刻

9月10日（火）～ 9月12日（木）8：15 ～　独立館DB201教室前
受付は、ネームカードに表示してある2次元バーコードを使用します。

大会参加証・ネームカード

第70回大会参加証およびネームカードはプログラムと同時に事前に送付いたします。
必ず持参し、大会期間中は常に身に付けてください。
（再発行に関しては、お時間をいただく場合がありますのでご了承ください。）

参加費未納者

大会参加費未納の会員で当日参加される方は、総合受付で大会参加費10,000円（学生は5,000円）をお支払いください。
非会員で大会参加される方も大会参加費11,000円（学生は5,000円）をお支払いください。
注）学生として参加される方は、学生の身分を証明できるもの（学生証等）をご提示ください。

予稿集の購入

当日予稿集購入希望者は総合受付にて2,000円で購入できます。

クローク（時間と場所）

9月10日（火）・11（水）8：15 ～ 18：00　独立館DB201
9月12日（木）　8：15 ～ 15：30　独立館DB201

発表者へのお知らせ

1. 口頭発表

① パソコン（PC）・プロジェクターを使用する場合

口頭発表では、学会事務局の用意する共用PC（Windows 10/ Office 2016）での発表を原則とします。ただし、動画や共用PCにインストールされていないソフトウェアを使用する場合は、ご自身でPCをご準備ください。ご自身のPCを使われる場合であっても、必ずPCセンター（D301教室）にて受付を済ませ、持込PCを使用する旨をお伝えください。発表時間は座長の指示に従ってください。事前受付の期日は以下の表をご覧ください。

セッション別PCセンター事前受付期間

	セッション	PCセンター事前受付期間
9月10日（火）1日目	午 前	発表セッション開始の1時間前まで
	午 後	前日（9月10日）の12時まで
9月11日（水）2日目	午 前	前日（9月10日）の16時まで
	午 後	当日（9月11日）の12時まで
9月12日（木）3日目	午 前	前日（9月11日）の16時まで
	午 後	当日（9月12日）の12時まで

-A. 共有PCを使用する場合

・発表データの受付はデータのみとなります。USBメモリ（type Aのみ）にPowerPointファイルを入れPCセンターに提出ください。お持ちいただくUSBメモリは、アンチウイルスソフトを使用してマルウェアに感染していないことを事前にご確認ください。お持ちいただいたUSBメモリはその場でお返しします。データの受付作業はスタッフが行います。

【データを提出される場合の注意点】

・発表データを作成する際、使用するフォントはWindows標準のものをご使用ください。特殊なフォントを使用すると文字ズレやレイアウト崩れの原因となります。

・動画は、発表データと動画を合わせてフォルダにまとめてから、PowerPointに埋め込みを行ってください。

・作成いただいたデータは、他の機種で読み取れない場合があります。他の機種でも読み取れることを、あらかじめ確認ください。

-B. 持込PCを使用する場合

・持参したPCを使用される場合、PCの映像出力端子はVGA（ミニDsub-15pin：ピンが三段）に限ります。音声用のステレオケーブルは使用できません。最近の薄型ノートPCやモバイル型ノートPCにはこの端子が付いておらず、変換ケーブルが必要な場合があります。Apple社製のPCを使用の場合も含め、必ず自身で変換ケーブルを持参ください。事務局ではご用意しかねます。解像度は、XGA（1024×768）までといたします。PCのフリーズなどには大会運営本部は一切の責任をもちません。また、それによる発表時間の延長も認めません。

【持込PCを使用する場合の注意点】

・HDMIやMini Display Portなどでの接続はお受けしておりません。

・電源アダプターも必ず持参ください。

・iPadなどタブレット端末による発表はできません。

・スムーズな進行のために、“発表者ツール”の使用はご遠慮ください。

・スクリーンセーバー、ウイルスチェック、ならびに省電力設定をあらかじめ解除しておいてください。解除されていない場合、発表中にスクリーンセーバー等が作動する可能性があります。

②資料を配布する場合

・配布資料に演題番号、演題名、演者氏名、演者所属を明記してください。
・配布する資料の部数は、発表者自身の判断でご準備ください。なお、資料の印刷も自身でご準備ください。
・発表するセッションが開始される30分前までに発表会場受付にご提出ください。

2. ポスター発表

・ポスターパネルのサイズは90cm（横）× 210cm（縦）です。左上角には大会事務局が用意する演題番号を貼付します。ポスターの最上部には、演題、演者、共同研究者、所属を各自記載してください。演題番号と押しピンは事務局が用意いたします。
・演題1つに対して1枚のポスターパネルが用意されます。
・発表者は各会場で受付を済ませてください。受付およびポスターの掲示は発表当日の以下の時間から可能です。各発表前に余裕をもって掲示してください。

1日目：9月10日（火）10：00～	2日目：9月11日（水）8：30～	3日目：9月12日（木）8：30～

・17：00以降に掲示してあるポスターは大会事務局にて撤去し、処分させていただきます。

①領域横断セッション

・領域横断セッションは、「オリンピック・パラリンピック」「トレーニング」「大学生」の全てのセッションを9月10日13時30分～14時30分に行います。各会場の詳細についてはP10の会場図で確認ください。22、23、D201教室を予定しています。
・セッションは“①紹介時間”と“②ポスターでの討議”の2つに分かれます。
・“①紹介時間”では発表者1人に1分の時間が割り当てられ、自身を紹介するスライドにて発表を行います。当該セッションの発表者全員の発表が終了し次第、“②ポスターでの討議”に移行します。
・“①紹介時間”で使用するスライドの詳細については、大会組織委員会から発表者に事前に連絡します。
・“①紹介時間”と“②ポスターでの討議”の進行は各会場のモデレータの指示に従ってください。

②一般研究発表

・ポスター会場は22、23、D201、D202教室のいずれかとなります。会場の詳細についてはP10の会場図で確認ください。
・ポスターセッションは、各領域によって掲示の時間が異なります。発表時間を確認の上で掲示をお願いします。発表者は、各専門領域が指定する責任時間帯に各自のポスターの前に立ち、参加者と討議願います。なお、座長がいる場合は、その指示に従ってください。

3. その他（基調講演・特別講演・ランチョンセミナー・シンポジウム・キーノートレクチャー等）

発表者は、会場に到着されましたら受付にお立ち寄りください。【1.口頭発表】と同様に共用PCもしくは持込PCにてご発表いただけます。

4. 学会年度会費および大会参加費未納者について

・発表者および共同研究者に第70回大会参加費あるいは日本体育学会年度会費の未納者がいる場合には、発表後であっても、学会大会ウェブサイトにて演題取り消しの告知をいたします。
・日本体育学会年度会費は、指定口座から自動引き落としになっています。7月に口座残高が不足していた会員、新規会員で引き落としに間に合わなかった会員においては、11月に再度引き落としがあります。

5. 発表の時間

発表部門	形式	発表時間	質疑・応答時間	形式	発表時間	質疑・応答時間
横　領域横断セッション				ポスター	1分(自己紹介)	時間内フリーディスカッション
00 体育哲学	口頭	20分	10分			
01 体育史	口頭	15分	5分			
02 体育社会学	口頭	15分	10分	ポスター	5分/1人	フリーディスカッション
03 体育心理学	口頭	15分	4分30秒	ポスター	責任着座制(奇数・偶数別、各60分)	
04 運動生理学	口頭	10分	3分	ポスター	5分	2分
05 バイオメカニクス	口頭	10分	3分	ポスター	フリーディスカッション	責任着座制
					＊ショートプレゼンテーション　2分30秒	
06 体育経営管理	口頭	15分	5分	ポスター	時間内フリーディスカッション	
07 発育発達	口頭	7分	3分	ポスター	時間内フリーディスカッション	
08 測定評価	口頭	7分	3分	ポスター	2分	責任着座制
09 体育方法	口頭	10分	5分	ポスター	時間内フリーディスカッション	
10 保健	口頭	10分	5分	ポスター	5分	フリーディスカッション
11 体育科教育学	口頭	10分	5分	ポスター	時間内フリーディスカッション	
12 スポーツ人類学	口頭	15分	5分	ポスター	時間内フリーディスカッション	
13 アダプテッド・スポーツ科学	口頭	12分	3分	ポスター	3分	責任着座制
14 介護福祉・健康づくり	口頭	12分	3分	ポスター	時間内フリーディスカッション	

・各領域の口頭発表：発表終了2分前（呼び鈴回）、発表終了（呼び鈴2回）、全体終了（司会者から指示）

注1）体育心理学専門領域のポスター発表では、演題番号の末尾が奇数である発表者の責任着座時間を9:00-10:00、偶数である発表者の責任着座時間を10:00-11:00とします。

座長へのお知らせ

座長は、担当セッション開始20分前までに（当日最初の座長の場合は30分前までに）必ず会場前で受付をお済ませください。

領域横断セッションについて

【領域横断セッション】

日 時　9月10日（火）13：30～14：30
　※当該時間には大会組織員会企画、本部企画、各専門領域の企画は予定されていません。
会 場　オリンピック・パラリンピック：　ポスター会場1 第4校舎B棟 22
　トレーニング：　ポスター会場2 第4校舎B棟 23
　大学生：　ポスター会場3 独立館 D201

【趣旨】

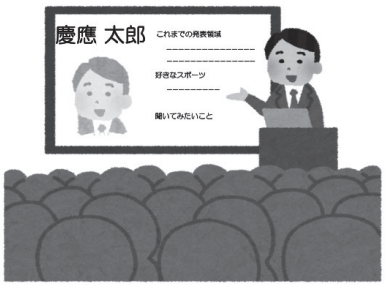
第70回大会では新企画として**「領域横断セッション」**を設けています。領域横断セッションとは、発表する分野が専門領域にまとめられている「一般研究発表」とは別に、特定のキーワードを軸にポスターセッションを行うものです。

本大会では“オリンピック・パラリンピック”、“トレーニング”、“大学生”をキーワードに設定しました。このセッションによってキーワードに関連する様々な研究課題を、領域を越えた場に集め討論をするとともに、会員相互の新たな交流の場とすることをねらいとしています。

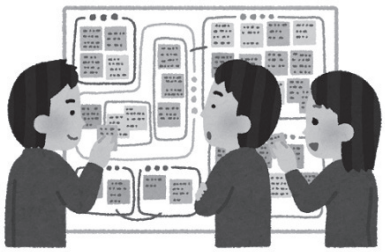
【進行】

セッションは“**①紹介時間**”と“**②ポスターでの討議**”の2つに分かれます。進行は、各会場のモデレータが行います。

① “紹介時間”では各領域横断セッションに応募された発表者1人に1分の時間が割り当てられ、自身を紹介するスライドにて発表を行います。ここでの発表は研究内容を意味するのではなく、例えば、“これまでどのような領域で発表してきた”、“なぜこの研究を実施しているのか”、など、領域横断としての交流が深まるよう自己紹介を含めた発表を行っていただきます。



② 当該セッションの発表者全員の紹介発表が終了し次第、“ポスターでの討議”に移行します。時間の許す限り、討議をお願いします。発表者間の討議も可能です。



託児所のご利用案内

保育室利用のお申し込みにあたっては、下記の事項をご確認の上、「託児申込書／同意書」「調査票」をご記入・ご署名の上、8月27日（火）までにＦＡＸにて送信をお願い致します。

申込書類は大会ホームページ　https://ipe.hc.keio.ac.jp/jspe70/　よりダウンロードください。

◇ご利用対象者◇

日本体育学会第70回大会参加者を保護者とする生後6ヶ月～小学生6年生までのお子様

※当日申し込みはできません（要事前申込）

◇託児料◇

・4時間未満　1000円／1日（税込）

・4時間以上　2000円／1日（税込）

◇託児場所◇

※お部屋はご利用者様へのみ、後日お知らせいたします。

◇開設時間◇

◆2019年9月10日（火）8：30～18：00

◆2019年9月11日（水）8：30～18：00

◆2019年9月12日（木）8：30～15：00

◇託児申込〆切◇

2019年8月27日（火）

◇託児お申込み先◇

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1　慶應義塾大学体育研究所内

日本体育学会第70回大会事務局　託児担当

TEL&FAX：045-565-1656　E-mail：jimu_jspe70-group@keio.jp

◇託児受託企業◇

株式会社クラッシー（公益社団法人全国保育サービス協会正会員）TEL03-5426-2288

【託児ご利用規約】

①お子様をお預け・お迎えの際には、保護者の方の身分証明書を確認させていただきます。当日は必ず、お名前・ご住所が確認できる「身分証明書（保険証・免許証・母子手帳）」をお持ち下さい。
②お預けの前に、必ずお手洗いをお済ませください。
③お預けされる当日の朝、必ず体温を測り、お預けの際にお知らせください。
④お持ちいただくもの
・保護者の方の身分証明書（保険証・免許証等）　・保育中に必要と思われるもの（要記名）

〔おむつ（4～5枚）・おしりふき・お着替え、乳幼児をお預けになる場合、哺乳瓶・粉ミルク
※おやつ、飲み物はこちらでご用意いたします。ただし、アレルギーの方はご持参ください。〕

⑤昼食は、お子様と一緒にお取りいただくか、ご持参の昼食を託児室にて保育士よりさしあげることも可能です。
⑥お迎え時は、受付時にお渡しした「お子様お預かり証」をスタッフにご提示ください。また、お迎えはお預け時と同じ方にお願い致します。代理の方へのお引渡しを希望される場合は、受付時にお申し出下さい。
⑦お迎えが予定時刻より15分以上経過した場合、緊急連絡先へ確認を取らせていただきます。
⑧お預かり開始後37.5度以上の発熱が出た場合には、ご連絡を差し上げお迎えをお願いする場合がございます。
⑨伝染病の病気（水疱瘡、はしか、風疹など）の方、その他当方のやむを得ない理由により、入室をお断りさせていただく場合がございます。
⑩お子様の体調が急変した場合の応急処置、または火災などにより緊急避難を要する場合は、その処置をシッター会社（株式会社クラッシー）にお任せいただきます。また、緊急連絡先にも連絡を取らせていただきます。
⑪不足の事故に対応するため、シッター会社が保険に加入しておりますが、日本体育学会ならびに日本体育学会第70回大会組織委員会は事故の責任を負いかねます。万一事故が発生した場合、その事故がシッター会社の重大な過失によって発生したものでない限り、事故に対しての責任は負いかねます。
⑫守秘義務につきましては、サービスを提供する上で知り得た事項は、正当な理由なく第三者へ漏洩いたしません。この守秘義務は、託児終了後も継続するものとします。

専門領域企画

00 体育哲学

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　9：00〜11：00
会　場：独立館 D410
テーマ：「多様な身体」からスポーツを展望する
司　会：荒牧　亜衣（仙台大学）、松宮　智生（清和大学）
演　者：田中　愛（明星大学）
　　多様な身体と「らしさ」について
　　松宮　智生（清和大学）
　　多様な身体とスポーツ参加をめぐるルールについて
　　竹村　瑞穂（日本福祉大学）
　　スポーツ・ジェンダー問題からスポーツを哲学する

浅田学術奨励賞受賞記念講演

日　時：9月12日（木）　9：00〜10：00
会　場：独立館 D410
演　題：「快としての体罰」にどう向き合うか
司　会：関根　正美（日本体育大学）
演　者：松田　太希（中国地域）

運営委員会

日　時：9月10日（火）　12：30〜13：30
会　場：独立館 D410

総　会

日　時：9月11日（水）　11：00〜12：00
会　場：独立館 D410

01 体育史

シンポジウム

日　時：9月10日（火）　10：30〜13：00
会　場：独立館 D311
テーマ：日本の体育・スポーツにおける武（士）道的性格
司　会：小田　佳子（金沢大学国際基幹教育院）
演　者：アレキサンダー・ベネット（関西大学国際部）
　　日本人の知らない武士道
　　武道の国際的マイグレーションの考察
　　藪　耕太郎（仙台大学体育学部）
　　商品化した武道における啓蒙と営利の二面性
　　前世紀転換期の国内外で出版された柔術教本とその消費的受容に着目して
　　坂上　康博（一橋大学大学院社会学研究科）
　　スポーツの武士道／武道的変容説の再検討
　　拙書『にっぽん野球の系譜学』を中心に

理事会

日　時：9月11日（水）　12：00〜13：00
会　場：独立館 D312

02 体育社会学

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　9：00〜12：00
会　場：第4校舎B棟 J24
テーマ：学校教育におけるオリンピック・パラリンピックレガシーを問う
The Social Significance of the Educational Legacies of the Olympic and Paralympic Games
司　会：吉田　毅（桐蔭横浜大学）
工藤　保子（大東文化大学）
演　者：中塚　義実（筑波大学附属高等学校）
オリンピズムを教育に−2020以降に何を残すか
小澤　直（公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンター）
公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンター（パラサポ）の取組み
佐藤　豊（桐蔭横浜大学）
学校体育におけるオリンピック・パラリンピック教育の充実に向けて
渡　正（順天堂大学）
パラリンピック教育の課題と可能性
石坂　友司（奈良女子大学）
オリンピック教育は日本社会に何をもたらすのか

評議員会

日　時：9月10日（火）　12：00〜13：00
会　場：独立館 D408

総　会

日　時：9月11日（水）　12:45〜13：45
会　場：第4校舎B棟 J24

03 体育心理学

キーノートレクチャー

日　時：9月11日（水）　9：00〜10：00
会　場：第4校舎B棟 J21
テーマ：中途障害に伴う自己の喪失と再構築のストーリー：パラアスリートの語りから
司　会：関矢　寛史（広島大学）
演　者：内田　若希（九州大学）

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　10：10〜12：10
会　場：第4校舎B棟 J21
テーマ：メンタルトレーニング指導の現場：指導者や科学スタッフとの連携
司　会：高井　秀明（日本体育大学）
演　者：荒木　香織（園田学園女子大学）
　　組織を鍛える：スポーツメンタルトレーニング指導士の役割
　　橋口　泰一（日本大学）
　　パラアスリートにおける心理サポート
　　西山　哲成（日本体育大学）
　　指導者の立場からみえる心理サポート

特別レクチャー

日　時：9月12日（木）　11：10〜12：20
会　場：第4校舎B棟 J21
テーマ：Climbing to yourself: A New Perspective on Motor Heuristics and Embodied Choices
司　会：Kazutoshi KUDO（The University of Tokyo）
演　者：Markus RAAB（German Sport University Cologne; London South Bank University, UK）

理事会

日　時：9月10日（火）　12：00〜13：30
会　場：第4校舎B棟 D405

総　会

日　時：9月11日（水）　13：30〜14：30
会　場：第4校舎B棟 J21

04 運動生理学

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　10:00～12:00
会　場：第4校舎B棟 32
テーマ：エクササイズと脳：至適運動から高強度トレーニングまで
司　会：八田　有洋（東海大学）
演　者：八田　有洋（東海大学）
　　ライフステージに応じた運動プログラム
　　麓　正樹（東京国際大学）
　　一過性高強度トレーニング前後の脳活動の変化
　　中田　大貴（奈良女子大学）
　　アスリートの脳
　　木田　哲夫（愛知県医療療育総合センター発達障害研究所）
　　エクササイズと脳：体育・スポーツ科学における展望

05 バイオメカニクス

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　10：30〜12：00
会　場：第4校舎B棟 33
テーマ：The rise of next generation
司　会：布目　寛幸（福岡大学）
演　者：佐藤　菜穂子（名古屋学院大学）
Objective evaluations of dance performance and an application of virtual reality to coaching in hip hop dance
藤原　敏行（大阪体育大学）
Bridging the gap between research and practice in artistic gymnastics
石井　孝法（了徳寺大学）
Judo biomechanics as seeds of learning

キーノートレクチャー

日　時：9月12日（木）　11：00〜12：00
会　場：第4校舎B棟 33
テーマ：筋の肥大は筋力増加のメカニズムなのか？
演　者：Jeremy P. Loenneke（ミシシッピ大学）

理事会

日　時：9月10日（火）　12：30〜13：30
会　場：独立館 D402

総　会

日　時：9月11日（水）　12：00〜13：00
会　場：第4校舎B棟　33

06 体育経営管理

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　9：00～11：00
会　場：第4校舎B棟 12
テーマ：変化する青少年のスポーツ環境と経営課題：部活動改革を契機とした変革のスキームと方法を探る
司　会：木村 和彦（早稲田大学）、嶋崎 雅規（国際武道大学）
演　者：山本 信之（静岡市教育委員会）
　　静岡市型部活動モデルにみる自治体の改革プロセスと課題
　佐藤 充宏（徳島大学）
　　新たなジュニアスポーツシステムと実現に向けた課題
　作野 誠一（早稲田大学）
　　部活動改革に対する地域スポーツクラブの変革と課題

総　会

日　時：9月11日（水）　11：00～11：50
会　場：第4校舎B棟 12

07 発育発達

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　9：00〜11：00
会　場：第4校舎B棟 J11
テーマ：子どもの“元気”を育む身体活動の可能性
司　会：野井　真吾（日本体育大学体育学部）
演　者：近藤　智靖（日本体育大学児童スポーツ教育学部）
　　ドイツにおける「動きのある学校」の試み
　　石井　香織（早稲田大学スポーツ科学学術院）
　　活動的で元気な子どもを育む環境とは?
　　城所　哲宏（国際基督教大学教養学部保健体育科）
　　Stand up in class：児童の座りすぎの解消を目指した学級内での取り組み

08 測定評価

統計・測定評価セミナー

日　時：9月11日（水）　9：00〜10：00
会　場：第4校舎B棟 13
テーマ：世界で活躍するジャンパーの跳ぶ能力の測定と評価
司　会：宮口　和義（石川県立大学）
演　者：木越　清信（筑波大学）

シンポジウム（日本運動疫学会合同企画）

日　時：9月12日（木）　10：00〜12：00
会　場：第4校舎B棟 13
テーマ：お悩み解決！ その研究、どうデザインし、何を測る？
司　会：辻　大士（千葉大学）、中田　由夫（筑波大学）
演　者：小笠原　一生（大阪大学）
　　実効性のあるスポーツ外傷予防戦略の確立に向けた歩み
　　門間　陽樹（東北大学）
　　研究の核心からデザインを考える
　　−我々が研究でやっているたった3つのこと−
　　山次　俊介（福井大学）
　　何を測るかはどのような統計解析を利用したいかで決まる

統計相談コーナー

日　時：9月11日（水）　10：10〜11：10
会　場：第4校舎B棟 13

理事会

日　時：9月10日（火）　12：30〜13：30
会　場：独立館 D404

総　会

日　時：9月11日（水）　11：20〜12：00
会　場：第4校舎B棟 13

09 体育方法

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　10：00～12：00
会　場：第4校舎B棟 J14
テーマ：球技のコーチングに関する一般理論の構築
司　会：會田　宏（筑波大学）・金堀　哲也（読売巨人軍）
演　者：中川　昭（筑波大学）
　　コーチングに関する一般理論をスポーツ類型別に構築する意義と方法
　坂井　和明（武庫川女子大学）
　　球技におけるゲームの構造的特徴
　中山　雅雄（筑波大学）
　　球技におけるトレーニングの原則

理事会

日　時：9月10日（火）　12：30～13：30
会　場：独立館 D409

総　会

日　時：9月11日（水）　12：00～13：00
会　場：第4校舎B棟 J14

10 保健

キーノートレクチャー

日　時：9月11日（水）　10：00〜11：00
会　場：独立館 D413
テーマ：子供たちががん教育で学ぶものは何か
司　会：野津　有司（筑波大学）
演　者：儀賀　理暁（埼玉医科大学）

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　13：00〜14：30
会　場：独立館 D413
テーマ：すぐれた保健授業の実践を目指して（3）
司　会：物部　博文（横浜国立大学）
演　者：永井　真樹（横浜市立瀬谷中学校）
　　山合　洋人（筑波大学附属駒場中・高等学校）
　　森　良一（東海大学）

理事会

日　時：9月10日（火）　12：30〜13：30
会　場：独立館 D413

総　会

日　時：9月11日（水）　11：00〜12：00
会　場：独立館 D413

11 体育科教育学

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　9：00〜11：00
会　場：独立館 DB202
テーマ：「共生」の視点を踏まえたこれからの体育の授業づくり
司　会：吉永　武史（早稲田大学）　三田部　勇（筑波大学）
演　者：荻原　朋子（順天堂大学）
「技能差」問題を解決する仲間学習モデルの可能性
宮本　乙女（日本女子体育大学）
体育の男女共習・別習を考える
澤江　幸則（筑波大学）
インクルーシブ体育の可能性と限界

理事会

日　時：9月10日（火）　12：00〜13：00
会　場：独立館 D309

総　会

日　時：9月11日（水）　12：00〜13：00
会　場：独立館 DB202

12 スポーツ人類学

映像上映

日　時：9月11日（水）　10：30〜12：00
会　場：独立館 D310
テーマ：民族誌映画『PASAJUEGO』の上映：スポーツ人類学と映像について考える
司会・コメンテーター：小木曽　航平（広島大学）

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　13：00〜15：00
会　場：独立館 D310
テーマ：スポーツ人類学と映像
司　会：中嶋　哲也（茨城大学）
演　者：李　承洙（韓国中央大学校）
　　スポーツ人類学の共有方法を問う
　　松浪　稔（東海大学）
　　資料・教材としてのスポーツ映像

世話人会

日　時：9月10日（火）　12：00〜13：00
会　場：独立館 D310

総　会

日　時：9月10日（火）　13：00〜13：30
会　場：独立館 D310

13 アダプテッド・スポーツ科学

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　9：30〜11：30
会　場：独立館 D411
テーマ：大学におけるアダプテッド・スポーツ教育その3　学校現場における課題と展望
司　会：内田　匡輔（東海大学）
演　者：北川　貴章（国立特別支援教育総合研究所　主任研究員）
　　特別支援教育における体育等の授業の実態や課題
　　綿引 清勝（小田原短期大学保育学科通信教育課程　専任講師）
　　高等教育におけるアダプテッド体育・スポーツの成果と課題について
　　特別支援学校における授業実践の比較から
　　萩原　大河（兵庫県猪名川町立白金小学校　教諭）
　　インクルーシブ体育の充実に向けて
　　障害のある児童が標準的に通常学級で体育を学習する地域の事例から

評議員会

日　時：9月10日（火）　12：50〜13：30
会　場：独立館 D411

総　会

日　時：9月11日（水）　11：30〜12：00
会　場：独立館 D411

14 介護福祉・健康づくり

キーノートレクチャー

日　時：9月11日（水）　11：00〜12：00
会　場：独立館 D412
テーマ：健康づくり無関心層を減じるプロジェクト
　　アクションリサーチの重要性
座　長：小林　寛道（東京大学名誉教授）
演　者：塚尾　晶子（つくばウエルネスリサーチ）

シンポジウム

日　時：9月11日（水）　13：00〜14：40
会　場：独立館 D412
テーマ：健康づくり科学の最前線
司　会：坂本　静男（早稲田大学）、田辺　解（駒沢女子大学）
演　者：柴田　愛（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）
　　地域在住高齢者における座りすぎの実態と健康影響
　　桜井　祐子（足の専門校SCHOOL OF PEDI校長）
　　足の健康づくり科学の最前線　足部異常に対するトータルフットケアの効果
　　田村　好史（順天堂大学国際教養学部教授／順天堂大学大学院スポートロジーセンター・代謝内分泌内科学）
　　骨格筋の量と質と健康寿命

理事会

日　時：9月11日（水）　12：10〜13：00
会　場：独立館 D412

一般社団法人 日本体育学会
第70回大会 報告書

2019年11月30日発行

編集　日本体育学会第70回大会組織委員会
印刷　株式会社アドプリント

一般社団法人
日本体育学会
Japan Society of
Physical Education, Health and Sports Sciences